
ガンダールヴの復讐

アホリエッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダールヴの復讐

【Nコード】

N1155U

【作者名】

アホリエッタ

【あらすじ】

ルイズによってアルビオンの露と消えたサイトが時代逆行する話です。

s t g 0 ガンダールヴ、サウスゴータに死す！（前書き）

サイトがシティオブサウスゴータの丘に立ち、突入、戦死に至る話です。

原作ではルイズが自分で立ち向かうと言う設定ですが、本作ではサイトに行けと言い放つルイズです。

ルイズファンの皆様、お許しを。 > m (m <

stg0 ガンダールヴ、サウスゴータに死す！

stg0 ガンダールヴ、サウスゴータに死す！

ド・ポワチエとハルデンベルグ伯爵が蜂の巣となって倒れるのを見た
ウィンブフェンは啞然として立ち尽くした。
何が起こったのか理解出来なかった。

「反乱です。反乱が起きました。」

「ナニ???反乱だと!」

「ロツシャ連隊、ラ・シェーヌ連隊など、街の西区に駐屯してた連
隊および、

一部ゲルマニア軍が反乱を起こしました。

現在街の各地で我が軍と交戦中です。ここも危険です!」

士官は割れた窓とド・ポワチエとハルデンベルグに気づき、ウィン
ブフェンに向かって敬礼した。

「ご、ご命令を！総司令閣下!」

シテイオブサウスゴータに駐屯してた連合軍の崩壊は早かった。
まったく予想してなかった反乱で、指揮系統は混乱した。

原因も分からぬ反乱であった。まさに「想定外」の反乱である。

「くそ、退け、退却だ!!」

「ど、どこまで退却したらいいのですか？」

「知るか、とにかく退け!!」

全軍は大混乱に陥った。このままでは、混乱の隙を敵に突かれる。そうなると壊滅だ。

やっとの事でロサイスまで退却した敗軍は乗船を開始した。

そこにさらなる凶報が。

ロンデニウムから発したアルビオン軍主力の進撃が、予想よりも早いのである。

このままでは………

「明日の昼までには、敵軍の主力はロサイスに突入するでしょう。」

「全軍が乗船するにはどれ程の時間がかかる？」

「およそ、明後日の朝までかかるかと。」

ウィンブフェンは頭を抱えた。

このままでは全軍が敵に倒されてしまう。

何とかしなければ。

ウィンブフェンは考えた。そして閃いた。「アレ」を使おう！

「そうだ、「アレ」を使おう。」

「「アレ」とは？」

「切り札があるじゃないか。我が軍には切り札が。」

今、「アレ」を使わずして何とする。伝令！伝令を呼べ！！」

ルイズの元に伝令がやって来たのは撤退のための乗船を待つ、天幕の中だった。

「ワタシ？」

サイトはルイズから天幕に呼び出された。

「犬！私達が逃げる時間稼ぐために敵に突撃しなさい。
逃げたら平民のメイドを殺すわ。分かったわね。」

サイトは真っ青になった。

七万の敵にデルフだけで、そして援軍ゼロで突撃しろと言う。

死ねと言う命令にも等しい。

だが断れば可愛いシエスタを殺すと言う。

断れない。

自分だけなら逃げる。

だがシエスタや平民の友達には逃げ場が無い。

「……………分かりました。御主人様。」

「逃げたら絶対に分かるからね。死ぬまで戦って敵の足を止めるのよ。分かった？犬！」

そうしたら、平民メイドは助けてあげる。ありがたいと思いなさい。

「

「分かりました。御主人様。」

苦々しい思いでサイトはルイズに返答。

デルフと僅かな食料を持ち、シティオブサウスゴータの丘に向かった。

ゆっくりと消えるサイトの後姿を見てたルイズは

「あの犬が死んだら、また次の使い魔を召喚すればいいわ。」

と、つぶやく。

サイトは黙々とシティオブサウスゴータの丘に向かい、途中で持ってた食料を全部食べてしまった。

どうせ死ぬ身よ、残してても意味は無い。

何でこんな国に来たのだ？

シエスタ達平民と知り合った以外は辛い事ばかりだった。

金も貰えぬ奴隷以下の生活の使い魔。

地球に住む親が見たら、どう思うだろう。

「デルフ、オレ……死ぬのかな？」

「相棒、オレ様は無機物の刀だ。オレ様からは何とも言えない。だが死ぬならカッコ良く死のうぜ。

誰も見取ってくれないと思うなら、オレ様が見取ってやる。他人には葬らせない。絶対に。」

「デルフ、ありがとうよ。お前は本当のオレのダチだ。例えばオレが死んでも次の世でダチになろうぜ。」

「アタボーよ。オレ様もお前が最高の相棒だ。お前以外の使い手には二度と使われないさ。お前が逝ったら、オレ様も土に帰るよ。」

デルフの言葉を聞き、サイトは残る僅かな勇気を心に込めた。

「デルフ、ありがとう。次の世でもダチだ。逝くぜ!!」

サイトは一人、シテイオブサウスゴータの丘に立ち、眼前に広がる七万の敵に向かって雄たけびをあげ突撃して行った。

#####

ホーキンスは己めがけて突っ込んでくる風を見つめた。

本当に速い。

杖を抜いて、呪文を唱えた。

得意の風の刃をまとめて飛ばす。

しかし、ジャンプでかわされる。剣を振り上げ、自分めがけて突っ込んで来る。

ホーキンスは、その姿を目に焼き付ける様に見つめた。

護衛の騎士からもマジックミサイルが飛び、騎士に吸い込まれる。致命傷と思しき傷を負いながらも風は止まらない。

剣士は剣を突き出し、身体ごとホーキンスに突っ込もうとしたが…。

ホーキンスの目の前五サントの位置で剣は止まった。剣士は事切れていた。

ホーキンスが杖で剣を払うと、剣士はドサツと言っ音と共に地に伏した。

「ご無事です？閣下。」 「ホーキンス將軍」と護衛の騎士が駆け

寄って来た。

「大丈夫だ。戦闘は終了だ、損害を報告せよ。」 続々と被害報告がやってきた。

「剣士一人に与えられたとは思えぬ損害だな。」

「ハッ、指揮官、兵士合わせて三百人近くが負傷しました。それよりも、前衛を纏めるのが大変です。今までの進軍速度を取り戻すには一日近くかかります。」

ホーキンスは頷き、倒れた剣士に近づく。

「まだ少年では無いか？」

いかにも黒い髪の見慣れぬ顔かたちをした少年であった。

「羨ましいな。」

「ハッ？」

「単騎よく大軍を止める、か。」

歴史の向こうに消えた言葉で言うならば「英雄」だ。私も將軍ではなく、英雄になりたかった。」

「ですな。釣り合う勲章がない程の戦果ですな。残念なのは彼が敵だという事です。」

「敵とはいえ、また、貴族ではないとはいえ、勇気にはそれに応じた賞賛と敬意を払うべきだと思う。」

英雄を手厚く葬ってやれ。」

「賛成です。」

そう配下の兵士に告げた瞬間、サイトの身体が跳ね上がった。

「なに??」 この場にやってきた時と同じ様な速度で、サイトは近くの森の中に消えていった。

「まったく、使い手を動かすなんて、数千年ぶりだ。吸い込んでた魔法の分だけ動かす事が出来たんだ。しかし、相棒、ボロボロだね?」

サイトはもうピクリとも動かない。

「なあ、相棒、聞こえるか? 相棒、相棒よ・・・。チツ、もう鼓動が止まってやがる。」

相棒、お前さん本当に良く頑張ったよ。ブリミルも真っ青だったろうよ。

また逢う事があったら、今度は好きに生きなよ。ジャジャ馬の小娘の言う事なんざ無視してさ。」

事切れたサイトの靈魂は、デルフリンガーの独り言をキチンと聞いていた。

（デルフ、ありがとうよ。

お前とシエスタ、平民の仲間だけは本当にオレの事を心配してくれたね。

ありがとう。

また生まれ変わって、お前と出会えたら、

絶対に後悔しない人生を送る。

しかし、オレの身体、穴だらけじゃん。シクシク。）

サイトの霊はやがて天に召されるかと思われたが……。

ピカツと光に包まれ、やがて消えていく。

サイトの亡骸は通りかかったティファニアが見つけた、血まみれのサイトのジャケットを墓にかけ手厚く葬った。その場には何故かデルフは居なかったとか。

s t g 0 ガンダールヴ、サウスゴータに死す！（後書き）

今回の話はサイトがアルビオン戦で戦死するシーンです。
原作では虫の息で生きてましたが、今回は戦死してもらいます。

s t g 1 ガンダールヴとブリミル（前書き）

サイトの復活編です。オリキャラでは無く、ブリミルに神となってもらいます。

そしてサイトに対し色々と取り計らって貰います。

この程度では命を賭けたにしても安いと思つのです。自分は。

s t g 1 ガンダールヴとブリミル

s t g 1 ガンダールヴとブリミル

サイトは強い光に飲まれ、天を漂っていた。

「……虚無の使い魔、ガンダールヴの少年よ。大変だったな。」

「へ？誰ですか、オレを呼ぶのは？」

「ワシの名はブリミル。彼の世界、ハルケギニアで始祖と呼ばれる者じゃ。」

すまん、少年よ。ワシの子孫がお前を召喚し、あげくには死なせてしまった。」

「アンタがブリミルさんですか？さすがに今回は参りましたよ。まさか死ぬとはね。」

まあ、もう取り返しがつかないですよ。今更謝られたところで。」

「そうじゃな。そなたの人生をすべて無くしてしもうたからの。」

よってワシからの謝罪の証を受け取ってくれぬか。

そなたの人生の時間を巻き戻してやる。

そして、地水火風、そして虚無。五大系統魔法の全てを使えるようにしてやろう。

それと、ガンダールヴのルーンは消さないでおこう。ルイズとの接続は切れているから安心せい。

ルーンが残っていると色々と便利であろう？ン？

召喚は避けられないが、その後の運命はそなたの自由じゃ。

ハルケギニアを滅ぼすもヨシ。平民万歳の社会にするもヨシ。貴族に復讐もヨシじゃ。」

「ゲツ、マジっスか？そりやありがたいけど……。ガンダールヴのルーンに関してはあるとありがたいですね。ルイズとは切れてるし。」

やはりデルフとこのルーンは兄弟みたいなモンだし。

それと巻き戻す時間ですけど、オレが十歳くらいの頃まで戻して貰えませんか？

召喚前に出来る限り準備して、召喚されたいのです。

さすがに今回みたいにいきなり召喚では、どうしようもありませんが、

時間があれば、色々と準備できますから。」

「ウム、いいだろう。とにかく今回の事はワシからも謝罪させて貰う。」

ついでにデルフも連れて行け。

コイツもそなたが気に入ってたからな。」

「おお、デルフか。ありがてー。」

でもオレの世界で魔法は使えるんですか？」

「ウム、問題ない。地球世界にも精霊や魔法使いは存在する。世界に知られて居ないだけじゃ。」

「そうっスか。」

んじゃ巻き戻されたら目立たない場所で魔法と剣の練習して鍛えておきます。

これまでの経験と記憶も、勿論継承されますよね。」

「当然じゃ、記憶と経験があると無いとでは、全然違う。特に異世界に召喚されてしまうそなたでは、記憶と経験が無いと今回と同じになる。」

それでは侘びにならぬ。

そなたの今回の記憶と経験もちろん、継続される。少年サイトよ、本当にすまなかった。」

「あのジャジャ馬には散々泣かされましたからね。メシはくれねえ癖にムチはくれる。」

褒美も給料もナシのタダ働き。

正に奴隷（使い魔）そのものでしたよ。」

「そうじゃな。人間、働くならそれに見合った給与や待遇は必須じや。」

奴隷では耐えられぬしな。

ワシも子孫がココまで腐るとは、思いもしなかった……。本当に済まぬ。

そなたの今回の報酬を日本円に換算すると数億にはなるじやろう。ワシからの侘びとして、十億、そなたの口座に振り込ませておく。それで何とか堪えてくれ。」

「じゅ、十億ですとおおお！！？マヂっすか！？良いです！ありがたく受け取ります！！」

「ウム、喜んでくれてワシも嬉しい。」

心配しなくともキツネとかタヌキの葉っぱでは無いからな。キチンとした現金である。

ワシの分身が貴殿の地球世界にも存在しておる。その者からの振込みじゃ。

ちなみに、「府利 観瑠」と言う名前じゃ。」

「マンマじゃないっスか？ま、了解です。でも、オレ、カードとか持ってませんよ。」

「心配するな、巻き戻した時点でデルフとカードと通帳、印鑑は同梱して置く。」

街中で巻き戻すと大騒ぎになるから、就寝中に巻き戻そう。」

「分かりました。んじゃ召喚されるまでは、色々と鍛えたり準備しておきます。」

トルステインの貴族にや悪いけど、泣きを見させますよ。」

「ウム、構わぬ。ワシもさすがに今回の騒ぎには呆れておった。同族で争い、サーシャの子孫たるエルフの土地は奪おうとする。」

見苦しくて本当に見るに堪えなかったわ。

おお、そうじゃ。済まぬが、そなたが召喚されるまでに地球世界の色んな技術を覚えて欲しい。」

理由じゃが、ハルケギニアの風石が暴走しかけておるのじゃ。それを防ぐために精霊を押さえ、風石を掘り出す必要がある。」

ハルケギニアの技術では不可能じゃが、地球の掘削技術なら可能じやろう。虚無の魔法でワールド・ドア>世界扉くがある。」

それで呼び寄せられる様にして欲しい。」

「了解っス。与えられた金を株とかで増やして、購入しておきます。オヤジやお袋とも相談しておきます。」

「ウム、頼むぞ。そろそろ時間じゃな。少年サイトよ、しばらくは現世で心を癒せ。」

そして召喚されるまでは、色々と準備してくれ。」

「OKです。じゃ送ってください。色々ありがとうございます。」

「済まぬな。そなたには苦勞ばかり掛けて済まぬ。

運命は変えられぬが、未来は変えられる。そなたの好きに生きてくれ。

それでは。リターン♪」

ブリミルが魔法らしき言葉を唱えると、

サイトの魂は霧となって消え、辺りは静寂となった。

「サイト、頑張れよ。それにしても、ワシの子孫は。

何がブリミル教じゃ。ワシはこんな国にしたいくて魔法を作ったのではない。

平民を虐げ、エルフを憎悪し、国も大地も疲弊させ、発展も無い。六千年もワシの世と変らぬなど、何が国じゃ。

呆れてしまうわい。サーシャよ、ワシはオヌシに逝かされて幸せだったかも知れぬな。

愛する者の手にかかれて。。。」

ブリミルはそう呟くと、やがて姿は霧散してしまう。

そしてサイトは魂と十歳のサイトが併合し、光輝き。。。
手元にはデルフとカードがあつたとか。

s t g 1 ガンダールヴとブリミル（後書き）

サイト君の復活編でした。

次話から現代へ、そして本編となります。

チートとはなりますが、話の関係上、ご了承ください。

誤字とかありましたら、ご報告して頂けると助かります。

投稿前にフォームで確認はしていますが。

では。

プチ魔王様、誤字その他のご指摘ありがとうございました。

訂正しました。 > m (—) m <

ガンダールヴのルーンを残す設定としました。

やはりデルフリンガーが手元にあるのにルーンが無いと使えませんからね。

6 / 1 7 日、サブタイトルを変更しました。

s t g 2 チビッコガンダールヴ（前書き）

今回からサイトが現世での復活編です。

色々とチートとなりますが、ご容赦お願いします。

サイトの両親の氏名は出しません。極力原作キャラの名前で進めたいので。

stg2 チビッコガンダールヴ

stg2 チビッコガンダールヴ

前世の魂と併合したサイトは起きると手元にあるデルフとカード、通帳と印鑑を確認した。

暗証番号が2004なのは笑えた。

口座を見ると「平賀才人」と書いてあり、金額も確かに十億となっていた。

「暗証番号が召喚される年なのかい。オイ、デルフ。起きてるか？」

「オツ、相棒、小さくなったな。」

ブリミルから色々聞いたと思うが、次では好きに生きろよ。」

「アタボーよ。もうジャジャ馬娘の好きにはされないぜ。」

とりあえずオレの両親には説明しとかなないと。お前も協力してくれよ。」

「ウツス。分かったぜ、相棒。」

サイトが朝から独り言を言ってるのを不思議に思った両親は、

「サイト、起きてるの？何を独り言言ってるの？」

と聞いて来たので、オレは母さんに相談する事にした。

やはり親に黙ってはとうしようも無いからね。

「母さん、父さん、大事な話があるんだ。

悪いけど、今日は学校休ませて欲しい。

そして父さんも仕事休んで、相談に乗って欲しいんだ。」

「分かりました。じゃあ着替えて下に下りてらっしゃい。

お父さんには私から話しておきます。」

「ゴメン、ありがとう母さん。」

サイトは着替えて、デルフとカードと通帳印鑑を持ち、
両親の待つ茶の間に下りて行った。

「父さん、母さん、今日はごめんな。

大切な話って言うのは今から七年後、

オレはある魔法の世界に召喚されてしまうんだ。

今のオレは七年後の未来で一回死んでしまった魂と十歳のオレが併
合した人間です。

この刀は未来の異世界でオレと戦ってくれた、デルフリンガーと言
うインテリジェンスソード。

魂のある刀です。」

「相棒のオトンとオカンかい？

俺様はデルフリンガー様だ。ヨロシク頼むぜ。」

カタカタと言いながら言葉を話すデルフと

十歳とは思えぬサイトの言動にビクリする両親でした。

そしてサイトは左手を見せて、見知らぬ文字が手にあるのを見せる。

「この文字はあの世界でオレの手に刻まれたガンダールヴと言うル
ーンです。」

コレがあゝの国で、オレに渡された唯一の財産です。」

「し、死んだつて。サイトは未来で死ぬのか？親よりも早く。
そしてその手の刺青みたいなのが、刻まれたですつて。何て事なの
・・。」

「う、ウン。

自分の意思とは関係なく魔法使いの使い魔にされて奴隷以下の生活を強いられ、

そして戦つて死んだ。それが未来のオレです。

一回完全に死んで、地獄でも落ちると思つてたら、あゝの世界を作り上げたブリミルと言う神様みたいな人の侘びで、十歳のオレに巻き戻してくれた。

ブリミルの話では、過去を変えるのは色々と難しいが未来は変えられる。

オレが召喚されるのは七年後の2004年、秋葉原だ。

だが、それまでに色々と準備は出来る。

魔法も使えるみたいだし、地球との往復も出来るらしい。

だからそれまで、徹底的に準備しておきたいんだ。

父さん、母さん、オレはもう死にたく無い。

だが、召喚されるのは避けられない。

なら、アノ世界で奴隷にされない様に鍛えておきたいんだ。

父さん、母さん、お願いだ。協力してくれ。」

あまりの内容に虚脱してしまった両親だが、

ウソとは思えぬ。ましてや不思議な刀も居る。

サイトも十歳とは思えぬ言動。

「分かった。サイト。すべて信じよう。

お前が未来で死ぬのを避けるためなら、

自分達はそれまでお前の思う通りに協力しよう。」

「そうよ、サイト。貴方が死ぬなんて私もゴメンです。で、その魔法使いつて、女の子？男？？」

楽しそうな顔してサイトに迫る母親に少し引きながら。

「女の子です。一応。でも凄い我俣でメシはロクに食わせてくれな
い。」

ムチでは叩く、そして戦争のコマにはすると、ロクな扱いじゃなかった。

名前はルイズと言う貴族の三女です。

ソイツの我俣でオレは七万の敵に突っ込まされ、死にました。」

「「な、七万の敵に？？」」

「ハイ。そのデルフを振り回し、敵陣に突っ込み、数百人は倒したけど、

最後は魔法や銃弾、刀に倒され、息絶えた時に。」

「おお、相棒が倒れて、

オレ様が魔法吸い込んでたおかげで相棒が敵に葬られるのは何とか避けられたぜ。

でも、相棒は息してなくてよ。」

「そうか。苦労したんだな。サイト。」

父親も母親も子供のあまりに悲惨な未来に、すっかり悲しくなり、涙ぐんでた。

「ウン、あの世界じゃ誰も知り合いも居ない。

月が二つあるのを見て、自分の生まれた世界じゃない。

父さんも母さんも友達も居ない。

良く泣いてたよ。」

平民の友達だけはご飯分けてくれたり色々と助けてくれたけど、

貴族のガキは本当に我侭で、どうしようも無かった。

アレだけ働いてたのに、一円も給料もくれなかった。

奴隷より酷い扱いだったよ。

そして死んだしね。」

「ゆ、許せないわ。私達の子供をムリヤリ奪い、

虐げ、報酬も与えず殺したなんて。絶対に許せない。」

「ウン、オレも本当に怒ってる。

で、さ。ブリミルって神様が色々と謝罪してくれてね。

報酬も無しじゃあまりにも不憫だからって。

十億くれたみたいなんだ。」

「へ????十億。タヌキとかキツネの葉っぱじゃ??」

「違うって。本当の金らしいよ。でさ、その金で色々と準備しておきたいんだ。

召喚されるのは確実だから、その際に持ち出せる様にしておきたいし。」

「そうか。遊びの金では無いなら、サイトの思う様に使うといい。お前が働いた報酬だしな。でも親で協力出来る事があるなら何でも言いなさい。」

私達はお前の親だ。今度は絶対に倒れるな。生きて帰るんだ。」

「ウン、オレも死ぬのは病気が老衰だけにしたいよ。もう他人のゴタゴタで殺されるのはマッピラだ。でも召喚は避けられない。」

だから、色々と準備とか身体を鍛えておきたい、知識も必須だ。」

「そうだな。私達もこの世界ならともかく、異世界だと助ける事が出来ない。この世界に居る間に出来る限りの準備をしておくべきだ。」

「サイト、その世界にはもしかしたら貴方の好きな子でも出来た？」

「か、母さん。。鋭いね。確かに平民のメイドの子でシエスタと言う子が居た。」

そつだ、シエスタのお爺さんが日本人なんだ。

悪いけど調べて貰えないか？

名前は佐々木武雄、日本海軍のゼロ戦のパイロットだったんだ。

戦時中にハルケギニアにゼロ戦と一緒に迷い込んで、

あの世界で所帯を持って亡くなったらしい。」

「分かった、厚生省に問い合わせて調べて見よう。

戦死者名簿に載っているとと思うし、

パイロットならそんなに多く無いから調べられるだろう。」

「ありがとう。向こうの世界から往復が出来る様になったら、一度シエスタを日本に連れて来ます。」

「楽しみね。サイトの彼女なんて」

「まあ待つてね。今度はオレは絶対に死なない。

そうだ、この金をさ、父さんが管理して、出来れば増やして欲しいんだ。

訳はあの世界に地球の色んな技術や兵器を導入したい。

それには多額な金が必要。

オレは向こうに行ったら、ルイズの使い魔に一応はなって、行方をくらす予定にしている。

もう奴隷はコリゴリだしね。」

「大丈夫か？知り合いも居ない世界で。」

「ああ、もう一回暮らしたし、色んな経験は積んだからね。平民の皆と何とか出来るよ。

とにかく貴族の連中とは別れる。」

「分かった。

じゃ、我々も何時かはハルケギニアに移住するか、繋がりを持とう。それまでに日本で会社を立ち上げ、資金と伝手を増やしておくべきだ。」

「とりあえず、このお金はサイトが持つていなさい。

父さん達には一億だけ回しておけ。それを元手に会社を立ち上げる。母さん、お前も手伝え。」

「当たり前ですわ。サイトのお嫁さんを連れて来て貰うためにも頑張らないとね。

さあ、忙しくなるわよ。」

こうして、平賀一家は一致団結、サイトのハルケギニア召喚までに、平賀家強化週間となった。

父親は勤めてた会社を辞職し、サイトから預かった資金と預貯金で貿易会社を設立。

欧米の軍事関係とも関係を深め、兵器の取引も始める。＞海外のみでの取引です。

サイトは学校に通いつつ、空手、剣道、その他の武道を学び、週末は郊外の山に籠り魔法の訓練。

ガンダールヴのルーンが目立たない様に普段はサポーターを手に巻きつけ、偽装。

ブリミルも霊となって現れ、魔法詠唱を教えてくれた。

ブリミルの言う通り、四系統の魔法はすべて使える様になってた。

あの憎きワルドの偏在も十数体も偏在が出来る。

もはやハルケギニアの魔法なら土、火、水、風。すべてが完璧に出来る。

虚無については、威力が大きすぎる問題もあるので、

ハルケギニア召喚後、ハルケギニアで授ける予定とした。

もつとも四系統のスクエアが使えるれば普通には十分だが。

金の鍊金も出来たので、鍊金した金を父親の会社に流し、

平賀商事は数年で大きな会社となった。

武器も米軍の流出品を多数ゲット。実弾に関してはサイトの鍊金で作る保管。

佐々木武雄の出生地も分かり、佐々木一家とも交流が始まる。

佐々木家にはサイトと同級の女の子も居て、名前が「志江子」と言う。

シエスタとソックリだった。

佐々木家の家督には

「異世界に貴方の父上が居ました。
名前は武雄、ゼロ戦も異世界にあります。
そして孫はシエスタと言います。」

そう事実を告げた。
色々と言うと、

納得してくれたみたいです。＞武雄のゼロ戦の写真も残ってたので、
正確に指摘した。

こうして七年の歳月の間、一家は多額の資金、武器。サイトは以前
とは別物の鍛え上げた肉体、知識を持つに至った。
そして2004年。いよいよ召還の時。

s t g 2 チビッコガンダールヴ（後書き）

色々と誤字が出てたので、訂正しております。

今まで色んなSSを拝見していましたが、本当に大変ですね。

皆様の苦勞が始めて理解出来ました。

批判も受け付けます。アンチですので批判は当然と思っています。

6 / 1 7 日、サブタイトルを変更しました。

s t g 3 新たな旅立ちのガンダールヴ（前書き）

いよいよハルケギニア編です。

ルイズの凋落人生の始まり。オスマンも零落れて貰う予定です。

stg3 新たなる旅立ちのガンダールヴ

stg3 新たなる旅立ちのガンダールヴ

七年の準備期間を終え、サイトはいよいよ召喚される日となった。

「父さん、母さん、いよいよ今日は召喚される日です。

しばらくは音信不通となりますが、向こうで虚無が発動できたら、一回帰ります。」

向こうでは、平賀家の跡取りとして振舞うつもりです。

平民と言つと舐められますので。」

「当然だ、サイト。

権力には気迫と振る舞いで齒向かえ。

お前には力も財力もある。

今日は持てるだけの武器、荷物、資産を持って行け。」

「サイト、大変だと思っけど命は大切にしてね。

絶対に死んではダメですよ。そしてシエスタちゃんを早く連れてらっしゃい。」

「ハイ。じゃそろそろ時間です。行きます。」

サイトは貴族みたいな派手な格好をして、デルフは布に包み、色んな荷物をバッグに詰め、秋葉原に旅立った。

「向こうに着いたら虚無に目覚めないとな。

そうだ、一回ブリミルも呼び出して見よう。」

色々考えながら歩いてると、秋葉原に着く。そして・・・

「お、やはり召喚魔法が発動してるな。

忘れ物はナシ。デルフ、そろそろハルケギニアに帰るぞ。」

「相棒、久しぶりだな。ま、相棒の好きに生きろよ。」

「おお、当たり前よ。そんじゃ行くか。」

サイトは静かに鏡をぐり、ハルケギニアにと旅立つ。

その頃、トルステイン魔法学園では。

「や、やったわ。遂に私の使い魔が召喚されたわ。」

煙の中になにやら人らしい姿があり、今まで失敗してたルイズは大喜びしてた。

出て来たのが人間と知ると開口一番。

「アンタ誰？」

サイトは七年ぶりの御主人様の姿を見て、
「変らないな？このツルペタは。。」
と、頭の中で考えた。

「オレは平賀家当主の跡取り、平賀才人、
コチラの呼び方だとサイト ヒラガ。日本帝国の貴族だ。」

ルイズとコルベールはパニックだ。
平民とは違う、貴族らしい格好。そして振る舞い。
まさか貴族とは。

「サイト ヒラガ殿、私はこのトルステイン魔法学園の教師です。
貴方はこのルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエール嬢の
使い魔として召喚されたのです。
もし良かったら交渉に応じて頂けませんか？」

「ハ？使い魔と・・・」

我がヒラガ家の次期頭首たるこのサイトを？冗談では無い。」

「困りましたね。貴方に断られると、このルイズ嬢は留年してしまう
のです。」

「そ、そうよ。アンタ、私の使い魔なんだわ。だから使い魔になり
なさい。」

「このドアホ。たかが小娘の癖に何を命令する。我がヒラガ家を舐めてるのか？」

「キイイイ。私こそヴァリエール公爵家の三女よ。私の言う事を聞きなさい。」

「フン、タダのメスガキの分際の癖に。どうせ魔法も使えないゼロの無能だろうが。」

周囲から、そうだそうだ。

ゼロのルイズだぞ！！とヤンヤとヤジが飛び交った。

「ア、アンタ。何を言うのよ。」

「だから魔法も使えない無能の小娘と言ってるんだ。オレは四系統の魔法をスクウエアで使えるぞ。」

「ウ、ウソ。アンタどう見てもこの国の人間じゃないわよ。それなのに魔法をスクウエア？」

「おお、んじゃ見て見な。ユピキタス、デル、ウインデ。。。」「

サイトが杖を抜き（屋久杉の数千年の樹木の枝から作り上げた名品です。）

偏在の魔法を唱えると、十数体のサイトが出現。

それを見てたギトーは「自分より凄い風使いだ。」と狂気し、ルイズは「お、お母様よりも強いかも。」と真っ青。

「さあ、これでどうだ？あ、それからな、自分はブリミルも知って

る。

彼から自分は魔法を受けて貰ったからな。」

「ブ、ブリミル様?????」

「おお、そうだ。お前等が信仰するブリミル教の始祖、ブリミルだ。彼はオレの師匠だ。」

「だって、あの方は六千年前の。」

「今は神となってる。そしてオレは異界で彼に師事した。だからこの世界の事も詳しく知ってる。よってお前の使い魔となる気はない」

コルベールは心底困ってしまった。コレではどうしようも無い。そうだ」

「サイト ヒラガ殿。

では申し訳ありませんが、校長のオールドオスマンに会って頂けないでしょうか？

少しお待ちして下さいね。他の生徒の皆さん、今日の授業は中止です。

各自、自室に帰り、自習しててください。

サイト ヒラガ殿、それでは向こうに見える建物が学園です。行きましょうか？」

「ああ、それならいいぞ。んじゃ行きましょう。」

サイトはそう言う杖をふるい、フライを詠唱。フワリと浮くとコルベールと共に学園に行く。

ルイズは完璧に無視して。

「ア、アタシも連れて行きなさいよ~~~~~!!」

哀れルイズは一人トボトボと学園まで歩いて行く。

そうして一人で歩くルイズはグルグルと悩んでた。

（アタシは使い魔と呼んだハズだ。でも現れたのは他国の貴族。それも凄いスクウェアクラスの風のメイジ。アタシとは大違いのメイジ。

とてもアタシでは使えない。でも使い魔が居ないと、どうしようも無い。

留年したらアタシは勘当されてしまう。どうしたらいいの?）

ルイズはすっかり落ち込み、悩み、学園の校長室へと歩き続けた。

所は変って学園の校長室では、サイト、コルベールはレビテーシヨ
ンで校長室に先に着いてた。

そして開口一番。

「自分は日本帝國、ヒラガ家次期頭首、サイト ヒラガと言う。
今回の拉致はどう責任取るつもりか?」

と、オールドオスマンを恫喝してた。

「は、ハア。それは本当に申し訳ないと思う。ワシはこの学校の校長、

総責任者のオールドオスマンと申す。

サイト ヒラガ殿、本当に申し訳ない。で、貴殿の国はどこにあるのか？」

「ハア？

まだ双方の見解も得られていないのに何故コチラの情報を与えなければならぬのだ？

場合によっては戦争にもなるのだ。

自分は日本帝國、ヒラガ家の次期頭首、たかが学校の校長如きに舐められる言われは無い。

お前等の国のトップでも呼んで貰おうか？

自分の言う事が信用出来ないと云うなら、お前らの信仰するプリミルも呼べるぞ？

もっともお前等だけの場合は呼ぶつもりも無いがな。さあ、どうする？」

オスマンの話も鼻から叩き折り、初っ端から突っ込みまくるサイトであつた。

>父親の教育と前世の記憶からこの国のすべてを記憶しており、オスマンもガキ扱い。

それにブリミルからも色々とハルケギニアの歴史も聞き、魔法の自信もあり、

気力も充実してたので、怖いものは無かつた。

「そ、そうですね。。。うーん、困りました。。。」

そこへ歩いて来てたルイズも到着。

「遅れて申し訳ありませんでした。ルイズです。オールドオスマン。ミスタコルベール、どうなりましたか？」

「オイ、小娘。貴様はオレに謝罪も無いのか？
お前の国とオレの国と戦争もありえるのだぞ。少しは足りない頭を使え。」

サイトは冷静に、ルイズを責める。これにはルイズも一言も言えなくなり、
真っ青から蒼白になる程困り果てた。

（どうしたらいいの？戦争なんて、アタシではどうしようも無い。
アタシはただの貴族の小娘。
平民かと思ったら使い魔はどこかの国の貴族。
困ったわ。どうしょ・・・。）

オスマンも困り果ててた。そして・・・。

「サイト ヒラガ殿、本当に申し訳ありません。
では、私がこの国のトップ、アンリエッタ王女に連絡を取ります。
しばらく時間を頂けないでしょうか？どうかお怒りを納めて頂きたいのです。」

オスマンはもはや自分では責任を取れないと痛感してた。
コレで自分の経歴も終わりだと諦めた。
もう国として話すしか無い。もし戦争となったらどうしようも無い。

「ウム、それじゃ待たせて貰おうか。オレをどこかの部屋に案内しろ。」

ああ、食費程度ならこの国の金貨も持って来たから自分で賄うぞ。

交渉が成立するまでは、お前等の世話になるつもりも無い。

さ、部屋まで案内しろ。それから覗きの魔法なぞ発動したら、即刻開戦だからな。

オスマン。絶対に覗くな。

お前の使い魔の覗きネズミの事もブリミルから聞いて知ってる。」

「わ、分かりました。サイト ヒラガ殿。
では、メイドを呼びます。

メイドに貴族の来賓室に案内させますので、しばしお待ちください。

」

「ウム、では待たせて貰おうか。」

そう言うと、ドッカーと椅子に座り偏在に周囲を警戒させ、メイドが来るのを待つ。

コンコン。

ノックの音が響き、メイド到着。

「オールドオスマン、お呼びでしょうか？」

現れたのは懐かしきシエスタでした。

「ウム、メイドよ、コチラに居られるサイト ヒラガ殿を貴族の貴賓室に案内して欲しいのだ。

そして済まぬがこの方の御付のメイドとなって欲しい。」

サイトは思った展開になった事に狂喜してた。顔には出さないが。

(^ _ ^)

（ラッキー♪初っ端からシエスタに会えるとは。
ヨッシャー！！彼女と二人つきりになれたら、色々と討議しよう。彼
女の従兄弟の写真もある。）

こうしてサイトの二度目のハルケギニアの人生は始まった。

ルイズにとっては最悪の人生だが。知った事では無い。

s t g 3 新たなる旅立ちのガンダールヴ（後書き）

ルイズ達との再会。

そして恫喝です。貴族と言う種族は権力と気力に弱いと思います。

サイトには気力を最初からガツンと言って貰いました。

舐められたら終わりですからね。

次回はシエスタとの会合です。

6 / 17 日、サブタイトルを変更しました。

s t g 4 ガンダールヴとシエスタ（前書き）

第四話を更新出来ました。

stg4 ガンダールヴとシエスタ

stg4 ガンダールヴとシエスタ

ルイズやオスマンと別れ、サイトとシエスタは貴賓室へと歩いてた。

「き、貴族様、私はシエスタと言います。どうか宜しくお願いします。」

「ウム、オレはサイト・ヒラガと言う異国の貴族だ。シエスタ、ヨロシクな。」

「い、いいえ。コチラこそ。では貴賓室に案内します。」

「ウム。頼む。」

サイトは大きめのバッグを抱え、シエスタの後を歩いて貴賓室へと向かった。

>シエスタが荷物をお持ちしますと言ったが、女性には重いからいいと丁寧に断った。

「サイト ヒラガ様。ここが貴賓室です。」

サイトとシエスタは貴賓室に着き、部屋に入った。

「シエスタ、済まぬが少し時間を頂けるか？色々と願いや話をした事があるので。」

「いえ、私はサイト ヒラガ様のお付のメイドとして指名されまし

た。

です。でどんなお願いでも出来る限りお聞きします。」

「心配するな、無体な事は絶対に言わぬ。オレはこの国の腐った貴族とは違う。」

これから少し大切な話を言うから、サイレントの魔法をかけていいか？」

「ハイ、結構です。何か私に出来る事ありましたら、どうぞおっしゃってください。」

「ウム、ではサイレント。」

サイトが魔法をかけると、部屋の外には一切の声は漏れなくなる。

「シエスタ、君は佐々木武雄と言う人の孫だよな？」

「ど、どうして御爺様の名前を、どうしてご存知なんですか？」

「オレはシエスタの爺さんと同じ国の生まれ。異界から来た人間だ。シエスタの従兄弟の佐々木家とも交際があった。この写真を見てくれ。」

サイトは胸のポケットから一枚の写真を取り出した。

その写真は佐々木家の一族とサイトと一緒に写っていた。

「私と同じ顔の女の子が。」

そして御爺様そっくりの男性。これが私の親族なんですか？」

「ウン、この世界とは違う月が一つの地球と言う世界だ。」

魔法使いも居るには居るが、あまり多くは無い。
平和な国だよ。平民も穏やかに暮らせる国だ。」

「月が一つ、そして平民が穏やかに暮らせる国ですか？いいですね。
そんな国に私の親族が住んでいたとは。」

「うん、いい国だ。」

で、シエスタに対するお願いと言うのは、オレに色々と協力してほしい。

オレは異界から来たばかりのメイジだ、
敵は居ても味方は居ない。

オレはこの世界の貴族社会を壊すつもりだ。
理由も今は言えないが何時か絶対に話す。
その日まで待つて欲しい。」

「分かりました。」

御爺様、そして私の従兄弟と知り合いと言うのも事実でしょう。
でもどうして私の家族や従兄弟の事をご存知だったのですか？」

「その事についても少し時間を貰いたい。
かなり大切な話なので、簡単には口に出出来ない。
だがウソは言わぬ。」

この機械の箱を見てくれ。お前の従兄弟達だ。」

サイトはさらにバッグから佐々木一家を録画したデジカメを取り出し、再生した。

（シエスタさん、始めまして。私達は貴女の従兄弟の佐々木と言います。）

サイトさんから聞いたと思うけど、ヨロシクね。何時か絶対に会い

ましよう。)

亡きお爺さんや自分、
家族にそっくりな顔の一家が理解出来ない言葉で喋ってる不思議な
箱を見て、

シエスタは混乱した。

でも理解出来る。この箱の中の人は自分と同じ血を引いた家族だと。

「佐々木さんの一家だ。シエスタとそっくりな女の子は志江子さん
と言う子だ。」

俺達と同じ十七歳。高校と言う学校の学生をしてる。」

「私と同じ年で学生ですか。羨ましいですね。」

私達は幼い頃から親の手伝いをして働いていましたから。

御爺様が元気な頃はタルブ村の農業も盛んでしけど、
御爺様が亡くなってからは、零落れてしまいました。

御爺様は何でも難しい学校を出たとか聞いてましたが。」

「ウン、武雄翁の出た学校は凄く難しい学校だった。」

軍隊の学校なのだが、競争率数百倍と言う確立でしか入れないエリ
ート学校だった。

タルブ村に竜の羽衣と言う機械があるだろ？

アレは空を飛ぶ、その当時の空飛ぶ兵器なんだ。

君のお爺さんはあの兵器のパイロットと言うエリートだったんだ。」

「あ、あの竜の羽衣がですか？見た感じ不思議な形の置物にしか見
えませんが。」

「ま、仕方ないよ。アレはガソリンと言う油を入れないと動かせな
い。」

それに扱える人間が乗らないと危ない乗り物だ。
今度動かして乗せてあげるよ。」

「本当ですか。嬉しいです。
でも何で私にそんなに優しく教えてくださるのですか。
貴方様は貴族なのに。」

「貴族の前に同じ国の血を引く同胞だよ。
それにオレはいずれ平民を奴隷以下の扱いから解放して見せる。
この国の腐った人間は、零落れてもらうけどね。」

「楽しみですね。でも本当にそうなるなら、私は貴方様の言う通りにします。
何でも言ってください。」

「うん、ありがとう。シエスタ。
当分はゴタゴタすると思うけど、困った事があつたらオレを頼れ。
絶対に助けてやる。」

「あ、ありがとうございます。本当に嬉しいです。」

シエスタとサイトはお互いの心を交わし、気持ちがポカポカして来るのであった。

特にサイトは前世のシエスタとこの世界のシエスタが同一人物だと確信し、

以前と同じに彼女に心を開こうと決意してた。

まあ、いきなりは本当の事は言えないけど。

「長い事話したな。シエスタ。それじゃありがとう。」

ココでの話は他の貴族や同僚には絶対に言わないでくれ。コレはチ

ツプだ。」

サイトはバッグのポケットからエキュー金貨を数枚取り出し握らせた。

「こ、こんな大金は頂けません。お返しします。」

「遠慮はするな。それで家族に仕送りや自分の好きなものでも買え。オ、そうだ。このお菓子も持って行け。地球で作られてる菓子だ。多分、この世界の菓子よりは美味しいと思うぞ。」

サイトはさらにチョコレートを取り出しシエスタに渡した。

「それはチョコレートと言う菓子だ。包み紙を破き、割って食べたらいい。」

「あ、ありがとうございます。甘いお菓子は最近食べて無かったので本当に嬉しいです。」

「うん、今は多量には持っていないから、他の平民には差し上げる事は出来ないが、いずれは地球から多量に仕入れる。」

その時はお腹一杯食べさせてあげる。」

「本当ですか？楽しみにしています。」

あ、そろそろ夕食の時間ですので、アルヴィーズの食堂へのご案内します。」

「おお、そうか。では案内を頼む。」

サイトとシエスタは連れ立って食堂へと移動した。

（食堂ではイベント起きるかな？バカギーシュが絡むと楽しいだろう。

ルイズも文句言っかな？そしたら叩き潰すけどね。）

前世での記憶を思い出し、色んなイベントが起きないかと期待してる悪魔サイトでした。

s t g 4 ガンダールヴとシエスタ（後書き）

サイトとシエスタの秘密会議編でした。

まだ恋心は芽生えていませんが、彼女はこのSSのヒロインとなつて貰います。

ハーレムルートもありますが、その辺はご容赦お願いします。メインはシエスタで行きますので。

6/17日、サブタイトルを変更しました。

s t g 5 ガンダールヴとアルヴィーズ食堂（前書き）

アルヴィーズ食堂でのサイトです。

原作ルートに則って、ギーシュ君が登場します。

s t g 5 ガンダールヴとアルヴィーズ食堂

s t g 5 ガンダールヴとアルヴィーズ食堂

サイトとシエスタはアルヴィーズ食堂へと着いた。

食堂は既に豪華な料理が所狭しと並べられ、貴族の子弟が食べるのを待ってた。

だが……。

「コホン、オールドオスマンじゃ、あまりワシはこの食堂には来ぬが、

今日はどうしても諸君にお願いしたい事があつて来た。

本日、異国の貴族、サイト ヒラガ殿がこの学園に来られた。

詳細は機密とするが、貴族の諸君。彼に対し敵対してはならない。

彼は偉大なメイジだ。恐らくワシでも子供扱いされる程のな。

だから、絶対に彼に敵対してはならぬ。敵対したモノは即刻、放校処分とする。」

ザワザワと貴族の子弟は騒ぎ出す。

そこへ。

「あー、今、オールドオスマン氏から紹介のあったサイト ヒラガと言う。

別にオレはお前等がケンカを売って来ても全然構わない。

別に戦争とかは騒がない。

何故なら、お前等程度の魔法なぞ、子供のシヨ。ベン程度の微風だ

からだ。

オレは大人だからな。

まあ、国とか学園の教師や兵士共には敵対するが。それは許せ。だがガキ相手なら、全然構わないぞ。ただし・・・。

ケンカ売る場合は遺書、書いて来い。

以上だ。」

「諸君、聞いたか？ワシは彼の言う通りと思う。

彼の魔法は本当に凄い。召喚の場に居たモノは見ただろう。

命が惜しければ絶対に敵対するな。

聞いた通りであるから放校処分はしないが、命の危機に陥っても当校は一切関知しない。」

ザワザワと騒ぐ貴族子弟。

「まあ、余程のムチャをしない限りはオレは命は奪うつもりも無い。

ただ平民に手出ししてるのを見た場合は許さない。

オレの国では、平民の働きで多くの貴族が毎日ご飯を食べたり、明るい生活が出来てる。

貴族は平民に生活を守って貰う代わりに、平民の安全を守る義務がある。

その彼等に惨い事をする連中だけは、オレは許すつもりは無い。

どこの国の平民でも、オレは平民を守る。

魔法学園の貴族子弟なら、そんな無体な事はしないと思うよね？」

サイトの後ろで立ってたシエスタは感激してた。

彼は本気で私達の味方なんだ。

あの方なら、私達をこの生き地獄の世界から救ってくださるんだ。
生きてても、貴族の機嫌を損ねると子供でも簡単に殺されてしまう。

私の弟も貴族の眼前を横切っただけで、魔法で殺されてしまった。
私はガクガク震えて、冷たくなった血まみれの弟を抱きかかえ、泣き喚いてた。

もうあんな悲しい思いをしなくても済む世界が来るかも知れない。
何としてもサイト ヒラガ様に御使えして、平民を救って貰おう。

そうシエスタは決意した。

そこへ空気の読めないウマ鹿さんが一人居た。
皆様のヒーロー、ギーシュ君です。

「フツ、異国から来たメイジなぞ、僕のゴーレムなら一撃だ。」

「オツ、勇者が居たね？それならオレと対決するかい？
ああ、風の魔法は使わないよ。」

あくまでゴーレムだけの対決でいい。やるか？」

ギーシュはサイトに対決を挑んでしまい、それでも自分の得意なゴーレムなら負けないだろうと思ってしまった。

それにゴーレム同士の対決なら、怪我もしないだろう。

そう思ってた。今だけは。＞後で真っ青になるのは確定です♪

「分かりました。サイト ヒルガリーノ殿。後ほどヴェストリの広場で試合おう。」

「オイ、オレは、サイト ヒラガだ。お前の名前は何だ？」

「僕の名前はギーシュ・ド・グラモン。青銅のギーシュが二つ名です。宜しく、サイト ヒラガ殿。」

「おお、分かった。青銅のギーシュだな？オレの二つ名はまだ無い。サイト ヒラガだ。じゃメシ食ったら向かう。後でな。」

サイトはギーシュと対決する事になった。

まあ賤ける程度にしておこう。

舐められたら最悪だから、半分程度の実力を見せたら大丈夫だと思う。

あまり力見せるのも不憫だしね。

何とも優しいサイト君です。

でもミツチリと地獄巡りさせるつもりですが。

s t g 5 ガンダールヴとアルヴィーズ食堂（後書き）

食堂での生暖かい一コマです。

次回はギーシュ君がボコられてしまいます。

お楽しみに。

閑話削除に付き、s t g 5 を繰り上げました。

s t g 6 ガンダールヴと薔鹿と風（前書き）

ギーシュとギトーの決闘馬鹿騒ぎです。

F O O L 様からギトー対決編を提案して頂き採用、加筆しました。

s t g 6 ガンダールヴと薔鹿と風

s t g 6 ガンダールヴと薔^ギ鹿^{シュ}と風^{ギト}

サイトは優雅に食事をし、シエスタにハーブティーを注いで貰い、しばらく歓談してた。

「サイト様、あの・・貴族様と決闘されると言われましたが、大丈夫でしょうか？」

「ン??あ、アレね。まあ心配するなって。

あ、良かったら着いて来てよ。心配しなくても殺したりは絶対にしないから。」

サイトはあまり考えていなかった。何せガンダールヴだけでも倒せたギーシュ。

だが、今回はデルフではなく、ゴーレムでの決闘である。色々と考えてると、足元にG o k iがカサカサと動いてた。

「ン・・・。オッ、こりゃイイ」

ヴェストリの広場には既に多くのギャラリーとギーシュが待ち構えてた。

「諸君、決闘だ!!」

ギーシュが薔薇の造花を掲げた。ウォーーツ!!と歓声が起こる。

「ギーシュが決闘するぞ、相手は異国のメイジだ。」

ヤツラ、まだオレの名前を覚えていないな?ま、いいけどさ。そこへ。。

(サイトよ、ワシじゃ。)

(お師匠様、ご無沙汰していました。何かやっぱり起きました。)

ブリミルがテレパシーで話しかけて来たのである。

(ウム、で、どうする気じゃ?)

(うーん、今回はゴーレムで倒すつもりです。

ただ、ギーシュは他の貴族の中では中々まともですので、叩き潰して、

仲間を引き込もうかな?と考えております。

他のアホ貴族のガキが不意打ちして来る可能性もありますが、その

場合、

お師匠様、少しでも援護して頂けませんか？)

(ウム、構わぬ。そうだ、今宵、外部の森に来るのじゃ。虚無の魔法を授ける。

この世界なら被害も少ないじゃろう。)

(ハイ、ありがとうございます。では、決闘が終わって夜半に。それとオレが合図しましたら、時間を止めてください。

多分、貴族連中のギャラリーの誰かが不意打ちをして来ると思います。ソイツ等を・・・)

(フッフッフ。分かった。楽しい事考えておるの。)

(では、お師匠様、支援ヨロシク。)

テレパシーでブリミルとの交信を終えたサイトは、

ギーシュと向かい合って広場の真ん中に立ち、お互いぐつと睨みあった。

「とりあえず、逃げずに来たことは褒めてやろうじゃないか。」

ギーシュは薔薇の花を弄りながら、歌うように言った。

「誰が逃げるか。」

「さてと、始めるか。」

ギーシュが言うと、ゴーレムが鍊金された。

それを見たサイトは・・・。

（前世と変らねーな。本気でヤルと瞬殺だし・・・。んじゃ、アレ！で逝くか？）

サイトは杖を揮い、鍊金を行う。
すると地面から・・・。

カサカサカサカサカサカサ・・・。

「キヤーーーー、アレって。」

「ウゲッ、アレってまさか。」

「イヤーーーー、Gよ、G O K I だわ。」

そう、女性がネズミよりも大嫌いな、この世の敵。

Gの大群が地面から発生。ギーシュのゴーレムに向かって行くのである。

「な、な、何だね？コレは。僕のワルキューレにアレが。
サイト殿、コレが君の鍊金かね？」

「ウン？別にいいだろ。さっ、薔鹿のギーシュよ。アレを倒せ。」

「さもないと君にアレが襲いかかるぞ。」

「誰がバカと？」

「ちゃんと字を読み、バカでは無い。薔鹿だ。」

「ウ・ウルサイ。僕は薔薇だ。」

「ア？バカだって？ま、いいよ。さっさと終わらせうぜ。」

「グツ、行け。ワルキューレ。」

ギーシュは喚くと、ゴーレムが五体、サイトに向かって進軍開始。

「んじゃ行け。G軍団。」

サイトは欠伸しながら杖を揮い、G軍団が数千匹、ギーシュのゴーレムに纏わり着く。

「ウワツ、アレはリアル。」

「あのゴーレム、何か可愛そう。」

「近寄りたく無い。」

周囲のギャラリーはひそひそと喋りながら、観戦を続けた。ギーシュのゴーレムはGが纏わり付き、動きが止まって居た。

「う、動け。僕のワルキューレ。どうしたんだ？」

やがて足から頭の天辺までGに纏わり付かれたギーシュのゴーレムは、

ドサツと言う音と共に、土に帰ってしまった。

「ぼ、僕のワルキューレが……。」

「ン？終わったみたいだね。オレの勝ちでいいか？ギーシュ・ド・グラモン君よ。」

「ま、まだだ。もう一度だけ……。」

「そうか。じゃ、オレとドチラのゴーレムが凄いかコンテストと行くか？」

今度は人型ゴーレムにするぞ。」

「ウン、望む所だ。僕も錬金技術に関しては誰にも負けたく無い。」

ギーシュの心は既にボロボロなのに、それでも負けたく無いと意地を張る。

サイトも、やはりギーシュは面白いわ！と、思いつつ、アレで行こうと杖を揮う。

ギーシュは乙女形のゴーレムを錬金。サイトは。

「あ、アレは、何と言うゴーレムだ。」

「す、凄い。カッコイイ。」

そう、日本で1970年代に大ヒットしたマシン。ーズのゴーレム

を錬金したのであった。

「どうだ。このゴーレムは。言っておくがハリボテでは無いぞ。お前のゴーレムでは絶対に破壊出来ない超合金ゴーレムだ。」

「ぐっ、う、煩い。行け、ボクのワルキューレ。」

もうムチャクチャに薔薇の杖を揮い、ギーシュはゴーレムをサイト
のゴーレムに突撃させて。

そうしたら、ドゴーーーン！！！！と言う音と共に腕が火を噴いて
飛び、

ギーシュゴーレムに飛びかかり、アッと言う間に破壊してしまった。

「あっ、僕のワルキューレが。」

「おおー、さすがロケツ。パンチ。強力だったな。どうした。
ギーシュよ。もう終わりか？」

「ま、参りました。もう精神力が残っていません。」

「そうか。それなら君の負けだね？人間素直に認めるのも大切だぞ。
」

「ハイ。サイト ヒラガ殿。自分の負けです。
でもあのゴーレムは素晴らしい。まさか腕から火を噴き飛び交うと
は？」

「うーん、アレでも一番弱い兵器なんだがな。もっと凄いのもある

ぞ。アレを見てろ。」

サイトが指を指す先には例のG軍団がまだ残ってた。そして杖を揮うと、マジン。ーゴーレムの胸の板から熱線が発生。Gはドロドロに溶けてそれからすべてが土に帰った。

「す、素晴らしい。あんなゴーレムは見た事無い。お、お師匠様。」

「どうだ、アレはいいだろう。オレの子供時代の憧れだった。

ギーシュ君、オレは子供時代から平民の味方だった。

そして、絶対に負けたく無い。他人に暴力を振るうためでは無い。守るための力だ。

その気持ちで修行に明け暮れた。修行は一日では無い。

日々の鍛錬の連続だ。

オレはすべての平民を助けたい。

そのためには力が必要だった。

力無き正義は駄目だ。戦うなら力を付ける。そうだろう？」

「は、ハイ。その通りです。僕も弱い方の味方になれるのでしょうか？」

「今のままではムリだな。戦場に出たら一撃で終わる。

オレはある戦場で、足が動かなくなる程の恐怖に陥った事がある。

だが、心に全ての勇氣を集めた時、自分の持つ力をすべて出し切れた。

数の力には勝てず、倒れたけど。でも、実力では絶対に負けなかった。数に負けただけだ。」

「そんな事が。凄い戦歴なんですね。僕の適う相手では無かったんだ。」

「ギーシュ、お前がその気があるなら、技術を伝授してやつても良い。」

ただその技術は絶対に平民や弱い人に向けないと約束できるか？」

「出来ます。お師匠様。お願いします。」

このギーシュ・ド・グラモン、生涯、弱い力の民の味方となる事を誓います。」

「そうか、なら自分が鍛えてあげても良い。」

ツツ！！

（お師匠様、お願いします。」

（心得た、時間よ、止まれっ！）

その瞬間、サイト以外の人間とすべての動きが止まった。

「やはり不意打ちしようとしてたな。このアホメイジは。」

ンじゃ、コイツの魔法はコッチに向けてっと」

止まっている不意打ち魔法を別方向から発射してた他のメイジに軌道を変えてしまった。

（アツ、お師匠様。ヤツラの魔法の系統ですが、発射した後はすべて使えない様に出来ますか？）

（造作も無い事じゃ、ヤツラに魔法を与えて置くと、庶民に害するだろう。）

精霊も嫌っておるしの。系統魔法はすべて使えぬ様にしておく。）

（お、助かります。色々と煩くなりそうなヤツ等ですから、潰して

しまいましょう。」

（ウム。だが何時もワシがああ言う輩に魔法を賭けるのも面倒じゃ。今宵、すべての虚無魔法を伝授する。今後はサイトが思った通りにしろ。）

（ハイ。何時までもお師匠様の手を煩わせたく無いですから。では今宵。）

（うむ。待つてるぞ。では解除するか。時間よ、動け！）

ブリミルが時間停止魔法を解除すると、不意打ちをしたたメイジの魔法が他のメイジに当たる。

「ワーツ、何でオレに。」

「痛いっ、お前、何でオレに魔法をぶつけるんだ？」

ギャラリー連中が大騒ぎを始めた。

「アーツ、嫌い！！！！」

サイトが一括すると、騒いでた火達磨の連中が静かになった。

「何でお前等は火達磨になってるんだ？まさか不意打ちしかけて自爆したのでは？」

「だ、黙れ。ボクは誇り高きトリステインのメイジだ。異国のメイジに負ける訳には行かない。」

「そもそもお前等とオレは対決していないだろ？
トリステインのメイジって相手の了解も得ずに不意打ちするのが主流か？

そんなヤツラは外道と言うんだ。オイ、そこの泡を吹いて倒れてるヤツ。

お前も不意打ちしようとしてただろ？

もしオレに勝ちたいと思うなら、もう一度魔法をオレに向けて見る。

」

「グツ、黙れ。行くぞ。ファイヤーボール！！」

泡を吹いてたメイジは杖を揮うのだが、魔法は発動せず。

「グツ、どうしたんだ？ファイヤーボール、ファイヤーボール、」

「何を独り言言ってるんだ？フツ、そろそろオレは帰らせてもらおう、ギーシュよ、また会おう。」

「ハイ、お師匠様。何時でも自分は貴方の元へ参ります。」

#####

「…………授業見学ですか？」
ギーシュとの決闘が終わって直ぐにオスマンに呼び出され、その内容を確認するためにオスマンに問いかける。

「はい。そうです。サイト ヒラガ殿。」

「しかし、何故そのような事をしなければ、いけないのでしょうか？」

サイトの問いに、重い沈黙が場を支配し、その静寂をオスマンの声が打ち破った。

「…………恥ずかしい話ですが、今年の生徒達は成績が優れてなくて、ドットかラインばかりなのです。」

そこで、始祖ブリミルの直弟子で強力なメイジであられる、

サイト ヒラガ殿に教師を磨く教材代わりになってほしいのです。」

「…………わかりました。」

頭を深々と下げて頼む、オスマンにサイトは渋々了承した。

サイトはギトーと言う教師の授業を見学してた。

ギトーはキュルケに質問してた。

「ミス ツェルプストー。最強の属性とは何だと思う？」

「虚無じゃないですか？」

ギトーの問いに、キュルケはあくびをかき、不真面目な態度で答えた。

「伝説の話をしているんじゃない。現実の話をしているのだ。」

「そうですね。すべてを焼き付く火じゃないでしょうか？」

「残念ながら、そうではない。風こそが最強の属性なのだ。」

（本気で言ってるのか？）

ギトーの発言に内心呆れてしまったサイトである。

「ミス ツエルプストー。試しに私に得意の火の魔法を使ってもらえるか？」

ギトーの発言にキュルケは目を鋭くした。

自分が誇りにしている火の魔法を愚弄され、腸が煮えくり返って爆発寸前なのを、

相手が一応年上なのと教師であることを理由に我慢させているのだ。

「……………当たったら火傷ではすみませんわよ？」

「構わん。ツエルプストーの情熱は見かけ倒しなどではないのだから。」

家名すらバカにされ、キュルケの堪忍袋の緒は限界だった。

立ち上がり杖を構えて魔法を使うため、攻撃呪文を口にする。

(…馬鹿なのか？生徒を挑発して、どうするの？)

誰にも気づかれないうちに杖を持ち呪文を口にするサイト。

その呪文が終わった時、

「ハッ！」

特大の炎がキュルケの杖から解き放たれ、一直線にギトーに向かう

。火・火・火を足した魔法だ。これに直撃すれば、彼はただでは済まない。

おそらく、灰しか残らないであろう。

しかし、慌てず騒がず、ギトーは手に持った杖を指揮者のタクトのようにふるう。

その瞬間、火炎球は弾け、その魔法を解き放った人物、キュルケに牙をむいた。

しかし、直撃するより早く、薄い水のカーテンのようなものが、防御壁になりキュルケには熱さすら伝わらなかった。

(なんだ？今のは？少なくとも、ドットやラインでは今の炎は防げないはずだ。)

内心で、そう結論付けたギトーは視線を後ろのほうでこちらの授業を眺めていたサイトに向けた。

「どういふつもりですか？ミスタ ヒラガ。授業妨害などしてほしくはないのですか。」

平然と言い放つギトーにサイトはこの教師の点数を大きく下げってしまった。

「若い女性^{キュルケ}が火傷しそうでしたので助けたまでですよ？
ミスタ ギトー？そもそも、生徒に怪我を負わせるようなもの
が授業なのでしょうか？」

逆に問いかけられ、ギトーは不愉快そうに表情を歪めた。

「だいたい、ここの教師の質も悪すぎます。先生も悪ければ生徒も
悪いですよ。」

聞き逃せぬその一言に怒りに震える一歩手前の表情になったギト
ー。

しかし、相手は自分より核上の風使い。そう言い聞かせ、落ち着か
せながら問いかけた。

「失礼。ミスタ ヒラガ。

今のは、我々、教師側の質が低いと言っているようにも聞こえるの
ですか？」

「ご安心を。ミスタ ギトー。事実そう言っていますから。」

ギトーが何かを言う前にさらにサイトが問い詰めた。

「ミスタ ギトー。生徒を挑発して、何をさせたいのですか？」

「フン。風こそが最強だというその所以を見せようとしたまでのこ
とです。」

「未熟な生徒を相手にしたって風が最強もないでしょう？
未熟者の魔法など、熟練した魔法使いならたやすくやぶれる。
そんなもの、授業というよりただの弱い者いじめです。」

サイトのその一言にギトーは無謀なことを口にした。

「では、ミスタ ヒラガ。貴方と私で、模擬戦をしていただけますでしょうか？」

「……いいでしょう。その模擬戦中は私は一切の風を行使いたしません。」

さらに使用する精神の量もあなたと全く同じ量しか使いません。」

「準備はよろしいでしょうか？ミスタ ヒラガ？」

「こちらは大丈夫です。」

その言葉を聞いてから、ギトーはコインをはじいた。それが地面に落ちた瞬間、サイトが魔法を解き放った。

行使したのはキュルケと同じ火の魔法。

その魔法に対して、ギトーがタクトをふるう瞬間、火炎球は自ら破裂して、

あたりに炎をまき散らした。

予想外の展開に一瞬硬直するギトー。そこに――

「グエー――ッ！」

高速で何かが飛来して、彼を弾き飛ばした。

火炎球は囷と、ギトーをその場に固定するためのブラフでしかない。彼をその場に固定させ、火炎球がはじけた瞬間、土を固め彼に目がけて飛ばしたのだ。

慌てて、とび起きようとする瞬間。

「動くな！」

対戦相手からのその一言に驚いて、硬直してしまった。

「ミスタ ギトー。勝負はつきましたよ？」

「馬鹿な！」

吠えるギトーに対して、サイトは冷ややかに言った。

「ではご自分の体をよく見てください。」

言われて、自分自身の体をよく見てみると、極細の糸のようなものが体に絡みついている。

いつの間に？

種がわからず、混乱する彼だが・・・。

答えは・・・。

火炎球を飛ばしている最中に彼の背後に水で作った糸を糸の海のようにたくさん作り

はじき飛ばされ、自らその糸の海に突っ込んだのだ。

「このようなもの！」

確かに彼は捕獲されたが、まだ杖を失っていない。

魔法で糸を切り裂くつもりなのだ。

「やめといたほうがいいですよ。」

その糸を切り裂くより早く、こちらが呪文を使ったら？

あるいは、その糸を瞬間的に捕獲したものを凍らせる物に温度を下げたらどうするつもりですか？」

その言葉にギトーは顔を青くして硬直してしまった。

そして、小さく「参りました。」

と、そうつぶやいた。

サイトは、その彼の糸を消すと、その模擬戦を見学している人たちにこう言った。

「皆さんも理解してください。

火も土も水も風も最強にはなりえない。

どう、うまく魔法を使うか？求められるのはそれだけです。」

そういうと次の授業の査察に向かうのだった。

こうして一連のバカ騒ぎは終わりました。

なをこの事が王家にも伝わり、

ギトーが解雇される事になるのは後の話であった。

s t g 6 ガンダールヴと薔鹿と風（後書き）

ギーシュとギトーの決闘でした。

デルフの出番やチートはまだ当分先です。

原作スケジュールが色々と前後してしまうストーリーとなりますが、そこはご容赦してください。

今回は、真夜中のデート・・・ではありません。

FOOL様からギトー対決編を提案して頂きました。

FOOL様、ありがとうございます。6 / 20

閑話削除に付き、s t g 6 繰り上げました。

s t g 7 ガンダールヴと土くれ前編（前書き）

マチルダ編です。

長くなりそうなので、前後編とします。

stg7 ガンダールヴと土くれ前編

stg7 ガンダールヴと土くれ（マチルダ）前編

サイトとギーシュ、その他の乱闘騒ぎはもちろんオスマンやコルベール、その他の教師も見てた。
ただ止める訳には行かないが。

「勝ちましたな。それも手抜きで。」

「予想してた事よ、ツルベール君。」

「私はコルベールです。間違えないください。ボケオスマン殿。」

「細かい事を若いモンがグチグチ言っな。アッ、オヌシはハゲだから若くは無いか。」

「人が気にしてる事を。このセクハラジジイ。」

「フツ、まあいいわい。しかしどうしたもんかね。」

彼は本当に凄腕のメイジだ。アレで実力の千分の一も出して無いぞ。

「

「あ、アレですか？我々教師でも、今の彼とは命がけでようやく対等かと思いました。」

とても適わないですね。」

「ウム、とにかく敵対しない。そして彼の矛先を逸らさない。
召喚を拉致したと怒って居るから、帰る手立ても考えてあげたい
けど。簡単では無いな。」

「そうですね。我々では交渉にも応じないと言っておりますから、
アンリエッタ王女との交渉で何とか怒りを逸らして欲しいです。」

「しかしあの若い王女で彼との交渉が出来るか？マザリーニならと
もかく。」

「難しいと思います。」

「そうじゃな。。。」

学園の教師とオスマンは困った事態の収拾に悩んで居ました。

その頃。。。

ギーシュとの決闘騒ぎを終えたサイトとシエスタは、部屋へ帰ろうとしてた。

その一画に、メガネをかけた妙齡の女性が見てた。ロングビルことマチルダです。

（あのメイジのゴーレム、本当に凄いわね。

でも精神力には余裕あるみたいだし、アレが本気でも無い感じ。

私の全力でも適いそうにないわ。ヤツが居る間はフーケは休業ね。まだ死にたくは無いしね。ヤレヤレ。）

マチルダは冷静に考えてた。さすが歴戦のメイジ。無謀は命の無駄と理解している。

サイトはマチルダに気づき、瞬間的に偏在を発動、マチルダに接近させた。

（土くれのフーケだな。今夜話がある。夜半に学園の外の外壁に来い。

来なかったら、お前の情報を政府に渡す）

いきなり背後に現れた声にビックリしたマチルダは・・・。

「だ、誰だか知らないけど、身に覚えは無いわよ。私はロングビルと言う秘書ですわ。」

と、トボける。だが・・・。

（（後ろは向くな。向いたら瞬殺するぞ。

なら、アルビオンに住むお前の妹に言おうか？姉さんが泥棒して自分達を養っている。）（

「や、止めて！！ティファには言わないで。あの子には罪は無い。アンタの言う事は事実。だから止めて。言う事聞きますから。」

（（そうか。ならヨシ。今宵、お前に言う事がある。来なかったら、お前は終わりだ。分かったな？）（

「クッ、分かりました。降参します。ですから、絶対に言わないでお願いします。」

（（ウム。了承した。では、オレの気配が完全に消えるまでは絶対に振り向くな。

外壁でオレの正体は明かす。では、今宵（）

「分かりました。誰だか分かりませんが、言う通りにします。今宵必ず。」

そうして、前を見続けると背後からの気配は霧散。いずこへと誰かは消えたらしい。

（フウツ、困ったわね。ただでさえ土くれを休業して困ってるのに、どうしたもんか？

でも、ティファにだけは知られる訳には行かない。）

マチルダは真っ青になってブツブツと独り言をつぶやく。

サイトの偏在はマチルダの返事を聞くとサイトに即座に伝え、サイトは今宵の予定を考える。

（土くれフーケは出す訳には行かないな。特にあの心優しいティファニアは泣かせたく無い。

オレがアルビオンで戦死した時に、オレの亡骸をティファニアは嫌な顔せず、手厚く葬ってくれた。

普通の娘なら見知らぬ血まみれの遺体なぞ、近寄るのも避けるだろうに。

あんないい子には、いい人生を送って欲しい。そのためにもフーケには消えて貰わないとな。

彼女が泣く。)

サイトは前世で戦死した時に、ティファニアに葬って貰った事を覚えてた。

ブリミルに色々と情報を聞き、彼女も虚無の使い手と言う事も知ってる。

サイトは、この世界の虚無は自分以外は消すつもりである。もちろんルイズは筆頭。

アレは沸騰点が低すぎるし、虚無の使い手としては最低。

まさにバカに核弾頭だ。危険すぎる。

よって土のドット魔法のみにして、虚無系統を取り上げる予定だ。土ドットならコモンマジックと簡単な錬金しか出来ないからルイズでも安全、

そして使い魔もミニズとかそう言うのが来るだろう。

ちなみに使い魔を召喚した場合はミニズかゴキは確定しています。アレにキスするのが楽しみです。

さて、貴賓室の帰り着いたサイトとシエスタは、明日の予定をシエスタに伝え、風呂に入る事にした。

風呂はユニットバスを鍍金で部屋に作り、退去時には消すつもりだ。

「シエスタ、今日は色々ありがとう。また明日、宜しくな。」

「ハイ。サイト様、色々とお心遣いありがとうございました。おやすみなさい。」

「うん、おやすみ……。オッ、そうだ。シエスタ、コレも持って行きなさい。」

サイトはバッグからシャンプーリンスと石鹸を取り出した。

「コレは髪の毛を洗う秘薬、それと身体を綺麗にする石鹸と言うものだ。」

フロに入る時に丹念に身体を洗って綺麗にきなさい。

病気の予防の第一歩は身体を清潔にする事。不潔は病気の元だ。」

「あ、ありがとうございます。こんな高価な秘薬を頂いて宜しいのでしょうか？」

「うん、いいよ。って言うか、佐々木家からのプレゼントなんだ。シエスタの従兄弟の志江子さんが同じシャンプーを

使っているからシエスタにも使って欲しいと渡されたんだ。

無くなったら地球から持って来るから、友達と一緒に使いなさい。」

「私の従兄弟のシエコさんがコレと同じ秘薬を・・・。

ありがとうございます。帰ったら同僚と蒸し風呂に入って使います。

」

「うん、綺麗に洗ってグッスリと休みなさい。じゃオヤスミ、シエスタ。」

「ハイ、おやすみなさい、サイト ヒラガ様。」

シエスタを見送るとサイトは早速ユニットバスを錬金。

温泉も地下から引いたので、お湯は使い放題。

「フンフンフン」やはりフロはいいね。一日の疲れはコレで解消」

そしてサッパリして、着替えたサイトは時間が来るのを静かに待ってた。

「ん、そろそろマチルダとのデートの時間だな？」

サイトは窓際に立ち、フライを詠唱。空高く飛び学園の外に飛び立った。

s t g 7 ガンダールヴと土くれ前編（後書き）

後編に続きます。

閑話削除に付き、s t g 7 繰り上げました。

s t g g ガンダールヴと土くれ後編（前書き）

マチルダ編、後編です。

s t g g ガンダールヴと土くれ後編

s t g g ガンダールヴと土くれ（マチルダ）後編

部屋から飛び立ったサイトは衛兵に見つかからない様に、空高く飛び、マチルダとの待ち合わせ場所の学校の外壁に向かった。

その頃、マチルダは壁を錬金して作った秘密のドアからコッソリと外壁に出てた。

「まったく、私もヤキが回ったよ。正体を掴まれるなんてね。

でもティファに泣かれるのは勘弁して欲しいし。ハア。

何を言われるか分からないから、心臓に良く無いわよ。誰だろ？あの声は？」

マチルダがブツブツと独り言を言っていると、背後にあの男が来たらしい。

男はマチルダの背後に立つと（まだ振り向くな！！）と恫喝。

「約束通り来たわよ。で、アンタ、何が欲しいの？
言っておくけど、私は金は持っていないわよ。

あるのはこの身体だけ。もし欲しいと言うなら上げるけど、それだけじゃ無いんでしょ？」

（そのまま聞け、マチルダ、お前はフーケを止める気は無いか？）

「はあ？そりや止めてティファを食わして行けるなら止めるわよ。
でも、零落れメイジの私ではそんなにお金は稼げない。
あの国にはティファの他に、孤児も沢山居るんだ。
どうやったら泥棒以外で子供達を養えるって言うのよ。簡単に言わないで。」

（分かつておる、その事情は良く分かつておる。だがマチルダよ、
考えて見る。
もしお前がフーケとして処刑されたら、ティファ達、孤児はどうやって生きて行けばいいのだ？
彼女達の母親はお前だろ。無能では無いハズだ。良く考えて見る。）

「言う事はごもつともよ。ですが、旦那、私も考えました。
何とか食わして行く方法を。この国では零落れメイジはロクな仕事
が無い。

他国でも同様。

せめてまとまった金があれば、ゲルマニア辺りに移住するんだけど、
それもムリ。

どうやって沢山の子供を養って行けばいいのですか？

教えて下さいよ。そう言う方法があるなら。旦那！」

半ば絶叫とも言えるマチルダの心からの叫びに、サイト（偏在）は答えた。

（それなら、オレの国に仕えよ。お前が望むだけの報酬も約束出来る。

その代わり、庶民は困らせない。土くれは止める。

そして、口は堅くして他国には絶対に情報を漏らさない。

この条件を守るなら、お前が孤児やティファを養うのに十分な報酬を約束しよう。

守れるか？マチルダ・オブ・サウスゴード。）

「クツ、今は亡き家名まで知られてるとは。分かりました。

旦那、いや主から知りえた情報は例え拷問されようとも、決して他国には漏らしません。

主の思う通りにマチルダは動きます。どうか雇用してください。」

（ヨシ、では今からオレは姿を現す。そしてオレの師匠も同席する。驚くなよ、マチルダ）

「し、師匠ですか？主の。」

（「そうだ。お前の国、いやハルケギニアの人間なら誰でも知ってる方だ。

その方がオレの師匠だ。こう言えば頭のいいお前だ。大体は想像付くだろう。」）

「ま、まさか。。」

「マチルダさん、始めまして。顔は知ってると思うでしょうが、サイト ヒラガです。
日本帝國の貴族です。」

「あ、貴方が主ですか？」

「ハイ。詳しくはまだ言えませんが、ティファニアさんにお世話になった事もあります。
そして、師匠です。」

（「マチルダよ、ワシがブリミルじゃ。
この腐ったハルケギニアで良く、多くの孤児を守って来たな。褒めてつかわす。」）

「ブ、ブリミル様ですか？ あのロマリアが崇拜する？？」

（（……ふむ、信じておらぬようじゃの。）（

「あ、いえ、その……。」

（（かまわぬ。いきなり『ワシがブリミルじゃ』などと言われても、信じられないのが当然じゃ。

もし、すぐ信じる者が居たとしたら、むしろその方が『まともではない』じゃろう。）（

「……………」

実際マチルダは、信じてはいなかった。

確かに彼女の目から見ても、目の前の『霊のような存在』は、神とすら思えるほどの威光を備えている。

しかし、その威光が見せかけでないと言い切る自信は、彼女には無かったし、

たとえそれがどれほどのものであろうとも、『威光だけ』で、目の前に居るのが

『本物のブリミル』であると信じる気は、彼女には無かったのだ。

そんな彼女に、目の前の『ブリミルを名乗る存在』が問いかける。

（（信じられぬのは当然じゃが、少し考えてみてはくれぬか——

お主も気づいている通り、サイトは、お主など足元にも及ばぬほどのメイジじゃ。

お主を従わせるために、わざわざこんな嘘をつく理由など無い。）（

「え？……ええ、それは解りますが……。」

（……では、少しかり証拠を見せるとするかの……。マチルダよ、今ここで、ほんの少し魔法を使ってみてほしい。）

「はあ？！ どういうことですか？」

（……やってみれば解る。
とにかく、何でもいいから、ほんの少し魔法を使ってみてはくれぬか。）

いぶかしげな顔で、それでも杖を取り出すマチルダ。
人間大の土ゴレムを作るつもりで呪文を唱え、杖を振る――。

得意なはずの魔法が成功しないことに狼狽し、今度は「ライト」の呪文を唱える――。
ところが、初歩の初歩であるはずのその魔法すら成功しない。

「こ、これはいったいどういうことなのですか。」 見るからに動揺した様子で、マチルダが尋ねる。

（何、一時的に魔法を使えなくしただけじゃ。

どうじゃ？ メイジに魔法を使えなくする、このような魔法を聞いたことが有るかの？）

「い、いいえ……。」

（（このようなことが出来る者が、ワシ以外に居ると思うかの？
居るとすれば、伝説の「虚無」のメイジくらいのもんじゃないか？）
か？）

「……………」

（（…どうやら信じる気になったようじゃの。）

「は、はい……。」

（（ウム、では話を始めよう。ワシが逝って六千年。
その間、ハルケギニアは腐敗、発展ゼロじゃった。
ワシの若い頃は色んな魔法開発、都市の開発と
発展しておったのに。ワシが逝って完全に発展が止まってしまって

た。

動物でも数千年経てば進化しておるのにの。コレが人間とは思えない。

特にロマリアの糞坊主共はいずれ排除する。ヤツラは腐りきってる。ワシの名で庶民を苦しめておる。

ワシはあの坊主や腐った貴族を喜ばせるために魔法や国を作ったつもりは無い。

何故、六千年もハルケギニアは発展していなかったのじゃ？

あの糞坊主、そして貴族の連中の腐敗のせいじゃ。

マチルダよ、ワシの最後の弟子、サイトの指示に従え。

ワシはこのハルケギニアを再び、メイジも平民もそしてエルフも笑って暮らせる国に育てて欲しい。

そのためのサイトじゃ。）」

「ブリミル様、そこまで仰るのですか？私からはもう何も言いません。

サイト様の指示に従い、このハルケギニアを立て直せと命令されるなら、

このマチルダ、一命を捧げます。」

「マチルダさん、師匠が自分の言いたい事をすべて言われましたから、もうムチャは申しません。

オレはこの国に来たのは、この国を平民や力の無い民が生きて行ける国にしたいがためです。

オレも大切な人がこの国に居ます。

彼等を支えるためにも、マチルダさん。力を貸してください。」

「分かりました。サイト様。では使命を仰って下さい。何でも従い

ます。」

「今はいいです。ハイ。まずはマチルダさんに泥棒を止めて貰うのが大切だったのです。」

それと使役金ですが、とりあえずこの宝石で仕送りとかして頂けないでしょうか？

給与は月に200エキュー金貨で支払う予定です。」

「こ、この宝石ですか？こんな宝石は王室御用達の宝石店でも見かけません。」

それに二百エキュー金貨って。」

「あ、それは仕送りのみです。マチルダさんの仕事によってはさらに増加させます。」

しばらくはこの宝石と給与で我慢してください。」

（「マチルダよ、そなたは孤児を養うと言う大切な仕事もあるのじや。」

未来へと繋ぐ子供は世界の宝、決して見捨ててはならぬぞ。」）

「ブリミル様、サイト様、当たり前です。もうフーケは死にました。ですので、今後はマチルダとして私は生きます。」

「マチルダさん、では雇用成立と考えて結構ですね？」

「もちろんです。私の雇用主、サイト ヒラガ様。」

「もうしばらくは学園の秘書を続けてください。」

コチラに自分の城か居住地を構えたら、正式な雇用とします。
それまでは、申し訳ありませんが、秘書として働いてください。」

「御意です。サイト ヒラガ様。」

「それと、自分の居住地が決まるまでは学園で会っても他国の貴族として扱っててください。」

詳しい事はその都度指示します。」

「分かりました。では、この宝石は本当に頂いて宜しいのですね？」

「ハイ。それはティファニアに対するオレのお礼も兼ねております。
換金してティファニアや孤児のために役立ててください。」

「あ、ありがとう。本当にありがとう。もう土くねして、脅えなくてもいいんだね。」

ティファや孤児にご飯、食べさせるのを心配しなくてもいいんだね。」

（マチルダよ、ワシも着いておる。不安なぞすべて忘れろ。そしてサイトを支えてくれ。）

「分かりました。すべては主の思うままに行動致します。」

「ムチャは絶対に言いません。ティファニアに恨まれたく無いです」

からね。

ですから、しばらくは秘書して暮らしててください。」

「ハイ。任務を受領しました。マチルダ・オブ・サウスゴード。命ある限りサイト ヒラガ様に忠誠を誓います。」

「うん、色々と頼んだけど、今後 宜しくお願いします。マチルダさん。」

「ハイ、サイト ヒラガ様。」

こうして、ハルケギニアを騒がせてた土くれのフーケは永久に姿を消しました。

マチルダさんは、ロングビルさんとして、スケベオスマンのセクハラに未だ耐えております。

彼女はティファニアや孤児に十分な仕送りも出来、なお自分もたまにはお酒も飲めるので、とても朗らかとなりました。

学園の教師が、彼女が朗らかになったので「自分に惚れてるいるんだ！！」勘違いする輩も出る始末。

彼女のハートを射止める男性は誰ダ！と騒がれているのですが、答えは何時出るやら。。

s t g g ガンダールヴと土くれ後編（後書き）

マチルダの雇用編でした。宝石は地球から多数持って来たので当分は困りません。金貨は金粉も所持してるので、高品質の錬金も可能です。

コレでフーケは消えた。と言う話でした。

にしなさとする様発表のブリミルの談話の内容を一部を使わせて頂きました。

> m (—) m <

今回はブリミルとのサミット兼虚無魔法の伝授です。

ブリミル登場のシーン。。

にしなさとする様の掲示板での発表に差し替えさせて頂きました。

何時も助言、提案ありがとうございます。 6 / 1 8 日

閑話削除に付きs t g g 繰上げました。

s t g 9 ガンダールヴと虚無伝授（前書き）

ブリミルとサイトの虚無伝授です。

呪文に詳しく無いので、省略チートにしました。

s t g 9 ガンダールヴと虚無伝授

s t g 9 ガンダールヴと虚無伝授

サイトはマチルダと別れると、フライを詠唱。森の奥にと進んだ。深夜であり、既に闇夜だが、日本でも山奥で修行してたサイトには苦労は無い。

そしてある小さめの湖の辺に来ると。

(サイト、この辺りで良いだろう。)

と、ブリミルの声がする。

「 師匠。では虚無魔法の伝授、お願いします。 」

(ウム、その前に少し準備が要るのでな。しばし待て。)

「 ハッ、了解です。 」

ブリミルはサイトの前に姿を現すと、呪文を唱えだした。

それもサイトが今までまったく聞いた事の無い呪文。

邪魔してはダメなので、黙って待つ事、数十分。

（クオオオオオツ。ハアアアアツ！！！！）

ブリミルの気合の入った声が響くと同時にズドンと言う音がする。

ブリミルの周りには見慣れぬ本、指輪、オルゴール等の宝らしきモノが落ちてた。

ブリミルはそれを火の玉ですべて焼き払ってしまった。

（ウム、コレで大丈夫じゃ。すべての王室にあった我が秘宝、すべてを破壊。焼却。

そしてロマリア、ガリアの虚無の使い手からは、虚無の系統を抜き去った。

残るはアルビオン、トリステインの使い手のみ。

サイトよ、コレで良いか？）

そうブリミルが言い、ニヤリと笑うと。

「ありがとうございます。ティファは忘却のみですし、ルイズは目覚めてすら居ません。」

取引材料に使うのでありがたいです。」

そう、ハルケギニアに散らばる王家の秘宝がすべてこの場に集まり焼却され、

しかも一番面倒なガリアとロマリアの虚無継承者から、虚無の系統を奪ってしまったのだ。

ブリミルは。

継承者が誰かは分からないが、簡単な土魔法の系統のみ残したらしいので、

コモンマジック程度は使えるみたいだ。

ルイズにしても王家の秘宝が失われたとあっては、もう虚無に目覚める事は不可能。

ティファニアはウエストウッドに侵入する旅人に忘却をかけるらしいので、

今は放置しても大丈夫とブリミルは判断した。

（サイトよ、これで今からワシが伝える呪文はお前一世代のみの伝授となる。

お前の虚無は一代のみで、すべて門外不出とせい。

そして後世には虚無は廃れたと伝えるのだ。いいか。）

「ハイ。虚無はある意味、自分達の国にある核爆弾よりも危険です。使える人間が残されると、何時かどこかで暴発してしまいます。我が子にも伝えず見せないつもりです。」

オレもこの世界が平和になったら、虚無は忘却をティファニアにかけて貰い、完全に忘れるつもりです。

また、万一自分が自白剤など飲まされて自白してしまったら大変な事になります。危険は少しでも減らしておかないといけません。」

（ウム、合格じゃ。じゃが念のためオヌシの脳細胞にもロックをかけさせて貰う。
よいか？）

「ハイ、構いません。」

（ウム、では、今から虚無の呪文を伝える。

エクスプロージョン
爆発

ディスベル
解除

イリュージョン
幻影

ワールド・ドア
世界扉

忘却

加速

以上七つの魔法。すべてお前の脳内に転移した。お前の脳にある呪文は口で唱えてはならぬ。

呪文を使いたい時は、使いたい虚無魔法の題名のみ口に出せ。それで発動する。

なを爆発エクスプロージョンのみは、戦闘状態で無い限りは発動しない。そう言う設定キーを埋め込んだ。）

「ハイ、確かにオレの脳内に呪文は埋め込まれました。ですが、実験とかは危険ですよね？」

（ウム。特に爆発エクスプロージョンは環境に優しいだけの核爆弾じゃ。普通の戦いでは使うな。

一番使い易いのは、加速、解除ディスペル、幻影イリュージョン、世界扉ワールド・ドア、忘却、じゃな。特に解除はどんな病気でも治してしまう。

本当は伝えたい呪文じゃが、他の呪文も伝わると大変な事になる。やはりお前のみで廃れるべきであるな。）

ブリミルはサイトに虚無魔法の危険性、そして使える呪文などをすべて伝えた。そして。

（サイトよ、お前の脳内には他に、タイムストップ、そして他の系統者から魔法の系統を抜き取る抽出呪文、並びに埋め込み呪文を伝えた。

ルイズや危険な人物を見かけたら、迷わず魔法を使えなくしろ。詠

唱は要らぬ。考えるだけでヨシじゃ。

そして魔法を伝授したい人物には、コモン系統のみ伝授できる。）

「ありがとうございます。師匠。」

コレでハルケギニアの危険人物から魔法を使えなくする事が出来ます。」

（ウム、それで良い。ただ、危険だと判断したら、躊躇はするな。迷いは他の人物の危険にもなる。）

「了解です。師匠。では、そろそろ次の段階を考えるべきですね。」

（ウム、お前はこの国には基盤がまだ無い。じゃから恫喝のみで無く、権威も必須じゃ。幸いにもワシはこの世界の始祖と呼ばれてる。じゃから、ワシがサイトの後ろ盾となろう。お前の地位が磐石となる日まで、ワシはこの世界に留まる。）

「苦労かけますね。師匠。」

（仕方ないぞ。何せ、腐った国。サイトの世なら核戦争でも起こす位の規模の手術も必要じゃ。）

この程度ならヨシじゃよ。）

サイトとブリミルの虚無、並びにその他の呪文の伝承はこれで終わった。

某国の使い魔が逃げたとか、覗きが出来なくなったとか言う騒ぎが起きたそうだが、それはまた別な話にて。

s t g 9 ガンダールヴと虚無伝授（後書き）

色々と言文チートして申し訳無いです。

すべてを完璧とする事が出来ず、脳内発動形式にしました。

でも、戦場でブツブツと詠唱してた想的になると思いませんか？

自分はそう思い、サイトの虚無等だけは、無詠唱発動としました。
次回は大騒ぎな国を書きます。

s t g 1 0 (閑話) 虚無が消えた人々 (前書き)

前話でブリミルに虚無を取り上げられたある国の方の混乱です。

stg10 (閑話) 虚無が消えた人々

stg10 (閑話) 虚無が消えた人々

「ミューズ、余のミューズよ。どこへ行くのだ。」

「フン、キモイ旦那だね。私はアンタなんか知らないわよ。さっさと国に帰して。」

「余のミューズよ、何故邪険にするのだ。余を慕ってくれてたのは無いか？」

「イヤなこった。私はこんな窮屈な城なんざ居たくも無いし、酒もガバガバ飲みたいの。お城なんてイヤ!!」

（何故こうなったのじゃ。つい先ほどまでは我が君と命も惜しまぬ献身をしてくれたのに。

突然豹変してしまい、普通の街娘と変らぬ様になってしまった。）

ガリアの無能王、ジョセフはつい先程まで、自分に尽くしてくれていた、

ミョズニトニルン、シェフィールドが豹変してしまったのだ。ヤンデレがアバズレとなってしまったのだ。そりゃ混乱する。

（何故じゃ、どうしてじゃ。）

ジョセフは無能だとか、地獄が見たいとか考えていたのが、既に霧散してた。

#####

ジュリオは突然、チンピラ時代のワルガキに帰ってしまった。

ヴィットーリオは今まで文句も言わず仕えてくれた使い魔、ヴィンダールヴが狂ったみたいに昔の暴れん坊になってしまった事

に混乱してた。

「わたしの使い魔、ヴィンダールヴ。どうしてわたしから離れて行くのですか？」

わたしに生涯使えてくれると約束してくれたではないですか。」

「坊さんよ。おれは何故こんな所に居るんだ？出してくれよ。こんな窮屈な場所、大嫌いなんだ。」

（おかしい。先程までは全ハルケギニアを見れた世界扉も見れなくなってた。
ワールド・ドア

そして使い魔の変心。）

「わたしは教皇聖エイジス三十二世こと、ヴィットーリオ・セレヴアレと申します。

ジュリオ殿、どうか落ち着いて頂けませんか？」

「偉い坊さんなんだね。でもおれはこんな窮屈な場所には一秒も居たくないんだ。

早く出してくれよ。ダチと街で遊びたいんだ。」

ヴィットーリオは、この言葉を聞いて痛感した。わたしの虚無は消えた、と。

「分かりました。今まで働いて頂いてた報酬、約1000エキューを支払います。」

ジュリオ殿、長い間、ご苦勞様でした。」

「オツ、そんなに金くれるんだ。ありがとう。」

じゃ遠慮無く貰って行くぜ。坊さん、ありがとね。」

配下の僧侶に金を準備させ、ジュリオに手渡したヴィットーリオは去り行くジュリオを眺めて・・・

（もう聖地に行くのは不可能だろうな。）と悟った。

s t g 1 0 (閑話) 虚無が消えた人々(後書き)

大混乱な国の人々でした。

色々と繰り上げ操作しましたので、少し短い挿話です。

s t g 1 1 ガンダールヴと微熱（前書き）

原作のお色気キャラ、キュルケの登場です。

stg11 ガンダールヴと微熱

stg11 ガンダールヴと微熱^{ヒネツ}

サイトはブリミルから虚無を伝授して貰うと、眠るために貴賓室へと帰って来た。

「フアーア、もうすっかり深夜だぜ。明日も忙しいかな？」

と、ブツブツ言いながら部屋に入ろうしてた。

すると、見覚えのあるサラマンダーが、自分のマント（皮製で表面は防弾加工も入ってる特注品）をくわえている。

「オイ、お前。何してるんだ？」

凄いでズルズルとサイトを引っ張る、サラマンダーを見てまた例のイベントかよ？
進展無いなあ？と理解した。

「分かった、付いて行くから。マントを放せ。
オレを連れて行かないと御主人様にご飯を抜かれるんだろ？」

きゅるきゅる と人懐こくサラマンダーは鳴いた。

「まったく、前世と同じパターンだな。キュルケは。
ま、今回は色々とおヤジに鍛えて貰ったから、プロ以外なら楽勝だ

る」

サイトは前世ではDTだったので、女性に免疫が無く、ルイズ如きに女を感じた未熟モノだった。

逆行して、精通が起きたら、オヤジが

「女を知れ、異界に行くなら、絶対に女性に慣れておけ。」と説得され、

僅か13歳でDT卒業、そして色んなお店に連れて行かれ、女性慣れさせられた。

「ま、適当にからかって寝るか。」

鼻歌を歌いながら女子寮のキュルケの部屋に着く。

ドアは開けっ放しなのも前世と同じ。

フレ임が着いて来いと首を振るので、部屋に入ると。

「扉を閉めて」とキュルケの声がした。

「ようこそ、こちらへいらっしゃい」

「真っ暗だよ。」

キュルケが指を鳴らす音がした。

すると、部屋の中に立てられた蠟燭が一つずつ灯って行く。

キュルケは10代の娘にしては派手なレースのベビードールを着てた。

サイトは心の中で、（父^{オッバイ}だけなら、行き付けの店のメロンちゃんといい勝負だな？）と考えてた。

「そんな所に立つて無いで、コチラにいらっしゃい」

「すまん、お嬢さんの名前も知らないし、オレは異国の貴族。万一の際は戦争の危険もある。これ以上近寄るのは断る。」

「そんなお堅い事を言わないで」 異国のメイジ、サイト様でしょ」

「ウム、いかにも。オレは日本帝国の貴族 サイト ヒラガだ。で、お嬢さん、何故、オレを呼んだ？

この爬虫類がオレのマントを銜え、引きずられてこの部屋に来たのだ。

外交問題となった場合はこのマントを裁判所に提出する。暴行加える気なら、正当防衛も考慮するぞ。」

「あ、そんなつもりでは。」

ただ、あたしは、

あなたがギーシュのゴーレムを倒した時の姿、凄くカッコよくて、それに、ギトーからの反撃からあたしを守ってくださって・・・。

まさに伝説のイーヴアルデイの勇者みたいに思えて。

だからお近づきになりたいくて、フレイムに貴方呼んで貰ったのです。

あたしの名前は、

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーです。

トリステインの隣、ゲルマニアの貴族です。」

「ウム、了承した。

だが夜半に男性をムリヤリ、しかも異国の貴族を引きずりこむのは、少し荒っぽいな。

オレは女性には割合寛容だが、敵対する人間には女性でも容赦は出来ないぞ。

今後は気をつけてくれ。」

「本当にすいませんでした。万一、問題となりましたら、公式に謝罪致します。」

「ウム、了承した。謝罪は公式に受け取りました。

そろそろオレも眠くなったから、帰らせて貰おう。

済まぬが女子寮の出口まではリードして頂けないか？

夜半に女子寮を男子がうるつくのはかなり問題あるしね。

オレも痴漢にはされたく無い。呼んだ責任として、出口まではリードを頼む。」

「分かりました。」

カーディガンをはおりますので、出口までお送り致します。」

「助かる。」

。サイトとキュルケは連れ立って女子寮出口へと向かう。すると・・・

「キュルケ、待ち合わせの時間に君が来ないから来て見れば。」

「ベリッソン、もう遅いから明日。」

「そ、そんなああ。」

「モテルね。君は。」

「イヤン、お友達です、ただの。」

「フフ、そうかい。だがあまり男性を挑発するなよ。」

経験のある男性なら、余裕を持って交せるけど、未経験の男性は本気になる。

下手すると刃傷沙汰だぞ。程ほどにしておきなさい。」

「そ、そうなんですか？今まで、そんなムードになった事は一回も無かったのです。」

「ウム、それは単に運が良かっただけだよ。」

キュルケさんみたいな魅力的女性が霞も無い姿で迫ったら、強姦されてしまうぞ。

格好が格好だから同意の上と思われてしまって、相手に責任を負わせられないぞ。少しは自重しなさい。」

「ご、強姦ですか。あたし、こうですけど、まだ未経験です。お母様が男性と付き合うのはいいけど、絶対に最後まで結婚まで許すな！と言われてたのです。」

「それが親として当然ですよ。ただ男性には通用しません。今みたいな事してたらね。じゃ、ココまで送って貰ったら出口です。送ってくれてありがとう。そろそろ帰って寝なさい。可愛いお嬢さん。」

サイトはそう言うと、ポケットからチュッパチャ。プを取り出し、キュルケの口に放り込み、ホッペにチュッとして、手を振り帰って行った。

「初めて、か、からかわれた。。。何よ、アレって。ホッペにチュッなんて微熱のあたしにする？それにしてもこの飴、美味しいわね。」

キュポキュポとチュッ。チャップを舐め始めたキュルケだった。

stg11 ガンダールヴと微熱（後書き）

本作サイトは色々と仕込まれたので女性に対しても余裕があります。
やはりキュルケは出しておかないとね。

夜中だったのも話を出しやすかったのです。

ギトー対決も入りましたので、一部加筆しました。

s t g 1 2 ガンダールヴと熱血調理人（前書き）

マルトーとの出会いです。

stg12 ガンダールヴと熱血調理人

stg12 ガンダールヴと熱血調理人^{マルチ}

キュルケ騒ぎですっかり深夜まで起きてたサイトは、朝寝坊してしまってた。

シエスタはサイトを起こしに来てたが。

「サイト様、サイト ヒラガ様。起きてください。朝ですよ?」

揺すっても声をかけても、ムニャムニャと言うばかりで中々起きない。

「困りましたねえ、どうしたらいいのでしょうか?まさか、叩いて起こす訳には行きませんし…。そうだな」

シエスタは人肌に暖めたお湯で絞ったタオルを持って来て、サイトの涎を優しく拭く事にした。

サイトは暖かいモノがホッペに当たるのに気づき、薄目を開けると。

「おはようございます。サイト ヒラガ様、シエスタです。今日も良いお天気ですよ。

このタオルでお顔を拭いてください」

サイトは感激した。普通、起こすと言うと前世ではルイズの鞭の嵐。日本でも母親の布団剥がしと言う経験しか無い。

こんな優しい目覚めなんて生まれて、イヤ、両方の人生を纏めて考

えても初めて。

「ウン、ありがとう。シエスタ、おはよう。今日もいい天気だね。そしてタオル、本当にありがとう。最高の目覚めだよ。」

「いいえ、勝手に部屋に入って、お顔にタオルを当てて申し訳ございませんでした。」

そろそろ食事の時間も押し迫っていましたので、本当に失礼とは思いましたが、起こさせて頂きました。」

「そうか、もうそんな時間か。色々と考え事してたら、すっかり寝るのが遅くなってしまってたね。お手数かけて本当に済まない。感謝するよ、シエスタ。」

「と、とんでもございません。私など、ただのメイド。仕える貴族様に対する礼儀を間違ってた可能性もあり、ヒヤヒヤしていました。」

「ウム。自分なら何も問題ありません。シエスタが例え、自分を叩こうがどうしようが、自分は貴女に暴力を振るう事は絶対にしません。」

安心しなさい。貴女はオレの大事な人の一人です。」

「そ、そうですか？でも昨日の食堂での貴族の方への発言には、私は感動しました。今まで色んな方が助けてくれましたが、サイト様みたいに、堂々と平民に味方すると発言された方は皆無。それに、あの強さ。」

私達平民のメイドやコック、召使は全員、サイト様の言葉に感激しました。本当にありがとうございました。」

「ま、まあ、あまり言わないで欲しい。少し言い過ぎたと反省してたのです。そうだ。頼みがあります。」

「何でしょうか？出来る事なら何でも仰ってください。」

「うん、厨房で朝食をご馳走して欲しいのです。朝からアレでは、少し胃に良く無いので、軽めに食べたいのです。」

「厨房ですか？即答は出来ませんが、コック長のマルトーさんに聞きますので、宜しければ厨房まで来て戴きませんか。」

「うん、では移動しましょうか……。すまん、着替えるので少し、外で待つて貰いたい。」

「し、失礼しました。すぐに出ます。ドアの外で御待ちしています。」

サイトはシエスタが外に出ると、パジャマを脱ぎ、ゴテゴテした貴族風の服に着替え、マントを羽織る。

「もう少し楽な格好にしたいけどねえ。ま、仕方ねーか。そうだ、マルトーさんトコに行くなら、アレ持つてくか。喜ぶかな？」

ドアを出ると、シエスタが待つてた。

「待たせたな。では厨房に案内してください。シエスタ。」

「ハイ、ではコチラに来てください。」

サイトとシエスタは厨房に向かって歩き出す。途中で貴族の子弟とすれ違うが昨日の騒ぎを見てた連中ばかりなので、もうサイトを挑発するバカは居ない。

そして厨房に着くと、シエスタがマルトーに断つて来るので、少しだけ外で待つてくれと言われ、厨房前で立ってた。

すると・・・。

「おおー、お前さんが我らが鋼のゴーレムか？

貴族の子弟相手にケガすらさせずに、叩き潰したってね。

オレも見たかったぜ。それに、平民の味方だって？最高だぜ。さ、コッチに来てくれ。最高の朝食を準備してある。」

朝から以前と変らぬ豪快なマルトーに、サイトは嬉しくなった。

「始めまして。オレは日本と言う国の貴族をしている、サイトヒラガと言います。

今日は無理を言ってますいません。

喜んで朝食をご馳走になります。」

「おお、遠慮するなって。さっ、コッチへ来な。もう出来てるぜ。」

「ありがとうございます。あっ、そうだ。

オレの国の調味料があるので、良かったら平民の皆様の賄いにも使ってください。」

サイトはポケットから胡椒や醤油、マヨネーズを取り出しマルトーに手渡した。

「オイオイ、こんな高級品をいいのか？」

「ハイ、自分の国では普通に安く買えます。御礼には物足りないとは思いますが、使ってください。」

「ありがたく戴くぜ。さ、メシが冷えてしまつ。暖かいウチに食べな。」

「ウム、では頂きます。」

こうしてこの世界でも、サイトはマルトーや厨房の皆との出会いが出来た。

前世と変らぬ、温かい皆に

（昔と同じだ。本当にいい連中ばかりだ。彼等を絶対に今度は守るぞ。）

と心に誓うサイトだった。

stg12 ガンダールヴと熱血調理人（後書き）

熱血調理人、マルトーとの出会いです。やはり彼も欠かせないキャラですしね。

次回はいよいよお待ちたせ、アホ姫の登場です。

史上最強のアホ姫を目指します。前編後編と二部構成となります。ヨロシク。

stg13 ガンダールヴとア水姫前編（前書き）

すいません。

本作の第一回の山場となりますので、前、中、後編と三部作になります。

まずは前編をご覧ください。

stg13 ガンダールヴとアホ姫前編

stg13 ガンダールヴとアホ姫前編
アンリエッタ

サイトは食事を終えると部屋に戻り、シエスタと紅茶飲んだりお菓子を食べたりして歓談してた。

菓子はもちろん地球製の持込品。（クッキーやポテチ）

シエスタもハムハムと喜んで食べてたのは当然。

そこへ、ロンクビル（マチルダ）が現れ、今日の昼にアンリエッタ王女が学園に来訪するので、

昼過ぎに学園長室に来て欲しいと告げた。

当然、マチルダにもお菓子を食べると言っと、彼女も喜んで食べたのは当然。

そして昼過ぎ。

王室の馬車、多くの護衛のグリフォン軍団、

そしてラ、ヴァリエール公爵家の馬車がトリステイン魔法学園に到着した。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーりーりーー」。

魔法学園の本殿前に王室馬車が止まると、扉をくぐって現れたのは、まずはマザリーニ枢機卿スウキキョウだった。

生徒や教師は一斉に緊張したが、マザリーニは意に介した事は無く、馬車の横に立つと、続いて降りて来る王女の手を取った。

生徒、教師、オールドオスマン達の間から歓声があがる。

王女はニッコリと薔薇アホの様な微笑みを浮かべると、優雅に手を振った。

「アレがトリステインの王女？フン、あたしの方が美人じゃないの。それにしても、昨日の異国の貴族、サイト様、素敵だったわ。あたしが完璧に子供扱いされたのに、全然イヤじゃ無かった。

口に入れてくれた飴も初めて舐める味だったし。

また機会が合ったら、是非、お茶でも一緒にしたいわ。」

と、キュルケがブツブツ言っていると横に立ってたタバサが、あるキ
ーワードにピンと来た。

「飴？初めて舐める味？」

「タバサ、アンタって食べ物には本当に目が無いのね。
そう、あの異国の貴族のサイト様に飴を頂いたの。とても美味だっ
たわ。」

「飴、舐めた事の無い飴。」

タバサは飴と言う言葉をブツブツと言いだした。

「また機会あったら、頂けないか聞いて見るわ。
女性にはとても優しい方ですもの。ルイズは嫌ってるみたいだけ
どね。」

「楽しみ。」

タバサとキュルケが会話をしていると、
かなり離れた列の後ろでルイズはガクガクと震えていた。

（お、お母様とお父様、それにエレオノールお姉様まで来てる。もうワタシは終わったかも。どうしよう。）

王女の後ろから護衛を挟んで歩くヴァリエール一族の姿を見つけて、ルイズは見つからない様にコッソリと隠れて見てた。

ルイズがガクガクと震えてると、それを見つけたロングビルが。

「ミス・ヴァリエール。オールド・オスマンが呼びです。学園長室横の控え室で待機してて下さいとの事です。」

遂に来た。

死刑判決にも等しい言葉にルイズは涙目で

「分かりました。」

と応えるしか無かった。

stg13 ガンダールヴとアホ姫前編（後書き）

タバサが初登場です。チラっと出ただけですが。
ルイズの処分がいよいよ始まります。

どうなるかお楽しみに。
次回アホ姫の中編です。

stg14 ガンダールヴとアホ姫中編（前書き）

アホ姫と枢機卿のコントです。

stg14 ガンダールヴとアホ姫中編

stg14 ガンダールヴとアホ姫中編
アンリエッタ

「はあふううう。」

「これで五十回目ですぞ。殿下。」

困った声でマザリーニは言った。

「なにがですか?」

「溜息です。王族たるもの、無闇に臣下の前で溜息などつくものではありませんせぬ。」

「王族ですって!! まああつ!!」

アンリエッタは大声で言った。

「このトリステインでの王様は貴方でしょ? 枢機卿。今、街で流行っている小唄はご存知ですかしら?」

「存知ませんな。」

大嘘である。

彼はこのハルケギニアの事なら大陸に住むドラゴンの鱗の数まで知っている。

都合が悪いので、知らぬフリをしてるだけである。

「それならば聞かせて差し上げますわ。」

「トリステインの王家には、美貌はあっても脳アホが無い。
脳があるのは枢機卿。灰色帽子の鳥の骨」

「街女が歌う様な小唄など口にしてはなりません!!!」

「いいじゃないの。小唄くらい。わたくしは貴方の言いつけ通り、
この学園の生徒の尻拭いに来たのです。」

どうしてわたくしが、たかが学園の生徒の尻拭いをしないといけない
のですか？

本当なら先日出た新しい美少年エロシヨウネン画報を読んで、寝て過ごせたのに。」

「殿下、ココは王室では御座いません。魔法学園です。もう少し考
えて発言してください。」

「いいでは無いですか。どうせわたくしは脳の無い姫。何時かは誰

かのお嫁に出されてしまうのです。
そう言えばお昼もまだでしたわね。枢機卿、メイドに命じて、何か
昼餉の用意をさせなさい。」

（マザリーニは頭を抱えていた。

国王が崩御して数年。

必死でこの国を支えてはいるが、国王姫は未だに喪に服したとか騒
いで、王政放棄。

昼間からワインを毎日飲みまくり、

王室に居る美少年衛士を居室に連れ込み乱暴しようとする始末。

危ないので、城に居る衛士は全員、中年女性衛士に変えなければな
らなかった。

王女は母を見習ったのか、アルビオンの皇太子と文通したり、
エロシヨウネン
美少年画報なる淫らな雑誌にハマル始末。

もう見捨ててしまおうと思ったのは数え切れない。

どうやってこの国を立て直せばいいのだ？

それに加えて今回の騒ぎ。

学園の生徒、ヴァリエール公爵の三女、

ルイズが異国の貴族を召喚してしまい、相手が戦争も辞さぬと騒い
でる。

オマケにハルケギニアの始祖、ブリミル様の弟子とか言っ。

もし本当ならこの国は終わりがも知れぬ。

だが、本当のブリミル様なら。。

我が国の悲哀を汲んで助けてくれるかも知れぬ。）

マザリーニは持ち前の優秀な頭脳で瞬間的に考慮してた。

「殿下、そろそろ会議の時間です。」

会議してる時に用は足せませんので、今の内に済ませておきなさい。」

「ブーブー。分かりましたわよ。枢機卿。メイドを呼びなさい。用を済ませて参ります。」

「ハッ。誰か、メイドを一人寄越しなさい。

殿下を厠に案内して欲しいのです。護衛の女性衛士も一緒に連れて行きなさい。」

しばらくすると、メイドと女性衛士に連れられて、王女は厠に行つた。

はあぁっ、どうしてこうなつたんだ？

かつて国王が元氣な頃は素晴らしい国だったのに。

今の自分はこの国が断崖絶壁から飛び降りるのを必死に捕まえてくれるだけの人間と同じ。

もうすべてを投げ出したい。

マザリーニはガックリと落ち込んだ。

そこへ……………。

（（苦しいか、我が弟子、マザリーニよ。））

「どなたですか？私を呼ぶのは？」

（（分からぬか。

そうだな。私の弟子と言ってもお主達にはワシの声は聞こえなかつ

た。）」

「まさか……。」

（ウム、ブリミルじゃ。

何時の間にかロマリアの糞坊主のメシの種にされてしまった哀れな存在よ。）」

「ほ、本当にブリミル様ですか？私は貴方に憧れロマリアの教会に入信したのです。」

（（済まぬの。ああ言う弟子になるとは、さすがのワシも考えも及ばなかった。

金の亡者となってるヤツラにはワシの声は届かず、民を異端とか騒いで虐殺するのも、救えなかった。

ワシも手足となってくれる存在が無ければ、現世に関与は出来なかった。

お前が今回呼び出された原因の異国の貴族、

そしてメイジのサイト ヒラガに会わなければ、

ワシもハルケギニアが滅びるのを、黙って見過ごすしか無かった。）」

「ハルケギニアが滅びるとは？」

（（ウム、そのままに意味じゃ。ワシが神界にて聞いた話じゃが、この世界は黄泉の国でも、腐った世界として有名ならしい。

神界の会合では、六千年も進化せぬ愚かな世界など滅ばしてしまえ！と言う声も多数出ておる。

ワシも自分が生んだ世界を滅ばせたくなど無い。
じゃが、このままでは神の世の逆鱗にも触れる。

マザリーニよ。お前ならワシの気持ち分かるじゃろ？）

マザリーニは思った。ブリミル様も私と同じ、滅び行く世界の崩壊を必死で止めようとしてる方と。

「ブリミル様、ごもつともです。このままではこの国も終わります。国王が崩御して、女王も王女も自分の欲望のみに忠実で、国に対する働きを完璧に放棄。私も必死で頑張ってるのですが、私ではどうしようも無い事も多々。

このままでは、ブリミル様が作り上げた国の一つ。トリステインも終わります。どうしたら良いのでしょうか。」

（（それに付いてワシからも提案がある。
もうしばらくしたら、ワシの最後の弟子、サイトとの会議が始まる
だろう？

そこでな……………）

ブリミルとマザリーニは同じ苦しみを抱えた同士として、
王女が帰るまで、秘密会議をしていました。

王女が帰った時には、マザリーニの顔は明るくなってたとか？

（枢機卿、わたくしが居ない時に自分だけご飯食べたのね？）

アホ姫は明るくなつてたマザリーニの顔を見て、

自分だけメシを食うな。自分にも食わせろ!!と騒ぎ出し、

仕方なしに会議が一時遅れたのは愛嬌ですか？（T―T）

stg14 ガンダールヴとアホ姫中編（後書き）

アホ姫は手温かったでしょうか？

もつとアホにしろと言っ意見ありましたら、是非、お知らせください。

下品にならなければ採用致します♪

次回はサイトとアホ姫の会議です。
ルイズの処分も始まりますよ♪

stg15 ガンダールヴとアホ姫後編 1（前書き）

後編1です。

アンリエッタが暴走してて、中々会議が進みません。（T|T）

stg15 ガンダールヴとアホ姫後編 1

stg15 ガンダールヴとアホ姫後編 アンリエッタ 1

会議の予定時間になって既に一時間半。

その間、王室のメンツは未だに学園の会議室には来ない。

ルイズは黙って、隅の椅子に座り、裁断が下されるのを脂汗流しながら待ってた。

サイトもイライラはしてたが、ブリミルのテレパシーで王女とマザリーニの会話を聞き、騒ぐのを控えて黙って待ってた。

やがて。。。

「トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーーーーりー
ー。」

ようやくアホ姫登場です。

何やら爪楊枝みたいなくわえてシーハーシーハーしてるのは、
何かの冗談ですか？

「ア、アンリエッタ王女。ようやく来られたのですか？」

と、オスマンが言うと。

「ええ、王女たるわたくしは昼餉も食べていなかったのです。それではこの大切な会議に、頭脳停止と言う重大な事が起き得ます。ですので、昼餉を取り、脳の活性化を図って来たのです。オスマン、楽しみに下さい。」

（つたく、このアホ姫はアホにさらに磨きがかかっていやがる。ヴァリエール公爵一家なんざ、完全にキレかけてるぞ、どうすんの？烈風殿がキレたら、ワシでも止められないぞ。）

「コホン、アンリエッタ王女、今回の招致に応じて頂き、本当に感謝しております。」

さて今回の会議ですが、本学園に在籍している、

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエール嬢の使い魔召喚の儀式にて、

コチラにいらっしゃいます日本帝國の貴族のメイジ、
サイト・ヒラガ殿を召喚してしまったのです。

彼の国はかなり大きい国らしく、今回の拉致に対して大変お怒りです。

我々も彼の怒りを納めて頂こうと努力してるのですが、収まりません。

そこで、国のトップたるアンリエッタ王女に来て頂き、彼に話をし
て頂き、

トリステイン王国としての対応をお願いしたいのです。

学園としては、政治に関わる事に手が出せません。宜しく願います。
」

オスマンはアホ王女にすべてを投げるのは危険とは思ったが、

既に二時間近く待たせ、イライラしてるサイトにビクビクしてた。

ココはアホ王女にすべての責任を与え、自分は逃げようと考えてた。

「まあ、ルイズが召喚した方が異国のメイジですって？始めまして
このトルステイン王国の王女。

アンリエッタ・ド・トリステインです。

ニホンテイコクの貴族のメイジ、サイトヒラガ様。始めまして。」

「始めまして。私はロバアルカイエの東方にある日本帝國の貴族、
サイト ヒラガと申します。

さて、今回はオールドオスマン校長の話された通り、

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエール嬢の
使い魔召喚とか言う儀式でいきなり、この国に拉致されてしまいま

した。

我が国としては、他国に。それも当人の許可も無く、拉致すると言う事は、発覚した時点で開戦条件になります。

未だに自分の国との交信が出来ていないので、いきなり開戦とはしませんが。

貴殿の国は我が国との戦争をする気でもあるのですか？」

「まあ、凜々しい方♪戦争なんて怖い事、わたくしが考える訳が無いでしょ？」

それよりもサイト ヒラガ様。わたくしとお友達になって下さいません♪

凜々しくハンサムな殿方つてとても好感持てますの♪」

（（オイオイ、このアホ姫、どうする気よ？相手が怒ってるのに逆なでしてやがるぞ。））

マザリーニはこのままでは荒れると思い、慌てて発言をした。

もう殿下は喋るな！と。目で威嚇。

「コホン、失礼します。サイト・ヒラガ様。
私はこの国の枢機卿、マザリー二と申します。
我が国の王女、アンリエッタ殿下が失礼な発言をした事を謝罪致します。」

「ほほう。王女の発言とは思えぬ言動でしたので、
どう答えて良かったのか、迷ってた所でしたよ。
では、今の発言は国としての発言では無かったと仰るのですね？マザリー二枢機卿殿。」

「ハイ。殿下はお疲れしてるみたいです。しばらく休めば治ると思います。
それまでは私が殿下の代わりに貴方と協議させて頂きます。」

「枢機卿、わたくしは疲れてはいませんわ♪
それよりもサイト ヒラガ様、わたくしとお茶でも飲んで寛ぎませんか？」

さすがのマザリーニも脳の血管が切れる寸前になった。そこへ。

「はっつ
っ」

何時の間に忍び寄ったのか、
ルイズの母、カリィヌがアンリエッタの背後に回り、軽く首をチョップ。

気絶させてしまった。

「殿下はお疲れみたいです。私が隣室に運びますので、会議を進めてください。」

カリィヌの機転で荒れそうな空気が一瞬で霧散した。

マザリーニはカリィヌに「GJ」と指を影で立てた。

カリィヌとメイドに抱えられたアンリエッタは気絶して退場。

ルイズはアンリエッタの姿が次の自分に見えてガクブルしてた。

（アンリエッタ様すら、簡単に気絶させたお母様が私を許す訳が無い。

どうしたら助かるの？もう逃げたい。。）

ルイズは足元が脂汗でビツシヨリ濡れているのも気づかない程、疲れていた。

stg15 ガンダールヴとアホ姫後編 1（後書き）

後編が数回になりそうなので、数字を入れる事にしました。
アホ姫を退場させましたが、どうなる事やら。

誰かマザリーニに胃薬を。（T―T）

stg16 ガンダールヴとアホ姫後編 2 (前書き)

後編2です。

ブリミル降臨します。

stg16 ガンダールヴとアホ姫後編 2

stg16 ガンダールヴとアホ姫後編 アンリエッタ 2

カリーヌは苛立ってた。

我が娘、ルイズが異国のメイジ、しかも貴族を召喚してしまい、国としての対応を迫られ、

さらにあの我が国の姫が、幼児以下のオツムになってた。

もう止めるしか手は無く、気絶させてしまった。後で王妃に文句言われるだろうが、それは仕方ない。

あのままでは、会議が荒れ、今日だけでは会議が終わらない可能性もある。

この様な辺鄙な学園に王妃を留めて置くのも危険だ。早く終わらせて城に帰らせないと。

それよりもルイズだ。

彼女が無能なのは承知してたが、まさか異国のメイジを召喚してしまい、

さらに国家問題となるとは。

カリーヌは昨日からロクに眠れなくて、目も血走っていた。どうしたらいいのだろう??

マザリーニはアンリエッタが退場した事で、割合と気楽にはなった。サイト ヒラガ。彼はあのブリミル様、最後の弟子。

ブリミル様を疑う余地は無く、完璧に私はブリミル様を信じた。

神の世も我が国と同様。色々と荒れているらしい。そしてその矛先がこのハルケギニアだ。

放置してたら、国どころか、ハルケギニア事態が消えてしまう。

何としても、世界崩壊を止めないと。

そのためにも、この会議でサイト ヒラガと言う異国のメイジとの関係を改善しないといけない。

我が姫に任せてたら、会議自体が崩壊してただろう。カーリーヌの機転によって救われた。

さすが年老いても烈風殿だ。助かった。

「えーっ、色々と遅滞してしまい、サイト ヒラガ様、本当に申し訳ありません。」

トリステイン王国として、今回の召喚の儀式にて、貴殿を許可無く拉致してしまった事を公式に謝罪したいと思います。」

「ウム、了承した。ただ、謝罪とは言葉だけの謝罪か？我が国は歴史も数万年あり、多くの兵士、国家も一億人を突破してる国だ。私も平賀家頭首として、日々鍛錬を続けていた。その日々がいきなり拉致と言う事件で消えてしまったのだぞ。」

我が国に居る、私の家の家族、そして貴族の面々がいかに心配してるか？

貴殿達には理解できるか？」

「返す言葉もございません。では、サイト ヒラガ様、どのようにして詫びたら宜しいのでしょうか？」

「ウム、オレはこの国、いやハルケギニアを作り上げたと伝えられてるブリミルと言う偉大なメイジと異界にて知り合った。」

彼の言うには我が国に帰れる魔法もありそうだが、それには膨大な時間がかかると言う。

私も何時までもこの学園に住むのは心苦しい。よって、この国に日本帝國大使館を作る事を許可して欲しい。」

（（（日本帝國大使館??）））

「そうだ。大使館とは他国に出来る小さな国家とも言える城だ。私もメイジ。異国で暮らす訳にはいかぬ。

よって大使館を作り、トリステインで帰還出来る魔法が見つかるまで、トリステインに暮らす事を許して欲しい。」

「ですが。」

「なら、今すぐ自分を祖国に帰せるのか？遠いロバアルカイエの地まで。ムリだろう？なら妥協して欲しい。

もちろんこの国に暮らす以上は国の法律に従う。だが、大使館内は我が祖国同様として認識して欲しいのだ。」

「そうですね。でしたら、土地とかはどうされたいのですか？」

「ウム、トリステインに跡継ぎが無くて、放棄されてる領地はあるだろう？その領地を有償で借り受けたい。

税はこの国の基準に応じた物を支払うつもりだ。ただ、その土地で色んな作物とか育てて、市場に流す事を許可して欲しい。

そして、土地に住む人の安全は自分に任せて欲しいのだ。」

「うーむ。そうですね。ド・オルニエールと言う領地があります。

そこなら跡継ぎも居なくて、王家直轄領となっていますが、

今は完全に放置されております。そこはいかがでしょう？三十アルパン程度の広さです。」

「うむ。その程度あれば助かる。なら、その土地は我が日本帝國固有の借用地として、数年単位で借り受ける事にしたい。」

そこだ。マザリー二氏。」

「な、何でしょう？」

サイトはニヤリと笑い、こう言った。

「今から五年分の借用地代は貴国の責任として、支払って貰っても良いだろう？私を拉致した慰謝料としてね。」

「グツ……。大きいですね。」

「仕方ないだろ？貴国の子弟の召喚騒ぎで私も巻き込まれた被害者だ。」

な？ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエール嬢殿。

「

名前を始めて呼ばれたルイズはすっかり参ってしまった。

（お母様も先程からジロリと睨まれ、エレお姉さまはカリカリしてるみたい。）

明日の朝陽を私は見る事は出来るの？）

「サイト ヒラガ様、私達の娘、ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエールが

貴殿と貴殿の祖国に多大な迷惑をおかけした事、私、ラ・ヴァリエール公爵が公式に謝罪致します。

ド・オルニエールの借用地代は私共の家が支払います。

そして、使用人が居ないと言う事であれば私の家からも派遣致します。

す。

どうか、私達の娘、ルイズに対し寛大なお許しを頂けないでしょうか？」

ヴァリエール公爵が娘のために異国の貴族に頭を下げ、地代も支払う。その上に使用人まで回すと言うのだ。

他の貴族、王室の面々はビックリした。あのヴァリエール公爵家の頭領が頭を下げたのだ。

「・・・分かりました。ヴァリエール公爵。では、貴殿の提案をお受けしましょう。ですが、地代については、私の経営が軌道に乗るまでで結構です。

私もオニではありません。またルイズ嬢の事も許しましょう。今後は他人にいきなり暴言とか吐くのはどうかと思いますがね？」

「ルイズ！……」

「ゴ、ゴメンなざああい。ザイト ヒラガ様。もう二度と他人には暴言は吐きません。あの時の事を許してください。」

半泣きでルイズは謝罪、それも土下座してた。ココまでして、許さないと、サイトが悪くなる。

「分かりました。ルイズさん、貴女の事を許しましょう。そうだ。貴女は魔法が使えないのですよね？」

「へ？？そ、そうですね。何時もゼロのルイズとか友達にも言われてます。」

「私の師匠、彼方達の国の始祖と言えはいいかな？ブリミルが心配

していました。

ルイズさんがコモンマジックすら使えないのは、何か系統に異常がありそうだからとか。

王室、並びに他の学園関係者の皆様の許しがあればこの場にブリミル氏を召喚出来ます。

そしてルイズさんの魔法の異常についても、彼が解明出来ると思うのです。どうでしょ?？」

(((((ブ、ブリミル様がこの場に!!!!)))

「ハイ。その通りです。」

マザリーニはブリミルとのサミット通りのシナリオに乗って来たな?とニヤリとした。

「分かりました。トリスティン王国代表代理としてこのマザリーニ枢機卿がこの場でのブリミル様の降臨をお願いします。」

「了解しました。」

だが、空気を読めない愚か者は絶対に居るモノです。

「いい加減な事を言うな!!他国のメイジ如きにハルケギニアの始祖、ブリミル様をお呼び出来る訳が無いだろう!!」

「ほほう。疑われるのですね?」

「そつだ。」

「うーん。では、取りあえずお呼びします。で、本人に色々聞いて皆様で判断してください。枢機卿様、それで宜しいでしょうか？」

「構いません。疑う人が出て後で色々と言われるのもアレでしょう。ブリミル様は、すぐに来られるのですか？」

「もう来て居ますよ。」

サイトがそう言うのと。

（トリスティンの民よ、ワシがブリミルじゃ。）

「あ、貴方様がブリミル様ですか？」

（……ふむ、皆の者はまだ信じておらぬようじゃの。）

「あ、いえ、その……。」

（かまわぬ。いきなり『ワシがブリミルじゃ』などと言われても信じられないのが当然じゃ。

もし、すぐ信じる者が居たとしたら、むしろその方が『まともではない』じゃろう。）

「……………」

確かに彼等の目から見ても、目の前の『霊のような存在』は、神とすら思えるほどの威光を備えている。

しかし、その威光が見せかけでないと言い切る自信は、彼等には無かったし、

たとえそれがどれほどのものであろうとも、『威光だけ』で、目の前に居るのが

『本物のブリミル』であると信じる気は、彼等には無かったのだ。

そんな彼等に、目の前の『ブリミルを名乗る存在』が問いかける。

（信じられぬのは当然じゃがの……では、少しばかり証拠を見せるとするか……。

カーリヌよ、今ここで、ほんの少し魔法を使ってみてほしい。）

いきなりルイズの母、往年の烈風のカーリンが指名されてしまった。

「どういうことですか？王家の面前、しかも室内ですよ。」

（やってみれば解る。この中の民で一番強力な魔法を放てるのはカーリヌだけだろ？

とにかく、何でもいいから、ほんの少し魔法を使ってみてはくれぬか。）

いぶかしげな顔で、それでも杖を取り出すカーリヌ。

危険の無い偏在を作るつもりで呪文を唱え、杖を振る——。ところろが何も起こらない。

得意なはずの魔法が成功しないことに狼狽し、今度は「ライト」の呪文を唱える――。

ところが、初歩の初歩であるはずのその魔法すら成功しない。

「こ、これはいったいどういうことなのですか。」

見るからに動揺した様子で、カリィヌが尋ねる。

（何、一時的に魔法を使えなくしただけじゃ。どうじゃ？ メイジに魔法を使えなくする、このような魔法を聞いたことが有るかの？）

「い、いいえ……。」

（このようなことが出来る者が、ワシ以外に居ると思うかの？ 居るとすれば、伝説の「虚無」のメイジくらいなものじゃと思わぬか？）

「……………」。

（…どうやら信じる気になったようじゃの。）

そうしてプリミルはこの部屋に居るサイト以外の全員を恫喝する様な威厳を持って言い始めた。

（聞け！ 私は、お前たち自身のために、お前たちに魔法を与えたのではない！

お前たちの魔法は、お前たち自身のためにあるのではない！

私は、平民たちを助けるために、お前たちに魔法を与えたのだ！
お前たちの魔法は、平民たちを助けるためのもの、そのためのだけのものなのだ！

お前たちは、平民たちを助けるためだけに、魔法を与えられたのだ！ 与えられているのだ！

にも関わらず、お前たちは、私の与えた魔法で、平民たちを虐げている！

はつきり言おう！ 貴族のために、平民たちが存在するのではない！

平民たちのために、貴族が存在するのだ！

貴族とは、平民たちのために生きる者のことを言うのだ！

平民たちのために、おのれのすべてを捨てられる者のことを言うのだ！

おのれの命をも投げ出して、悔いることの無い者のことを言うのだ！

平民を虐げる貴族などは、貴族ではないのだ！ 貴族たる資格は無

いのだ！

解ったなら、今後は平民たちのために生きるが良い。平民たちのために、すべてを投げ出すが良い。

もしお前たちの中に、今後も平民たちを虐げる者が居たならば、その者たちはすべて、

我が最後の弟子たるサイトによって、八つ裂きにされると見え！）

ルイズは完璧に気に当てられ、

その他の貴族はグリーンと脳を打たれたショックで呆けてしまった。

マザリーニはブリミルに、

「私達、後世の跡継ぎがブリミル様の偉大な魔法もハルケギニアも貶めていたのですね。」

と、話すと、ブリミルは。

（ハルケギニアが以前より良くなっておれば、ワシも文句は言わぬ。

しかし現実には、良くなるどころか、むしろ悪くなっておる。

お前たちは気づいておらぬかも知れぬが、畜生でも六千年もあれば、少しは進歩するのじゃぞ。

お前たちはワシの時代から、むしろ衰退してしまっておる。このままでは、この世界は終わる。

じゃからこそ、ワシはサイトの力を借りて降臨したのじゃ。

ワシが居なくても進歩できる世界にせよ。我が後輩たちよ。）

会議に出席してる面々はすっかりショゲてしまった。

国としてダメダメと決定付けられたからだ。＞あの姫居なくてもこのザマだからな。

アレが居なくて良かったと思ってる。全員が。

（（ウム、理解してくれたようじゃな。で、サイト。ワシに相談があったのじゃろ？））

「ハイ、ブリミル様。自分をこの地に召喚してしまったルイズ嬢がコモンマジックすら使えず、悩んでいる様なのです。

ブリミル様なら彼女の悩みを解消できると思いますが、何とか出来ませんか？」

（（ウム、造作も無い事じゃ、ルイズとやら、ワシの前に立て。））

ルイズはいきなりブリミルに指名され、ビビりながらも、魔法が使える様になるかも知れない？

そう思ってワクワクする気にもなった。

「ルイズ、母も傍に居てあげる。心配しないでね。」

珍しくカリィヌがルイズに声をかけ、応援してくれた。

「ちびルイズ、ビビってたらダメよ。ゼロを解消できるかも知れないのよ。」

エレオノールが応援してる。明日は嵐かも知れない。

「ルイズ、私の可愛いルイズ。魔法を使えるチャンスじゃ。ブリミル様にしっかりとお願いしなさい。」

父親の公爵は相変わらず。

「ハルケギニアの始祖、ブリミル様。始めまして。私はトリステイン王国のヴァリエール公爵家三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエールと申します。

本日は私のために偉大な力を授けて頂けるとか。心の底から感謝します。」

（「ウム、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエールよ。ワシがブリミルじゃ。」

今から貴殿の魔法の濁りを取り除き、コモンマジックは確実に出来る様にしてやる。その後は普通のメイジの如き、系統魔法の練習をして、修練せよ。）

「あ、ありがとうございます。このルイズ、生涯の感激です。」

（「ウム、では始める。なに、すぐに終わるぞ。終わったらライトを詠唱して見よ。出来る様になるハズじゃ。」）

「分かりました。ではお願いします。」

（「ウム、\$#&%、?*****
ッー!）

カーーーー

ブリミルが意味不明の呪文を唱え、大声を出すと、稲光がルイズの頭上に光った。

（もう終わったぞ。ルイズ。ライトを唱えて見よ。）

「ハ、ハイ。ライト♪」

まあ、何て事でしょう？
ルイズには絶対に出来なかったコモンマジックの基本、ライトが出てくるではありませんか？

「ルイズ、おめでとう。」「」

家族の皆が大喜びしてる。ルイズは大泣き。

「お父様、エレお姉さま、お母様。そしてちいお姉さま。ルイズ、ついにメイジになれましたああああ！！」

感動のシーンの裏側では、サイト、ブリミルの悪代官が脳内サミットしてたとか。

（（サイトよ、うまく行ったな？これでトリスティンの虚無も消えたぞ。

オマケに敵対する可能性の高いヴァリエール家も取り込めた。）（

（（師匠、お疲れ様でした。で、ヤツの系統はどうしました？）（

（（モチロン、土のドットよ。

あんな沸騰点の低い小娘に火とか水とか使わせられる訳が無いじゃろ。

ちなみに使い魔召喚したら、アレじゃよ。）（

（（ウワッ、師匠もオニですね？？？）（

（「グフフフ。その程度は前世でサイトを殺してしまった鬼女に対する罰としては軽いじゃろ??」）

（「まあ、もうどうでもいいですよ。この世界のヤツとは違う女ですからね。」）

（「腐った根は早く抜っておくべきじゃよ。
ちなみにヤツの母親の魔法の威力も弱めておいたわい。
今はラインクラスじゃろ?」）

（「あのオバハンも危険ですからね。
その程度なら、何らかの病気とかで納得するでしょ??」）

（「（そうじゃの。グワハハハハハハ。）」

こうして、ヴァリエール一家の悩み、

ルイズは一応、メイジとして認められる事になりました。

彼女の未来は前世より暗くなるのか?それとも・・・。

s t g 1 6 ガンダールヴとアホ姫後編 2 (後書き)

ブリミル降臨でした。このシーンの大半の提案者は
にしなさとする様でした。

本当にありがとうございました。
訂正入れました。にしなさとする様。

アホ姫は大人しく寝てたみたいです。
あと一回だけ、この会議は続きます。
アホ姫が居るもんでね。

s t g 1 7 ガンダールヴとアホ姫後編 最終章（前書き）

アホ姫編最終章です。

ワルドの最後でもあります。

stg17 ガンダールヴとアホ姫後編 最終章

stg17 ガンダールヴとアホ姫後編 最終章
アンリエッタ

アンリエッタは寝て居た。

「んぐおおお、んぐおおお。」

カリーヌに首筋を叩かれ、気絶だけのハズなのに、一回起きてそのまま寝てしまった。

寝る子は育つと言つが、彼女のオツムは退化する一方らしい。

(殿下、アンリエッタ殿下。)

（誰かしら？わたくしを起こそうとする悪魔は？わたくしは眠いんです。

何時もマザリーニに、こき使われ、疲れてるんです。せつかく横になったのです。

もう少し寝かせてください。）

「殿下、カリィヌです。そろそろお城にお帰りして頂く時間ですよ。早く起きないと、お部屋にある、美少年画報を全て私の魔法で焼却しますわよ。」

（何と恐ろしい事を言うのでしょうか。
残念ですが、起きないと私の宝は焼かれてしまうのです。）

「カリィヌ、起きるから止めて！」

「殿下、寝たフリしてましたね？もう美少年画報を買って来てあげませんわよ。」

「絶対にダメ、お願い。言う事聞きます。カリィヌ。許して」

何て事でしょう。

アンリエッタが大好きな美少年^{エロショウネン}画報の仕入先がカリィヌだったとはマザリーニも知らないルートだったのです。

さすがのアンリエッタもカリィヌには頭が上がりません。

「殿下、大切な会議でふざけるのは王女として失格ですね。
今日は我がハルケギニアの始祖、ブリミル様も降臨されたのですよ？」

「ふーん、ブリミル様ね？それよりカリィヌ、わたくしはお腹が空いたのです。

メイドに何か持って来させなさい。」

「殿下！！寝て遊んで、馬車に乗って。殿下の仕事はしたのですか？枢機卿が一人で殿下の代役をこなし、
国としての威厳もどん底。どうするつもりですか？」

「だってええ。わかんないモン。」

「殿下！！！」

「それよりもアノ異国のメイジ、サイト ヒラガ様はどうなさった

の？」

「彼はブリミル様の弟子です。私達とは比較にならない方となります。」

「ヘー、やっぱり凄い方なんだ♪じゃ、今度遊んで貰いましょう」

「…………殿下…………。（泣）」

まったく脳の無いパープー姫にカーリヌはすっかり疲れてしまった。

起こすだけでコレです。

マザリーニは毎日、「コレ」と付き合っ居るのです。

早く嫁に出して、他の王家の血でも入れてしまった方がこの国のためにもなるだろ？

と、考えたカーリヌを誰が責められるでしょう。

こんなお花畑の王室なんて、滅ぼしてしま……。いえ、言うてはいけないのです。

やはりこの水の国トリスティンの王室は大切なのです。

でも今日は喜ばしい日でもありました。我が娘、ルイズが魔法を使えたのです。

ああ、この姫をお城に送り返したら、家族で祝杯ですわ♪

閃光のワルドは嫉妬してた。

あの伝説だったブリミルの弟子とか言う異国のメイジに。

会議の最中に降臨したブリミルの後光は凄まじいモノだった。

何とかブリミルに近づきたい。

彼に近づけたら聖地に向かう事も出来るかも知れないのだ。

この国の未来には絶望してたが、（何せ、アノ姫だ。）私はブリミル様の弟子になりたい。

そのためにはいかな無茶でもしよう。

私は閃光のワルドだ！

「異国の貴族、サイト ヒラガ殿ですか？」

「そうだが。貴殿はどなたか？王族の護衛だろう。妃殿下を城に送らなくてもいいのか？」

「護衛は十分居る。今日は非番にしてもらった。

それよりもお願いがあるのです。異国のメイジ、サイト ヒラガ殿。

」

「忙しいのですがね。何の用ですか？」

「私と手合わせして欲しいのです。貴殿は素晴らしいメイジだとか？一度凄腕のメイジと対決したかったのです。」

「うーん。それでは、こうしましょう。私の師匠、ブリミル氏が審判。

命の危険が起きた場合は、即刻中止。魔法は禁止。お互いの刀で対決です。どうでしょ？」

「構いません。では刀とレイピアでの決闘で宜しいですね？」

「御待ちください。師匠とも相談して見ます。師匠、宜しいでしょうか？」

（（サイト、声で答えるなよ。ヤツはレコンキスタの犬じゃ。）（

）（やはり。前世でも何とか片手を切りました。今生でも犬ですか。

」

「（ウム。で、ヤツの目的がエルフの住むサハラにあると言つ「聖地」に向かう事らしい。

下らぬ欲望で、自分の国すら売る外道じゃ。サイトよ、どうする？）

（ならこうしましょう。師匠・・・・・・・・・・。）

サイトとブリミルはテレパシーで、ワルドとの決闘をどう処理するか、話し合いました。

「ミスタ ワルド殿、師匠も了承してくれました。

ですが、魔法を使って戦うと、お互いに被害も多くなるでしょう。自分は刀で戦います。

杖は置いて、刀での決闘なら貴殿との決闘に応じます。如何します？閃光のワルド殿？」

「異国の貴族、サイト ヒラガ殿。自分もそれで結構です。では、どちらで戦いますか？」

「少し離れた場所の学園内にヴェストリの広場があります。そこで如何でしょう？」

「結構。ブリミル様。宜しくお願い致します。」

（（サイト、そしてワルドよ。お互いの剣に誓うのじゃ。
お主達の魔法力はあまりにも強大。

決して魔法に頼らず、己の持つ力のみで対決すると言う事を。）（

「「剣にかけてブリミル様に誓います。」」

（（ヨシ。では、夕闇になると不味い。早速、決闘の場に向かおう。
王室の面々よ。済まぬが、こうなった。）（

アンリエッタ姫、マザリーニは突然始まった決闘に大喜びしてた。

「ブリミル様、この様な古風な決闘とは、本当に珍しいです。
私達王室の面々も見学させて頂いて宜しいでしょうか？」

「まあ、帰るだけと思ってたのに、こんな楽しい事があるなんて♪♪
異国の貴族、サイト ヒラガ様♪ 我が国の貴族、閃光のワルド様♪
存分に戦ってください。水のメイジも待機させておきます♪
ブリミル様、始めまして。この国の王女、
アンリエッタと申します。不束者ですが、宜しく願います。」

（（アンリエッタよ、マザリーニよ、そしてすべての民よ。我が弟子サイト、そしてワルドとの決闘。存分に検分せよ。そして我が弟子の力を見よ。））

（クツ、何だ？あのブリミル様の異国の貴族に対する信頼は？口惜しい。絶対に倒してやる。）

ワルドはどうやって倒すか必死でシュミレートしてた。魔法の発生が止められてたので、得意の偏在は使えない。王室の面前だ。

いきなり約束を違える事は不味い。剣で勝てるならヨシ。だが負けそうになったら・・・。）

ヴェストリの広場は、多くのギャラリーが既に集まってた。学園の生徒や教師、平民のメイドやその他の面々。

そして、護衛に囲まれた王室のアンリエッタ、マザリーニ。ヴァリエール一族。

「ワルドさん、では決闘を始めます。」

介添え人は「ブリミル様」です。正々堂々と戦いましょう。」

「異国の貴族、サイト ヒラガ殿。

決闘に応じて頂き、この閃光のワルド。感謝する。

ブリミル様。介添えを宜しく願います。」

（（ウム。任せろ。

では、兩人よ。魔法発動を止めるため、ワシにお互いの杖を預けるのじゃ。）（

「ハッ。これです。」

ワルドとサイトはブリミルに互いの杖を差し出し、魔法発動が出来ない様にした・・・つもりだ。

（フッ、杖が無くとも私はレイピアとも契約してるのだ。イザとなったら・・・。）

ワルドの計略は既に駄々漏れだったが、サイトとブリミルは無視して、決闘に応じた。
今後のためにも、王室の面前でワルドを潰せると言うのは願っても無い事だからだ。

（（では、兩人よ。始め！！））

「ハッ！！」

サイトはデルフリンガー、ワルドはレイピアにて飛び交った。

（相棒、ようやく今生でオレ様を使ってくれるね。オレ様も嬉しいよ。）

（デルフ、ブリミルから聞いたと思うけど、今は声出さないで普通の剣のフリしてくれよ。）

（あいよ、分かってるって。相棒♪）

双方共に凄い力の持ち主だった。

サイトはサポーターで隠したルーンを輝かせ、
ガンダルーヴの力をデルフリンガーに伝え、ワルドもレイピアに魔力を伝えてた。

ブリミルとサイトは分かってたが、あえて無視してたが。

「枢機卿、あの異国の貴族、サイト様。素晴らしい剣の力を持ってたんですね♪」

まるでイーヴァルデイの勇者様みたいですね♪」

「姫、彼こそが我が国のイーヴァルデイになるかも知れぬ方です。決して失礼な言葉吐いてはなりませんぞ。

またブリミル様にも口には注意するのですぞ。我がハルケギニアの始祖です。」

「ブーブー。分かってますよーーだ。」

「姫っ!!」

（はぁ、今日はこの魔法学園に泊まるハメになったが。

大丈夫かよ？ブリミル様にも少しお願いした方が良さそうだな・・・。

）

マザリーニは後でブリミルにも姫がアホしない様に頼む事を考えてた。アホでもこの国の姫。

ヴァリエール一家も、この決闘に注視してた。

カリイヌは、自分と同じ、風使いのワルドと異国の貴族、サイトの対決に我が身があの場合に居たらどうなるかと、シュミレートしてた。

ヴァリエール公爵は隣の領の貴族、ワルドとサイトの力量を測るために、一秒も見逃すまいと、目を輝かせてた。

ルイズは婚約者のワルドとアノ！異国のメイジの対決を見てた。やはり口惜しいので「ワルド様、頑張つて。」と必死に声援してた。

学園の生徒や教師も注視してた。

タバサは「あの異国のメイジ、強い。」と冷静に観察してるし、

キュルケは「サイト様、やはりあの方はイーヴァルディの生まれ変わりだったのですね。」

キュルケの微熱、キュンキュンしてますわ♪」と微熱加速中だった。

そうして、戦う事、数刻。

ワルドはサイトに押されて来た。

（グッ、不味い。この男、本当に強い。

魔法だけで無く、剣の力もあるとは。このままでは負ける。ヨシ、では・・・）

ワルドはレイピアに魔力を注入、

「ライトニング・クラウド」を発生させサイトに食わせた。

「ぐわーーーーっ！！！！」

サイトは右手にワルドの魔法を喰らい、

吹き飛ばされてしまった。（覚悟はしてた）

「何で魔法を使ってるのですか？確か杖は置いてましたわよね？」

「姫、危険です。護衛、姫を守れ。ワルド殿の様子が変だ。」

「ハッ、姫。私共の影に。」

「残念だよ、私は勝ちたかった。だが剣の力では残念ながら、貴殿には適わぬ様だ。
なら魔法を使うしか無いよな？サイト殿。」

「（ワルドよ。貴様は剣に賭けて誓ったのでは無いのか？この愚劣者。恥を知れ。）」

「ブリミル様、私は勝つためなら己の勝つために全力を尽くす男です。
例え汚い事をしようともね。」

（「そうか。貴様は犬以下だったのだな。この愚劣モノよ。ワシが貴様に出来る最高の褒美をやるう。受け取れ！！」）

「グワーーーーッッッ！！！」

ブリミルが手を上げると、ワルドの頭上に落雷が落ち、ワルドはドサツと言う音で倒れた。

（「（約束を違え、王家の面前で危険行為を働いた罪により、ワルドの魔法をすべて永劫に取り消した。もうコヤツは二度と魔法は発生できぬ。マザリーニよ。ヤツを捕縛せよ。）」

「ハッ、ブリミル様、ありがとうございます。衛士共、彼奴を厳重に捕縛。」

決して逃げたり出来ぬ様に服も牢で剥ぎ取り、身の回りの物を全て取り上げる。油断はするな。」

「ハッ、直ちに罪人、ワルドを捕縛し、命令通りにすべてを剥ぎ取ります。」」

「枢機卿、私も行きます。彼は私の隣の領の人間でした。残念な事になりましたが、万一の危険もあります。」

「ウム、カリーヌよ。頼む。少しでも護衛が欲しい。」

「マザリーニよ。ヤツを捕らえる牢にはワシの偏在も見張らせよう。」

彼奴の仲間が助けに来るかも知れぬしの。」

「ありがたい事です。ブリミル様。では宜しくお願いします。」

「任せよ。サイトの治癒を頼む。水の秘薬程度で治癒出来ると思うがな。」

「お任せください。水メイジよ。サイト ヒラガ殿の治癒を行え。」

こうして、ワルドとサイトの突発的決闘は、ワルドは魔法の力を永劫に失い、捕縛されてしまい、サイトは魔法を喰らって負傷と言う結末となった。

取調べが始まり、ワルドは「レコンキスタ」に組してた事も発覚。

マザリーニは王室の中の貴族、兵士の末端まで調査を開始。そして少なくとも無い人間がレコンキスタに組して居た事が発覚。多くの貴族、兵士が捕らえられたのは後の事であった。

s t g 17 ガンダールヴとアホ姫後編 最終章（後書き）

会議編の最終章。そしてワルドの対決でした。

サイトは剣では勝ち、不意打ちで破れ、ワルドは魔力を消されると言う顛末です。

レコンキスタの発覚は、しばらくしてから発覚したと言う設定です。この時点では、魔法発動の罪だけです。宜しく願います。

マザリーニの発言を修正しました。

A X E L 様、ありがとうございます。

stg18

(閑話)逃げ出す人々(前書き)

閑話的話です。

stg18 (閑話) 逃げ出す人々

stg18 (閑話) 逃げ出す人々

ワルド発狂から数日後の首都、トリステインのある貴族の屋敷にて・。

トリステイン王国の一部の貴族は慌しくなってしまった。

トリステインを裏切る「レコンキスタ」に共に在籍してたワルドが、異国の貴族との決闘で、

王家の面前にて禁止されてた魔法を発動。相手を傷つけてしまい、捕縛。

しかも始祖 ブリミルが降臨してしまったのだ。

不味い、このままでは大変な事になる。

今は「レコンキスタ」の事は発覚していないが、時間の問題だろう。

「閣下、リッシュモン閣下。大変な事になりましたな。」

「ウム。まさかワルドが発狂するとは。ヤツは母の事件で聖地に固執してた。」

それに、ブリミル様が本当に降臨するとは。」

「不味いですね。このままでは、私達の事もいずれは。」

「そうじゃな。ゲルマニアかロマリア、もしくはレコンキスタの本拠地、アルビオンにでも行くか？」

「家財道具を持ち出さず、金貨、宝石のみをすべて持ち、発覚前に国を発ちましょう。」

「それが良いかも知れぬ。手遅れになるのも時間の問題じゃ。」

「御意。」

サイトがワルドとの決闘で倒れた日の夕刻。

サイトはワルドから受けた「ライティング・クラウド」の傷を癒すために、

学園の治療室で水メイジの治療を受けてた。

そこには王室の面々、学園の教師、メイドのシエスタが来てた。

傷は高価な水の秘薬の効果もあり、やがて消えて行きつつあった。

「サイト ヒラガ殿、気は付かれましたか？」

「マザリー二殿、何とか。」

まさか、彼が禁止してた魔法を発動するとは思いませんでした。王家の面前でしたから、余計に驚きましたよ。」

「申し訳無い事態でした。彼奴は捕縛し、水牢に放り込んであります。」

ブリミル様が彼奴の魔力はすべて消し去りましたので、もう大丈夫でしょう。」

「そうでしたか。でも、彼の変貌は変でしたね。」

「何故でしょうか？」

「マザリー二殿。」

すいませんが、病室から会議出来る場に移りたいのです。かなり大切な話なので。」

「了解しました。皆の者、私とサイト殿はしばらく個別で会議を行う。姫、もう夜も遅いのです。」

貴賓室に下がってお休みしてください。」

「はーい。分かりました。」 サイト様、大変でしたね。また会いましょう。」

「アンリエッタ姫、お言葉感謝致します、おやすみなさい。」

「はい。おやすみなさい」

サイトとマザリーニは、機密を保てる会議場へ移動。
護衛を外に置いて、中はサイトとマザリーニのみ。

「サイト殿、何故、彼奴の変貌が変と申したのですか？」

「自分は異国の貴族。彼との面識は一切ありませんでした。
自分は王家に対する遊びのつもりで、決闘に応じたのです。

それがいきなり殺しにかかる様な強烈な魔法を発動。普通ではあり
えません。」

「ムムムム。確かに。面識も無いサイト殿に対する無礼にしても、
おかし過ぎでしたな。」

「ハイ。ですので、ブリミル様に彼の意識に侵入して、彼の心の奥
を調べて頂いて貰っています。
もうしばらくしたら帰って来るでしょう。」

「ブリミル様のご協力があるとは。有難い事です。」

「ブリミル様もこの国に愛着があるのです。自分も愛する人が居ま
す。そのためには、戦う必要もあります。」

「異国の貴族の貴方まで、我が国に協力してくださるとは。私も助

かります。」

「所詮、個人の力は知れたモノです。

私の国の諺に、一本の矢は簡単に折れるが、纏まった矢は簡単には折れぬ、と言う諺です。

私もこの国でしばらくは暮らす身。出来る限り住み良い国にしたいと考えております。」

「素晴らしい諺ですね。我が姫にも覚えて欲しい言葉です。」

「お心の痛み、痛感しますよ。

マザリーニ枢機卿殿。

そうだ、胃の痛みを取る秘薬を所有しています。宜しければ服用して見てください。」

「本当ですか？ サイト殿。水の秘薬も高価なので、この程度の事では中々使えません。

国家の国庫も逼迫しておりますので。」

「普通の庶民、あつ、自分の国の平民が普通に使ってる胃薬と言う、胃のための薬です。

もし必要な時は、自分に言ってください。準備しておきますので。食後、この円形の薬を五粒、水と一緒に飲んで頂ければ利きます。」

サイトがマザリーニに胃薬を渡し、効能などを教えてるとブリミルが出て来た。

（（サイトよ、マザリーニよ。待たせたのう。））

「「ブリミル様、お疲れ様でした。」」

（（ウム、彼奴の脳内に侵入して見た。今はかなり錯乱しておつての、不明な点もまだかなりある。

じゃが、分かった事も多々あるぞ。マザリーニ。この国はかなり不味い事が起きているぞ。））

「どう言う事でしょうか？ブリミル様。」

（（ウム、今、アルビオンにて「レコンキスタ」なる革命の狼煙が上がっているのは承知だろう。

その組織に組してる連中が多数居るらしい。ワルドもその組織の一人じつやた。））

「本当ですか？ブリミル様。」

（（ウム。じゃが時間は少ないかも知れぬ。

彼奴等は今回の騒ぎに乗じて国を発つ可能性も高い。

怪しい連中が居たら、出来る限り即座に捕縛せよ。

政府の高官もかなりレコンキスタに組しておるぞ。））

「そうでしたか。困りましたね。」

「マザリー二殿、一つ提案があるのですが？」

「何でしょう。サイト ヒラガ殿。」

「あっ、ココではサイトで結構です。」

明日、城に帰った際、国家の会計の出納を調べてください。
恐らく多額の使途不明金が出てると思います。」

「ほほう。詳しいみたいですな。」

「自分も祖国で政府に関与していました。悪辣な連中はどこの世にも居ます。」

で、そう言う連中はバレナイ様にこつそりと私服を肥やします。国庫と言う蔵を食いつぶすネズミです。

ですので、使途不明金を調べるポーズだけでも即座に効果出ます。
慌てて逃げようとすると思いますので、

首都や国から立とうとする人間を捕縛してしまうのです。」

「フム、簡単ではありませんが、試す価値はありますね。サイト殿。」

「事は時間との勝負です。本当に信頼のおける貴族、兵士と協議して、捕縛しなければなりません。」

自分も協力してあげたいのですが、この国の民とは違います。です
ので、影で協力する形でいいでしょうか？」

「助かります。何故ここまで協力して頂けるのですか？サイト殿。」

「ブリミル様も仰いましたが、すべての平民が笑って暮らせる世界にしたいからですよ。この世界を。」

「素晴らしい理念です。私も一命を賭けてこの国、そしてハルケギニアを立て直します。」

（そうじゃ。マザリーニよ、サイトよ。世の平民が明るく生きれば、どこの国も自然と発展する。

サイトの国も平民が明るく暮らしてるからこそ、発展を続けているのじゃ。

マザリーニよ。今後は平民を大切にせよ。）

「お恥ずかしい事です。ブリミル様。平民無き国は滅び行く国となるですね。

マザリーニ、心を入れ替え、平民のために努力します。」

（そうじゃ。頑張るのじゃ。）

この会議が終わって数日、トリステインから逃げ出そうとして多くの貴族が、

グラモン元帥、ヴァリエール公爵、王家軍団の手にかかり、大量捕

縛。

持ち出そうとしてた、多額の金、宝石はすべて取り戻された。
だが、まだレコンキスタの影が消えた訳では無い。

stg18 (閑話) 逃げ出す人々(後書き)

リッシュモン捕縛編ですが、本編が進まなくなるので、サイドストーリー的扱いにしました。

s t g 1 9 ガンダールヴと雪風（前書き）

タバサとの朝のひと時です。

stg19 ガンダールヴと雪風

stg19 ガンダールヴと雪風^{タバサ}

マザリーニとの交渉、ワルドとの対決と重大なステージを終えたサイトは、翌日早朝、久しぶりにデルフリンガーを使い、素振りや訓練をした。

「相棒、昨日は大変だったな？」

「デルフ、ヤられるのは覚悟してたからね。

右手は痛かったが、まあ治ったし、ヤツは潰せた。これからが忙しくなりそうだな。」

「おうよ。ン？誰かコツチを影から見てるぜ？」

（ヘッ？。。。アレってタバサじゃん。デルフ、しばらく声出すな。）

（あいよ、相棒。）

サイトの掩錬を影から見てるタバサは、サイトの動きを見てた。

「凄い動き。自分には絶対にムリ。それにブリミル様も彼に付いてる。」

もしかしたら、お母様の病気も治して貰えるかも知れない。」

そこへサイトが練習を止めてタバサに近づいて来た。

「始めましてですね。ミス。自分は異国の貴族、サイト ヒラガと言います。」

練習見ていましたが、自分に用でもありますか？」

「タバサ。どうやったらあんな動きが出来るのか不思議。」

「ミス タバサ。やはり訓練しか無いですよ。
すべては基本の鍛錬の上に立つ。自分も基本の繰り返しでここまで来た。」

「そう。。分かった。所で珍しい飴ある？」

「へ??? 飴???」

「そう、キュルケが貴方に貰って舐めてた飴。」

「あ、ああ。アレね。欲しいの?」

タバサはコクンと首を振る。

「ちょっと待つてね。オツ、あつた、あつた。
じゃ二本手元にあるから上げるよ。」

「ありがとう。」

タバサは早速一本を舐め始めた。

「不思議な味。でも、とても甘味があって美味しい。」

「色んな味があるからね。今はそれだけだけど、また上げるよ。」

「ありがとう。」

タバサはとても喜んでた。初めて舐める飴をくれるいい人。それが異国の貴族、サイト ヒラガ。覚えておこう。

「そろそろ着替えてメシ食べる時間だね。オレは帰るぜ。また会おう。ミス タバサ。」

「ありがとう。また・・・。」

サイトはタバサと別れ、貴賓室へと帰って行った。

（ヤッパ、タバサとの会話は難しいわ。以前のタバサも寡黙だったけど、

全然喋らないもんな。ま、ルイズよりはマシか。）

（おうよ、相棒。あのジャジャ馬との暮らしを思えば、今は天国じゃネーか？）

（ありや人間所か、虫けら以下だったもんな。良く自殺しなかったよ。ホント。）

（まあ、今からの暮らしを楽しめよ。

ブリミルも付いているし、可愛いメイドっ子とも付き合っただろ？）

（う、ウン。そろそろド・オルニエールの事も話さないとな。

学園に置いてたら、もう会えなくなるかも知れない。）

（ハッキリさせりゃいいじゃネーか。惚れてくれると思っぜ。今の相棒ならよ。）

サイトはシエスタに対し、まだ打ち明けてはいなかった。前世でアレだけ好きだった彼女。

今の世界の彼女も同じであるといいのだが。

王家一行が王都に帰る前の朝。
学園長室にて・・・。

オールドオスマンは、マザリーニから苦言を言われ続けて居た。

「オスマン校長、貴方が付いていながら、何で今回の騒ぎが起きたのですか？」

「たかが学校の事で王室を動かすなんてあつてはならない事なのです。」

「ハイ。確かにその通りです。」

「オスマン、あまり言いたくは無かったのですが、貴方にこの学園を任すのは不適格みたいですね。」

「学園に必要なのは、責任を取れる校長です。責任も取れない校長は飾りですよ。」

「・・・・・・・・。」

「飾り物の校長などに高い給与を払い続ける余裕は我が国には無いのです。」

「オマケにこの学校には他国の貴族の子弟も多数居る。」

「その責任者に貴方みたいな無能を入れておく訳には参りません。」

「・・・・・・・・。」

「残念ですが、解雇とさせて戴きます。
なを今までの給与、過去一年分は国庫に返納してください。
期限は明日までとします。」

「待ってください。それでは私は・・・」

「知りません。」

今回の騒ぎ以前にも色んな方から貴方が女性にセクハラをしてると
言う情報も多数あります。

その慰謝料も別途請求させて戴きます。今回の騒ぎが無くても、貴
方の解雇は決まっていたのです。

長い事ご苦勞様でした。

あ、校長室の私物、お金になりそうなモノはロングビルさんが処分
しますので、

そのまま退校してください。」

オールドオスマン、元魔法学園校長の長年のキャリアはこうして消
滅してしまった。

彼はそのまま、ラクドリアン湖に向かい、その後、音沙汰無くなっ
てしまったそうだとか。

s t g 1 9 ガンダールヴと雪風（後書き）

タバサとの朝、そしてオスマンの解雇です。
タバサは難しいですわ。

s t g 2 0 ガンダールヴと魔法学園（前書き）

魔法学園の人事騒動です。
ギトーも解雇されました。

stg20 ガンダールヴと魔法学園

stg20 ガンダールヴと魔法学園

オールドオスマン、それに疾風のギトーの二人が解雇されたニュー
スは朝から学園で大騒ぎになってた。

ギトーについては、以前からやたらと生徒に挑発ばかりする。

未熟な生徒が適う訳も無いのにケンカを売らせる。

苦情が王室にも届いており、オスマンと同時に解雇。

彼はいずこかで傭兵となってるのか？

さて、後釜をどうするかで、マザリーニは苦慮して居た。
すると、いい人物が居るでは無いか！

「ラ・ヴァリエール公爵、カリヌ・デジレ・ド・マイヤール、お
呼び出しに付き参上しました。」

「ヴァリエール公爵、カリヌ、ご苦労様です。さて、お呼びした
のは他でもありません。

この学園の校長、オールドオスマン、そしてギトー両名を解雇しま
した。

色々と理由はありますが、それは置いて置きます。

そこで、ヴァリエール公爵。済みませんが、後任の校長が決まるま

で、臨時で構いません。

この学園の校長として、学園を守って欲しいのです。またカリィヌ、貴女にはギトーの後任として、

コチラム臨時で構いません。風の教師をお願いしたいのです。」

「突然の申し出で驚いているのですが、長い事は無いですよね？」

「ハイ。早急に後任を探しますから、長くても数ヶ月です。その間だけ、お二人にこの学園の全責任をお願いします。」

「了解しました。娘もこの学園に居ます。ただ、身体の弱い病弱なカトレアと言う娘が居ます。

彼女も連れて来ていいのでしょうか？」

「もちろんです。ヴァリエール領の管理の心配もあるでしょうから、形だけの在籍で、普段はカリィヌのみだけで、結構です。」

「了解しました。このラ・ヴァリエール、並びにカリィヌ・デジレ・ド・マイヤール両名、王命が下るまで、

このトリステイン魔法学園の管理をします。」

「宜しく願います。」

ルイズは朝から冷や汗が出てた。

お父様がオスマンの代わりに臨時とは言え、この学園の校長となる。そしてお母様まで……。ギトーの後任で魔法教師。

ちい姉さまは、この学園の外に居城を拵え、そこにお父様、お母様と暮らすらしい。

嬉しいけど、お母様が恐ろしい。

まだギトーの方が楽だたわ。

オスマンとギトーが解雇されたニュースは厨房やメイドにも届いた。そしてあるメイドの元に一通の通知が届いていた。

コンコン。

「メイドのシエスタです。サイト ヒラガ様、失礼します。」

「ウム。入ってください。」

「サイト ヒラガ様、王命により、私、シエスタは
サイト様の管理されるド・オルニエール付きのメイドとして、
赴任する事になりました。今後、宜しく願います。」

「ほ、本当ですか？」

「ハイ。今朝、マザリーニ枢機卿並びにアンリエッタ王女の捺印入
りの

命名書が届きました。よろしく願います。」

シエスタは大喜びである。そこに、さらに。

コンコン。

「サイト ヒラガ様、ロングビルです。」

「ハイ、入ってください。」

「失礼します。わたくし、ロングビルは今朝、魔法学園秘書を退任、
サイト様の管理されるド・オルニエールに赴任する事になりました。」

「へ???貴女も???」

「ハイ。オスマン氏が解雇され、ラ・ヴァリエール公爵が校長になる事で、秘書に次女のカトレア嬢が赴任されます。

その関係で私はサイト様付きの秘書としてド・オルニエール領に赴任が決まりました。」

「そ、そうですが。では、ロングビルさん、シエスタさん。宜しくお願いします。

なをド・オルニエールは私の到着後、ニッポン領と名乗る事になります。

皆さんでニッポン領を発展させましょう。」

「「宜しくお願いします」」

いよいよ、サイトの新領土、ニッポン領が始まります。

s t g 2 0 ガンダールヴと魔法学園（後書き）

ヴァリエール一家が纏めて魔法学園に赴任。
サイトもニッポン領へと引越しします。
次回から領土開設です。

stg21 新領地ニツポン領（前書き）

新領地編開始です。

s t g 2 1 新領地ニッポン領

s t g 2 1 新領地ニッポン領

サイトはマザリーニからド・オルニエールの借用、並びに領名変更の証書を貰うと、マチルダ、シエスタを連れて、馬車にてド・オルニエールへと旅立った。

ド・オルニエール。新領名ニッポンは、首都トリスタニアの西、馬車で一時間程の距離にある。魔法学園から同じくらい。

サイト、マチルダ（既にシエスタには本名を明かしている。）シエスタの三人は、ド・オルニエールにと着いた。

だ。。。

見渡す限りのペンペン草ばかりの大地。
屋敷も枯れ果てている。

サイトはともかく、マチルダは引きつっていた。

「ウム、いい感じです。予想より素晴らしいです。」

「サイト様、ココって・・・。」

「新領地ですよ。ニッポンの。」

「でも、何もありません。」

「当然です。あると面倒なので、無い場所を求めてたのです。」

マチルダにこの地に住む住民をすべて集めて貰い、
新領地名の変更、そしてココがトリステインではあるが、
他国のニッポンと言う国の大使館となる事を説明した。

「・・・領主様、ココはニッポンと言う地名になるのですね?」「
」

「ウム、そうだ。オレはニッポン領の領主、サイト ヒラガだ。
そして、この地には、お前等も良く知る・・・。」

（（ワシが言おう。ニッポンの民よ、ワシはブリミル。
六千年前のハルケギニアの始祖じゃ。））

「・・・ブ、ブリミル様~~~~~!!!!!!」「」

（「ワシはこの地にしばらくは居る。サイトはワシの最後の弟子じゃ。」

お主等の領主じゃが、ハルケギニアで一番の領民となれる幸福をお主等に約束する。」）

「「「「あ、ありがたき幸せです。」「「「「

（「（サイトの指示には良く従うのだ。間違つてたらワシが正す事を約束する。）」

「「「「め、滅相もございません。」「「「「

「えーっ、皆さん。この地には物産とか土地の名物もありません。ですが、オレが色々とニッポンの製品の導入、そして皆様の生活の向上を約束します。しばらくは大変ですが、皆さんと力を合わせてこのニッポンを盛り上げましょう。」

「「「「「ワーーーーーッ!!」「」「」

「また、しばらくは税はナシとします。

理由ですが、この枯れた土地では、皆様の生活が心配です。まずは自分達の生活を豊かにする。そして、国に貢献するといいいです。」

「「「「「ありがとうございます。」」」」」

「では、皆様、自分の仕事に帰ってください。」

「「「「「ヨロシクお願いします。サイト ヒラガ様。」」」」」

土地の民を帰し、サイト、シエスタ、マチルダは今後の事を話し合ってた。

「マチルダ、シエスタ。今回はこんな辺鄙な地に付いて来てくれてありがとう。」

「いいえ、私は主に仕える身です。どんな場所でも気持ちに変りはありません。」

「サイト様、私も当然です。このニッポンが私の最後の勤務地ですよ。」

「二人ともありがとう。さて、今まで二人に言って無かった事がある

ります。

しばらくは黙って聞いて欲しい。

また今から言う事は今後誰にも言わないで欲しい。

二人とそして、心を本当に許せる人だけにしか言わないでください。

」

「・・・・・・・・・・。」

「自分は過去って言うか、違う世界のハルケギニアでも使い魔として、

このトリステインに来た事があります。

その時の御主人もやはり、今回と同じルイズでした。」

「・・・・・・・・・・。」

「自分は奴隷以下の生活を強いられ、魔法学園の外の崩れかけたバラックに押し込まれ、

ルイズがある魔法に目覚めると、戦争の駒として投入されました。

そしてアルビオンで起きた戦いで、七万の敵に突入をルイズに命じられ・・。

死にました。」

「・・・・・・・・・・。」

「その時です。ブリミル様と知り合ったのは。

彼が自分の魂を救ってくれ、そして自分を過去に巻き戻してくれたのです。」

「・・・・・・・・・・。」

「そして、子供時代から鍛錬を続け、またこの土地に召喚されたのです。」

前の世界では、シエスタ、君が好きでした。」

「わ、私ですか？」

「ハイ。乞食以下の生活をしてたにも関わらず、自分に優しくしてくれた少女、それが別世界のシエスタです。この世界のシエスタにも会って、一緒に痛感しました。またアノ世界で佐々木武雄氏の竜の羽衣も譲って貰ったのです。」

「あの竜の羽衣ですか？」

「アレはオレの国の過去の戦闘機と言う、戦いのための道具なんです。」

君のお爺さん、佐々木武雄は、日本帝国のパイロットでした。

何らかの理由でこの世界に迷い込み、帰れなくなり、この地で眠ったのです。」

「そうだったんですか。」

「マチルダさん、オレがティファニアを知っている理由も同じです。」

アルビオンの戦いで死んだオレはティファニアが住む、

ウエストウッドの森の外で倒れていました。

血だるまのオレを介抱し、死んでると分かると、優しく葬ってくれたのです。

あの土地に眠ったオレはティファニアに感謝しました。

前の世界ではマチルダさんは、アレをして、大変な生活になってしまいました。

ティファはその後、かなりの苦勞をしてしまったらしいです。

そんな可愛そうな事はもうしたくありません。

この土地にティファニアも呼び、気楽に暮らして欲しいんです。」

「サイト様。そうだったんですか。」

ティファに貴方の事を聞いても全然、身に覚えが無いと言うので不思議に思っていました。

話を伺ってすべてに合点が行きました。」

「そう言う事です。今まで黙ってて本当に申し訳ありませんでした。」

「「とんでも無いです。言えなくて当然です。」」

「さて、お詫びと言っては何ですが、今日はお二人を私の生まれた国に招待します。」

「国って、ニッポンですか？」

「ハイ。それも異世界。月は一つのまったく違う世界です。自分はブリミルからある特殊な魔法を授けて貰いました。それによって、移転魔法が使える様になったのです。」

「サイト様の国ですね。楽しみです。」

「私も楽しみですよ。ハルケギニアとは違う、月が一つなんて見た事も聞いた事ありません。」

「では、今から向かいますので、自分の手を握って目を瞑ってください。」

「いいですと言っまでは目を瞑るのですよ。」

「・・・分かりました。」

「では行きます。「ワールドア」」

サイト、シエスタ、マチルダの三人は日本へと向かいます。
どうなるかは次回のお楽しみです。

s t g 2 1 新領地ニッポン領（後書き）

ニッポン領地編開始。

ついでにマチルダ、シエスタと日本旅行です。

次回は現代編です。

s t g 2 2 はるばる来たぜ日本 ♪ (前書き)

チート開始です ♪

stg22 はるばる来たぜ日本 ♪

stg22 はるばる来たぜ日本 ♪

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

マチルダとシエスタは固まっていた。

「シエスタ、マチルダ、ここがオレの国、日本だ。言葉が通じないからオレからは離れないで欲しい。」

「サイト様、こんな巨大な建物、そして馬の居ない馬車、轟音を立てて飛び去る巨大な竜。どうなってるのですか？」

「ビックリするのは仕方ないけど。ま、向こうの格好じゃアレだから服でも買いに行こう。」

店員にはオレが説明しておくから、何も言わずに任せてしまえ。」

その後、下着店で、上下を購入。店員がジェスチャーで付け方を必死で教え

、洋服店では綺麗な洋服に二人とも大喜び。

お腹も空いたので、ファミレスに連れて行ったら、こんな高級料理食べた事が無いと二人とも大泣き。

疲れたと思ったので、サイトの自宅ビルに到着。

「父さん、母さん、帰ったよ。」

「サイト、お帰り。おつ、カワイイお嬢さんを二人も連れて来たんだね。」

「コレがオレの両親だ、この二人は向こうの世界の仲間です。父さん、母さん。」

「サイトの親です。って言うても言葉は通じないのよね。」

「頭はいいから、ジェスチャーで教えてやって。色々と。特にフロとトイレは母さん。お願いします。」

「分かっていますよ。名前は何て言うの？」

「若い子はシエスタ。佐々木さんの従兄弟です、もう一人はマチルダさん。オレの秘書して貰っています。」

「サイト、向こうで領地は得られたんだな。」

「うまく行きました。国の中枢にも口を出せましたしね。」

「フツ、計画通りだな。」

「ハイ。で、向こうに転移する兵器ですが、銃器類以外は敗戦直後の日本から持ち出す予定です。」

「そうか。自衛隊の戦闘機ではオーバーキルだしな。敗戦直後ならパイロットもウヨウヨ居るだろ。」

「その通り。復員せずに異界で自分の愛機に乗れると言えば、絶対

に大丈夫ですよ。」

「ウム。さすがに多数の人間をこの世界から連れ出すのは厳しいしな。」

「建築機械とか工場関係は移転させてください。風石が大量にあり、危険一步手前らしいです。」

「それは準備してある。作業員も取り揃えてある。」

「んじゃ、次回帰国した時から転移を開始。兵器関係は整地を終えてからですな。」

「ウン、その通り。お嬢さん達をフロとか案内しないとな。母さん、この方達に色々と教えてくれ。」

「ハイハイ。サイト、彼女達にワタシがフロとかトイレの使い方教えるから着いてらっしゃいと伝えて。」

「ウン。シエスタ、マチルダ。母さんがお風呂とかトイレの使い方を教えてくれるから聞いてくれ。」

日本のトイレとかは、ハルケギニアとは全然違うからね。」

「「分かりました。ご母堂様に従ってバスタイレを習うのですね。」

」

「うん、さすがに女性の事はオレには出来ないから・・・。」

「サイト様でも出来ない事があつたのですな。」

「フ・。主もウブじゃの」

「ウルセー！早くフロトイレに行け。母さん、この二人を頼むよ。」

「まっかせなさい」

マチルダとシエスタが母と一緒に消えてから、父さんと今後の予定を話し合った。

やはり父さん達にはこの世界に留まってもらって、すべてが終わる頃に移転。アチラで暮らす予定とした。

「父さん、じゃ次の帰国の時までは人員とか機械類は纏めててください。」

「ああ、分かっている。」

その後、シエスタとマチルダを街に連れて行き、色んな食べ物食べさせたり、

買い物に連れて行ったり、遊園地などに連れて行き、

ハルケギニアに帰る時は、帰りたく無いと騒ぎ出した。

佐々木さん一家もシエスタに会って、志江子さんとうり二つなのでビックリしてた。

その後、日本とハルケギニアを数度往復し、ニッポンに多数の建築機械を持ち込み、重油プラントなども建築。軽油、ガソリンも産出可能となる。

そして、敗戦直後の日本に出かけ、厚木航空隊、横須賀航空隊、そして中島航空機、三菱航空機をハルケギニアに移転する事が出来た。

特に厚木は、マツカーサーが降りる基地の予定と言ったら大喜びで移転に応じた。

その世界のマツカーサーはヨコスカとアツギ、そしてクレ、サセボの海軍基地が消えてた事にアングリと口を開けてたとか。

トリスティンのニッポン領地は今やハルケギニア最大の軍事科学地帯となった。

そうした頃、マザリーニからある依頼が入ったのだ。

s t g 2 2 はるばる来たぜ日本 ♪ (後書き)

無謀、無茶は承知の設定です。

そろそろアルビオンのレコンキスタが騒ぎ出します。
ようやくですが。

stg23 (閑話) 消えた航空隊 (前書き)

サイトが持つて行ってしまった航空隊に泣かされたオッサンの話です。
閑話です。

stg23 (閑話) 消えた航空隊

stg23 (閑話) 消えた航空隊

私はダグラス・マッカーサー。

日本帝國進駐軍總司令官だ。

憎きジャップを叩き潰し、熊ん蜂の巣だった、アツギに進駐する事になった。

「閣下、そろそろアツギ到着予定です。」

「ウム。いよいよだな。ジャップの顔を拝むのも。」

「そうですね。フィリピンで閣下が追われ、豪州から島づたいに数年。

ようやくゴールです。」

「フツ。私は勝つ男だ。ジッパ如きに追われたのが、珍しかったのだ。」

「閣下、大変です。」

「どうしたのだ？」

「アツギが消えています。」

「ナニ？航法を間違えたのでは無いか？」

「いいえ。確実にアツギ上空です。天測、計器は全て正常です。」

「ウソだろ？」

「事実です。窓から下をご覧ください。」

「ムムムムム。」

「先日撮影したばかりの航空写真と同じ地形です。」

先日まではこの下にアツギエアベースがありました。」

「グググ。」

「ですが、ご覧ください。下にあるのは野原のみ。ファイターもボンバーも全然ありません。」

「仕方ない、ヨコスカに行け。狭くとも基地があるじゃろう。」

「ラジャー。」

所が。」

「閣下、大変です。」

「どうした？また消えてたとか言うのか。」

「それ所ではありません。ナガトも海軍工廠もエアベースも全て消えています。」

「我が軍のアトミックボンバーでも落としたのか？」

「いいえ、綺麗に野原と砂浜になっているのです。」

私は頭を抱えてしまった。どこに降りたらいいのか、パニックになった。

アツギ、ヨコスカは日本進駐の最大目的地だった。

それが全て消えてたのだから。

ようやくトーキョー郊外のエアベース（陸軍基地）に着陸。

日本政府にアツギとヨコスカの事を聞くと、クレ、サセボまで消えてるという。

もはや日本進駐の意味もない。

敗軍の将兵も消えてたと言う。

私はダクラスマッカーサー。日本進駐軍総司令官・・・だろうか？

数年後、マッカーサーは無能司令として更迭。

s t g 2 3

(閑話) 消えた航空隊 (後書き)

サイトに基地を盗まれたマッカーサーの悲劇です。
閑話です。

stg24 ガンダールヴと双丘（前書き）

ようやく更新出来ました。

stg24 ガンダールヴと双丘

stg24 ガンダールヴと双丘 バストレヴオリューション

マチルダとシエスタを連れて日本に行き、帰国して数日。

「マチルダ、そろそろティファニアをニッポンに連れて来ようか？」

「サイト様、是非お願いします。アルビオンもそろそろ危険です。」

「うん。そうだな。では、転移で行くぞ。マチルダ、シエスタ。オレの手を握っててくれ。」

「ハイ。サイト様。」

うん、自分でもチート過ぎとは思いが、大量移転するなら、ワールドドアですよ。

特にティファニアはハーフフェルフ。目立たずに連れて来ないといけません。

「行きます!!」

ブシュン、と言う音と共に転移。ウエストウッズの記憶はあったので迷わず到着。

「も、もつ着いたんですね。」

「早いです。」

「ではマチルダ、ティファニアの家に行くぞ。案内して紹介してくれ。」

「ハイ。サイト様。」

歩く事しばらく。

森の中のちいさな家が見えて来た。

そこには見事な双丘が。バストレヴオリューション

日本でも絶対にいや、世界でも見れない、素晴らしい神が創った作品だ！

思わず見とれてしまった・・・が。

ドスッ！！

「ぐえっ・・・。」

「サイト様、お腹に汚れがついてましたので、被いましたわ。」

バキッ！！

「痛い。」

「サイト様、頭に葉っぱが落ちていましたので被いました。」

「ぢつくしょー。アレに見とれてたのバレてやがる。」

「気を取り直して、マチルダがティファニアを紹介してくれた。」

「テファ、こちらの方が私の主、サイト ヒラガ様です。」

「今度、サイト様の領地、ニッポンにテファや他の孤児を引き取る事になりました。」

「は、始めまして。わたし、ティファニア・ウエストウッドと言います。」

「ヨロシクお願いします。サイト ヒラガ様。」

「「「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ヨロシク」」」

「ウン。ティファニアさん、そしてチビッコ達、始めまして。サイト ヒラガと言います。」

今度、オレの領地、

ニッポンと言う場所で皆と一緒に暮らす事になりました。

慣れない内は大変と思いますが、マチルダさんやシエスタも居ます。
楽しく暮らしましょう。」

「「「「ヨロシクお願いしまーす」」」」

テファに近づき、耳元で・・・。

「ティファニアさん、少しコチラへ来てくれませんか？
いえ、その耳をですね。魔法で形を変えてしまいたいのです。」

「で、出来るんですか？このエルフの耳を。」

「簡単ですよ。自分なら。」

「では是非お願いします。この耳では町も歩けないのです。」

「心配しなくても大丈夫です。例えば君がエルフでも怖がる人は居ません。」

「ただ、一応耳は変えた方が楽になりますよね。」

「ハイ。ですので、お願いします。」

「マチルダ、少し所用を済ませる。アッチを向いててくれ。子供達も。」

「分かりました、子供達、少しだけ向こうを向いてて。」

さすが我が秘書、素晴らしいカンの良さだ。

「じゃティファニアさん、少しだけ目を瞑っててください。」

「ハイ、あ、わたしの事はテファと呼んでください。呼び辛いでしょう?」

「そうですか、ではテファ、自分の事もサイトと呼び捨てで結構です。」

「そうですか?では、サイト様。ヨロシクお願いします。」

「ウン。じゃ行きます……。終了。自分の耳を触ってご覧?」

「え????み、耳が。普通の人間の耳になってる。尖っていない。……ウエーーン。」

「テファ、良かったわね。」

「これで君は普通の人と変わりなくなりました。(その双丘は普通
バストレグオリューション
ではありえませんが。)

ニッポンで仲良く暮らしましょう。」

「お願いします♪」

「マチルダ、ここの家や荷物、すべて魔法で転移させます。
子供達やテファ、シエスタと共に家に入ってください。」

「ハイ。分かりました。テファ、そして子供達、サイト様の魔法で

移動します。

このまま家に入り、絶対に動いたりしないで。」

「『『『分かりました』』』!!』『』『』」

ウンウン、子供は素直で元気が一番。向こうに着いたら飴でも上げよう。

「じゃ、皆。今から魔法でニッポンに送ります。

マチルダ、オレは少し用事済ませてから行くから、皆をニッポンで案内してくれ。」

「分かりました。サイト様。じゃ、お願いします。」

「ウム。行くぞ。ワールドドア!!」

そう唱えると、一瞬でテファの家は目の前からニッポンに転移。周りには何も無くなった。

「うまく行っただな。じゃ。行くか。」

サイトは、そう言うと、フライを詠唱。フワフワとニューカッスルまで飛んで行った。

s t g 2 4 ガンダールヴと双丘（後書き）

バストレヴォリユーシヨン

双丘登場でした。

領地の改革はボチボチと済ませております。

次回はアホ姫の尻拭い編です。

s t g 2 5 ガンダールヴとウエールズ前編（前書き）

アルビオン編です。

第二の山場ですので、かなり長くなりそうです。

今回は前編です。

stg25 ガンダールヴとウエールズ前編

stg25 ガンダールヴとウエールズ前編

サイトはテファ達をニッポン領に転移させると一人、アルビオン国王居住のニューカッスルへと飛び立った。転移では疑われると思い、フワフワとノンビリと飛んで行く事にしたのだ。

「つたく、あのアホ姫の尻拭い頼まれるなんて・・・」

サイトはブツブツ言いながらも、友の願い（マザリーニ）のために一人、ニューカッスルへと行く事になったのだ。

その願いとは・・・数日前の事、マザリーニから至急来城してくださいとの鷹便が来て、トリステイン王国の城へと出かけた。

「御待ちしていました。サイト ヒラガ殿。」

「御無沙汰してました。マザリーニ枢機卿。で、本日はどう言った御用件で？」

「何時もご苦勞をおかけして申し訳無いと思っております。領地改革でお忙しいと思うのですが、

どうしても至急解決しなければならなかった事が出来たのです。

実は……。」

マザリーニの話を聞くと、あのアホ（アンリエッタ）がまたやらかしたらしい。

何でも、アルビオンがレコンキスタに攻められて危機に陥ってるとか。

アンリエッタがペンフレンドのウエールズを助けてくれ。

助けてくれないと自分で行く！と騒ぎ出したのである。

どうしたモンか？と悩んで、自分に何とか出来ないかと依頼して来たのであった。

「分かりました。ただ、無報酬では出来ません。」

「当然です。我が国で出来る事であれば、出来る範囲でお支払します。」

「ウム。では、まず現在の領地を当方に完全に譲って貰いたい。次に周囲の山や僻地など未開発の土地も譲って欲しい。」

この二つを確約して頂けるなら、アルビオンの危機は解決致します。」

「本当に可能なのですか？」

「オレはブリミルの弟子。そして秘法も伝授されています。さすがに死人を呼び戻す事は出来ませんが、

大概の事は何とか。ただし、自分に利益の無い事、そして平民に害する事はやりません。」

「当然です。では、依頼を引き受けて頂けますか？」

「ハイ、報酬は任務完了後、

そしてアルビオン国王に対する紹介状を準備して頂きたい。

さすがにいきなり異国の人間を国王に謁見させよ！なんて無謀です。トリステインの国賓として謁見出来る内容でお願いします。」

「当然です。すぐに準備致します。また旅費としてのエキューも準備しますが。」

「あつ、エキューは結構です。国庫も相変わらず厳しいでしょう。自費で行きます。」

十日程度の時間は頂きたい。コチラも段取りがありますので。」

「結構です。では、紹介状並びにトリスティンからの国賓と言つ証
明書を準備します。」

宜しく願ひします。サイト ヒラガ殿。」

「お引き受けしました。マザリーニ枢機卿。」

こう言った按配で、今回の旅は始まったのだ。

幸いにもニューカッスルはまだ健在らしい・・・が。

かなりの被害が出て、落城は時間の問題と周囲の街のウワサになっていた。

「不味いな。ノンビリはしてられないぞ。国王に謁見して、そしてアレを持って来るか・・・。」

サイトはニューカッスルに着くと、

衛兵にトリステイン王国からの来賓であり、国王に謁見させて欲しいと頼んだ。

国王の許可も出て、サイトは国王、ジェームス一世の玉座の前へと立っていた。

「そなたがトリステインからの来賓、サイト ヒラガ殿ですか？」

「ハイ。トリステイン王国の領内、ニッポン領の領主をしております、サイト ヒラガです。」

本日は大変な中の謁見を許可して頂き、感謝しております。」

「ウム。我が国も何時まで持つか分からぬ状態じゃ。」

ウェールズも色々と飛び交っており、今は留守じゃが。」

「失礼ですが、ジェームス一世国王、何時までこの城は持つと思い

ですか？」

「ウム。精々数日じやろ。既に備蓄も尽きかけておる。弾薬も無く、兵士も僅か。この国も終わりかの？」

「悲観される気持ちは分かりますが、諦めてはなりません。」

マザリーニ枢機卿、

そしてアンリエッタ王女が私をこの城に寄越したのは、ただの道楽ではありません。」

「ウム、どう言った用件か？」

「ハイ。では、一人ココにある方をお呼びして宜しいでしょうか？」

「ある人？ソチの他には誰も居ないでは無いか。」

「いいえ。既に来ております。ただ、姿を現していないだけです。」

「ムムムム。分かった。どうせ先の無い国。構わぬ。この場に来て貰いたい。」

「御意です。では・・・。」

（（アルビオン国王、ジェームス一世よ。ワシはこのハルケギニアの始祖、ブリミルじゃ。））

「ブ、ブリミル様ですか？
噂ではトリステインに來訪されたと聞いていましたが、まさかこの
場に來られるとは。」

「ウム。そのサイトはワシの最後の弟子じゃ。色々と秘法も伝授
しておる。ジエームスよ。」

お前は、この城を枕に世を去りたいか？それともこのアルビオンを再
び再起させたいか？どっちじゃ。（）

「それはモチロン、この国を再起させたいと思います。ですが、現
状では・・・。」

（ウム。気持ち分かる。このままでは滅び行く事もな。
だからワシとサイトはこの國に來たのじゃ。

ワシの子孫たるお前達を救うためにの。
ジエームスよ。サイトに頼め。そして國を再起させるのじゃ。
じゃが、一つだけ苦言を申しておくぞ。）

「な、何でしょうか？ブリミル様。」

（ウム。お前は弟のモード大公並びに家と親族を追放、処刑した
な？
妻にエルフを娶ったと言う事で。）

「は、ハイ。確かにモードを処刑してしまいました。
他の貴族からの追求もあり、エルフ妻の追放命令も拒否してたため
です。」

（何故、エルフの妻を娶ったからと親族を処理出来たのじゃ？

親族は何よりも大切な宝じゃろ。

聞くぞ、ジェームス。

お前の息子、ウエールズがもし平民を娶ったらお前は処刑するのかわどつじゃ。）」

「まさか。平民を娶る訳がありません。

それに我が息子を処刑するなんて……。アッ。」

（（気づいたか。お前がモード大公を処刑したのも同じ事。愚かなヤツじゃ））

「今頃になって気づくとは。確かに私は愚かでした。」

（（ウム、気づけただけでもヨシとするか。

時間は帰らぬ。そして逝ってしまった人は再び現世には現れぬ。

後悔はして当然じゃが、オヌシはこの国の国王。簡単には世を去れぬじゃろ？））

「ごもつともです……。」

（（ジェームスよ、ワシとサイトでこの国の苦境を救って見せよう。そして国の平定が保てたら、今後、二度とモード大公みたいな犠牲者を出してはならぬ。

また、国の礎たる、祖国に暮らす平民に優しい国王となるのじゃ。

平民こそ、国の礎。

今回の内乱もオヌシの無能が原因と思え。

弟を処刑した国王を貴族が見限り、反乱したのがそもその原因と思う。

それだけでは無いかも知れぬが、根本の一つなのは間違い無いじゃろ。）」

「ブリミル様、仰るとおりです。

私が愚かでした。今回の内乱が終わりましたら、自分は王位を退位。ウエールズに王を譲ります。」

（「まだ早い。その考えは。

息子はまだ若いじゃろう？なら、オヌシの経験をすべて伝授しろ。

息子を徹底的に王として鍛え、大丈夫と思ってから退位すべきじゃ。

）

ジェームスとブリミル、サイトが話し合いをしてた所・・。

「国王陛下、ウエールズ様がお戻りです。」

「ウム、通せ。それも大至急だ。」

「ハッ、すぐに！」

しばらくするとウエールズが到着した。

「父上、ウエールズ・デューダー、ただいま戻りました。」

「ウム、ご苦労じつやた。ウエールズ。今日はトリスティンから来客がある。

そして我がハルケギニアの始祖、ブリミル様も来られている。」

「ブ、ブリミル様ですと。」

（「ウエールズよ、ワシがブリミルじゃ。」

今日は、この国を救うため、ワシの弟子、サイト ヒラガとこの国を訪れた。

そちもこの苦しい国を何とかしたいであろう???)

「は、始めまして。挨拶が遅れて申し訳ありません。

アルビオン王国 皇太子ウエールズ・デューダーです。ブリミル様、宜しく願います。」

(ウム、ワシがハルケギニアの始祖ブリミルじゃ。

ここに居るのはワシの弟子、サイト ヒラガじゃ。

先程までジェームズとも話しておったが、この国を救うため、ワシ等はこの国に来た。

ウエールズよ。ワシ等の考えを聞く気はあるか?)

「モチロンです。このままでは亡国なのは確実。選べる余地など残っておりません。

私も国庫逼迫のため、戦費調達も兼ねて空賊の真似事までしている始末です。

もしお助けして頂けるなら、何でも努力致します。」

(ウム、良い考えじゃ。では、サイト。後は任すぞ。)

「御意です。ブリミル様。」

(ウエールズよ、ジェームズよ。後はサイトに任す。サイトを信じて、戦え。ワシは帰るぞ。)

「お疲れ様でした。ブリミル様。また会える時まで。」

(ウム。ではサラバじゃ。)

ブリミルが姿を消すと、サイト、ウエールズ、ジェームズは謁見の間から会議室へと移動した。

そして・・・。

stg25 ガンダールヴとウェールズ前編（後書き）

ウェールズ、ジエームズ、サイト、ブリミルの会見でした。
次回はチート開始です。

かなり無茶設定ですが、石は投げないでください。（T―T）

誤字修正しました。空蝉様、指摘ありがとうございました。

s t g 2 6 ガンダールヴとウエー ルズ 中編（前書き）

ムチャチート発動です。

stg26 ガンダールヴとウェールズ 中編

stg26 ガンダールヴとウェールズ 中編

サイト、ウェールズ、ジェームズの会見が終わるとサイトは、
ウェールズと紅茶を飲みながら談話してた。

「貴方がアンが言ってたイーデルヴァイのサイト殿でしたか。」

「アンリエッタ王女がどう言われてたかは気になりますが、オレが
サイト ヒラガです。」

ウェールズ殿、宜しく。」

「いいえ、ウェールズと呼び捨てで結構です。サイト殿。」

「なら、オレもサイトでいいよ。ウェールズ。」

「「ヨロシク。」」

「ウェールズ、国王との会見でも話したが、この戦争が終わったら、
分かってるだろ？」

「モチロンだ。この国は平民に優しい国にする。そしてエルフとか
蛮族とか人種での差別は無くす。」

「うん。それでいい。国が衰退するのは平民が活力を無くす事から
始まる。」

オレの国でも、平民が活力を無くしたら、国が衰退した時代が何回

もある。

国の力の根源は貴族では無い。平民の生活だ。」

「分かったよ。サイト。所で本当にそんな凄い城が来るのか？」

「ああ、多分びつくりするぞ。本当は海に浮かぶ城なんだが、今回は置き城となつて貰う。

普通なら絶対に落せない巨大な城だ。戦いが終わったら、お前達の居城にしてもいいぞ。ただ、技術士官が居る。彼等を絶対に怒らせるな。」

「モチロンだよ。機器を扱う士官は貴族以上に優遇する。決して無碍な事はしない。

このウエールズが確約する。」

「そうか。おつ、そろそろ復活したな。ウエールズ、城の前に出す。ビックリするなよ。」

「ナニが出て来るか楽しみだな。サイト。」

サイトとウエールズ、ジエームズが連れだって城のテラスに出て来ると、サイトはある詠唱を始めた。

「父上、何が出て来るのでしょうか？」

「分からぬ。だが、我々の味方なのは確実だろう。」

やがて詠唱が終わると、巨大な光が輝き、城の前に鉄で出来た巨大な船が鎮座してた。

「こ、コレは・・・・・・・・・・。」

「ジェームズ国王、ウエールズ。コレがオレからの君たちへのプレゼント。」

戦艦プリンス・オブ・ウエールズだ！」

そこには何て言う事でしょう。

巨大な戦艦が綺麗な輝きを持って

（後で城にする事も考えて、サイトがメッキ加工を異世界で行った。）

ニューカッスルの前に鎮座してたのです。

サイトは地球世界の南シナ海に眠ってたプリンス・オブ・ウエールズを拾い上げ、

復活魔法で復活。

ニューカッスルの前に据えてしまったのだ。

「プ、プリンス・オブ・ウエールズって僕の名前と同じじゃ無いか。」

「オレの住む世界に存在してたイギリスと言う国の戦艦だ。」

全長 227・1m 225・6m

全幅 34・3m

吃水 10・8m

乗員 1,521名

兵装 35・6cm 4連装砲塔2基、連装砲塔1基

13・3cm 連装両用砲8基

40mm 8連装ポムポム砲

の兵装を誇る。

この世界なら無敵に近いだろう。

船体はすべて巨大な装甲で覆われている。マメ鉄砲程度ではかすり傷も付かない。

しかも海に浮かんでいないから、まさに無敵だ。

どうだ、ウエールズ、ジェームズ国王。」

「す、素晴らしい。美しい船だ。」

「父上、凄いですね。しかも兵装が凄い。」

「火竜が襲い掛かって来ても対空砲が巡らされてる。簡単に打ち落とせる。」

射程距離も三万メートルはあるから、十分だろう。なをこの艦の技術者はすべて乗艦している。

後はシェームズ国王、そしてウエールズが指揮を下すだけだ。」

「あ、ありがたいです。サイト ヒラガ殿、いやサイト様。このジェームズ、生涯の感激です。」

「オレは周囲を警戒して居る。ウエールズ、ジェームズ。戦艦に乗艦して技術士官の指示に従い、ブリッジで観戦せよ。」

「「御意。」」

サイトは南シナ海に眠ってた戦艦プリンス・オブ・ウエールズを持って来てしまったのだ。

さすがに死人は海底に眠ったままにしてもらったが。

その光景を見てたレコンキスタのクロムウエルは狼狽してた。

「な、何だ。アレは。あんな巨大な城は見た事が無いぞ。それにあの砲。
どうするべきか？」

s t g 2 6 ガンダールヴとウエー ルズ 中編（後書き）

スクラップ活用のムチャチートです。

石は投げないで・・・。（T―T）

s t g 27 (閑話) オリヴァー・クロムウエル(前書き)

クロムウエルの独り言です。
閑話です。

stg27 (閑話) オリヴァー・クロムウエル

stg27 (閑話) オリヴァー・クロムウエル

私はレコンキスタ総司令官、オリヴァー・クロムウエルだ。

元は一介の司教に過ぎなかったが、貴族議会の役票により、総司令官となった。

表向きは。

しかし実態は、シェフィールドと名乗るあるメイジからアンドバリの指輪と言う、

人の生死すら操れる指輪の力で、この地位に就いたに過ぎない。

虚無の力と称してるが実態は指輪の秘法にて秘法を操ってるのみ。

最近、シェフィールドからの命令も来なくなったので、自分の思う通りに世界を構築しよう。

そう思い、斃れた兵士は指輪に力で蘇らせ、敵の指揮官は秘法の魔力で操り、

もう少してアルビオンを陥落させられる所まで来てた。

城の兵士も少なくなっただと思うし、敵を倒したら指輪の秘法で傀儡にも出来るのだ。

まさに最強の秘法だろ。

そうして、あと一步と来てた時に、あの巨大な城が出て来たのだ。

アレはハンパでは無い。

巨大な鉄の塊に巨大な主砲。

そして周囲を警戒してる多数の銃器。

火竜が偵察に行ったら、一撃で粉砕されてしまった。
普通では無い。

どうやったら落せるのだ？

城の塀も直角に近いので簡単には登れない。

困った。

こう言う時にシェフィールドが来てくれると色んな助言してくれる
のだが。

自分は戦略家では無いので、さすがに巨大な初めて見る城など、ど
うやって攻めればいいのか分からない。

本当に困った。

私はクロムウエルだ。

s t g 2 7 (閑話) オリヴァー・クロムウエル(後書き)

今回は閑話。

次回で解決編です。

s t g 2 8 ガンダールヴとウエールズ 後編（前書き）

アルビオン戦最終話です。

stg28 ガンダールヴとウェールズ 後編

stg28 ガンダールヴとウェールズ 後編

ウェールズ、ジェームズはサイトと別れると、士官の案内で艦橋に
上って来た。^{ブリッジ}

「中々見晴らしが良いでは無いか。」

「ハッ、王様。普通は海に浮かぶ船ですが、
本艦は地上に据えつけられたため、普通より舷側が高くなっています。
城壁の役目も果たしますので、効果はさらに高くなってるでしょう。
燃料は風石を使いますので、時折補充をお願いします。」

「ウム、了承した。固定化は架けておるのか？」

「まだですが、現在でも相当な防御力があります。戦後、ゆっくり
と固定化をお願いします。」

「了承した。そろそろ敵が迫って来たが、大丈夫か？」

「ハハハッ。あの程度の敵など本艦の敵ではありません。
かなりの音がしますので、この綿で耳栓をしてください。
これより戦闘開始します。」

「ウム。それでは、戦闘開始！！」

ジェームズの号令と共に艦橋^{ブリッジ}は戦場となった。

側距儀を覗く砲術長が一斉射撃を開始したのだ。
巨砲からは巨大な光と煙、そして轟音が轟く。

ジェームズもウエルズも敵に同情してしまった。
この砲撃を浴びる敵は欠片も残るまいと……。

自分はレコンキスタの兵士だ。

もう少しでアルビオンのニューカッスルを落城させる所まで来てた。
あの城には多大な宝もあるだろう。

分け前をタンマリと貰ったら国に帰り、遊んで暮らそう。
もう少しなんだ。が……。

アレは何だ??

昨日までは無かった巨大な城が金ぴかに輝いて鎮座してた。
そしてその城に据えられてる巨大な砲が……。

俺達の方を向いてる??

逃げる。今なら助かるかも知れない。

そう脳で思ってたなら、砲が光った。音は聞こえない。まだ大丈夫だ・

・・・。

そこで俺の人生は終わったらしい。
俺の居た持ち場は巨大な穴になってたのだからな。

光る、そして巨大な爆煙が上がる。その後に「バコーン、バコーン」
発射音が聞こえるのだ。

凄い速度で飛ぶ砲弾では我々は成す術も無い。

「た、退却、退却。このままでは壊滅だ！！銃器は捨てても良い、
とにかく逃げろ！！」

前線の指揮官は慌てて退却を指示してる。

「に、逃げるな。もう少しなんだぞ。敵を倒せ！！」

クロムウエルは焦ってた。もう少しなんだ。あの城が落ちるのは。
あの巨大な砲を持つ城さえ現れなければ。
勝つのは我々なんだ。

クロムウエルの発破にも関わらず、前線は完全に崩壊。

兵士は我先にと逃げ出してた。

アンドバリの指輪で作り上げた死体兵士だけは前進を続けていたが、
砲撃が命中した後は・・・。

欠片も残っていなかった。

精神を乗っ取ったメイジも砲撃のショックで秘法が溶けてしまい、パニックになってる。

もうどうしようも無い。

「逃げる・・・か・・・」

（どこへ逃げる気じゃ？）

「フツ？お、お前は何者だ！！」

（知る必要は無い。それよりもお前が水の精霊から奪ったアンドバリの指輪を返して貰おうか。

それは人間が持って良いモノでは無い。）

「い、イヤだ。コレがあつたら私はまた再起出来るんだ。」

（ならぬ。サイトよ。ヤツから奪い取れ。）

「ハッ！」

何時の間にか、私の背後に黒い髪をした見知らぬ男が私を羽交い絞めしてた。

何とか逃れようとしたが、彼奴の力は強く、私の指に嵌っていたアンドバリの指輪は奪われた。

・・・もう終わりだ・・・指輪も無くなった私には何の力も権力も残っていない。

僅かに残ってた死体兵士はただの死体に返り、精神を奪ってたメイジは正気に戻りパニックになる。
そして私の最後は来たらしい。。

何か巨大な光が私の頭上に来てた。すべてを受け入れるしか無いだろう。。。

どーーーーーん。

こうしてアルビオンを騒がせたレコンキスタの総司令官、オリヴァ

「I・クロムウエルは消えた。
レコンキスタは完全に壊滅。
残ってた兵士は投降。

指揮官は発狂してるのが殆どだった。

「終わってたな。」

「終わりましたね。父上。」

「ジェームズ一世、ウエールズ。敵は片付いたみたいですね。」

「サイト様ですが。今回は本当にありがとうございました。」

（ジェームズよ、ウエールズよ。敵の指揮官は粉々となってしまった。）

敵はオリヴァー・クロムウエル。

彼奴はトリステインのラグトリアン湖の水の精霊の秘宝。

アンドバリの指輪を使い、死体を操り、メイジの精神を奪い、味方
にしてたのだ。

彼奴は虚無では無かった。

戦後処理のためにも、彼奴の罪状はロマリアにも世界にも叩きつける。

そしてワシはもうロマリアには味方せぬと言え。

ロマリアの怠慢が今回の騒ぎの根源にもあるのだ。）」

「御意です。戦後処理が終わり次第、ロマリアにも今回の報告を叩きつけましょう。」

（「ウム。国が疲弊してるから大変であろうが、民を大切に国を復興させるのだ。」）

「御意です。」

（「ウム。では、そろそろワシは退散とするか。サイトよ。お前はどこうする？」）

「自分もそろそろ帰りますが・・・。」

「待ち給え。サイト殿。この度の勝利は君が居たから適ったのだ。何のお礼もせずには帰したのでは、我々が正気かと疑われる。何か望みは無いのか？」

「今の所は何も・・・。また機会ある時でいいですよ。オレはトリステインのニッポン領に住んでおります。」

戦後処理が落ち着いたら遊びに来てください。特にウェールズ、歓迎するよ。」

「そうですか・・・。そうだ。あの戦艦の砲弾の補充はどうしたらいいのでしょうか？」

「砲弾は私の領で製造します。補充したい場合は私の領から輸出しますので、連絡してください。」

「分かりました。では、その際にでも。」

（（また会おうぞ。ウェールズ、ジェームス。））

「「ありがとうございます。ブリミル様、サイト様。」」

こうしてアルビオンを騒がしてたレコンキスタは壊滅。

オリヴァークロムウエルは虚無と偽り、水の精霊の秘宝、アンドバリの指輪を奪い、死人を操ってた罪人として、ハルケギニア全土に通報。

レコンキスタの残党は散逸。

完全にレコンキスタはハルケギニアから消え去ってしまった。

ロマリアもブリミルがアルビオンにも現れたと言われ、

さらに僧侶だったクロムウエルが犯罪人として死後公開されてしまった事で権威がガタ落ち。

信者も逃げ出すばかりで、お布施も入らなくなり、一部の僧侶は農夫へと転身する始末。

どうしたら良いのだろう・・・。

stg28 ガンダールヴとウエールズ 後編（後書き）

クロムウエルが消え、アンドバリの指輪を取り戻しました。

s t g 2 9 ガンダールヴと水の精霊 前編（前書き）

水の精霊編開始です。

stg29 ガンダールヴと水の精霊 前編

stg29 ガンダールヴと水の精霊 前編

サイトはアルビオンから帰ると、王城に居た。

「マザリーニ枢機卿、アンリエッタ王女。只今帰りました。」

「おお、サイト殿。ご苦労様でした。所で首尾の方は？」

「敵のオリヴァー・クロムウエルは戦死、レコンキスタ勢力は完全に壊滅させました。」

「ほ、本当ですか？あの巨大なレコンキスタが壊滅するとは。

普通なら信じられませんが、ブリミル様の弟子たるサイト殿なら、当然かと・・・。

して、どう言う戦力を投入されたのですか？」

「ハイ。既にご存知だったと思いますが、ニューカッスルには僅かな兵士と備蓄しかありませんでした。

あのままでは、数日で壊滅してたのはアルビオン軍だったのは確実です。」

「ウム、そうでしたな。私も色々な情報を聞いて、とても持たないだろう。

そう思ったので、サイト殿にお願いしたのです。」

「そこで、オレはブリミル様と相談し、秘法を展開。

我が世界の戦艦プリンス・オブ・ウエールズと言う船を復元、ニュ

「カッスル前に設置したのです。」

その巨砲の威力は凄まじく、瞬く間にレコンキスタ軍を殲滅。クロムウエルも戦死させた按配です。」

「す、凄い事をされたのですね。いや、驚きました。」

「サイト様」ではウエールズ様は？」

「もちろんお元気で、祖国復興に頑張っておられます。ご安心を。アンリエッタ王女様。」

「まあ、嬉しい」所でアルビオンに設置した戦艦ってウエールズ様と同じ名前なのですか？」

「ハイ。私の世界のイングランドと言う国で作られた巨大戦艦です。過剰と思う戦力でしたが、あの程度は投入しないと、レコンキスタを殲滅させるのは不可能だったでしょう。」

「凄い事をされたのですね」所で私達の国にも同じ様な船とか頂けません？」

「お、同じ様な船ですか？簡単ではありませんが、時間さえあれば、何とか。その件については後ほど、マザリー二殿と討議し、いずれは何とかしてあげましょう。」

「まっ」嬉しいですね」マザリー二枢機卿。出来る限りサイト様に褒美を出してください。」

サイト様、本当にありがとうございます。私は部屋にてウエールズ様に手紙を書いて来ます」

「アンリエッタ王女様、頑張ってください。」

「ありがとうネ♪私達の勇者イーヴァルデイのサイト様♪じゃまたね♪」

「ハッ、ではまた。」

アンリエッタはルンルン♪と言う感じでスキップしながら退室。マザリーニとサイトは二人で溜息をつく。

「サイト殿、お疲れでした。本当にアルビオンを救って頂き、感謝の念もございません。」

「いえ、オレもこの国で暮らす身。我が身に迫ってた恐怖の根を取り払ったに過ぎませんよ。放置してたら、レコンキスタはアルビオンの次にこの国に襲い掛かってたと思います。」

「そうですね。彼奴等の勢力があのまま拡大してたら、いずれは全ハルケギニアが巻き込まれていたでしょう。」

そう言えばクロムウエルが虚無では無かったと聞いておりますが。どう言った秘術で死人を操っていたのですか？」

「この国のラグドリアン湖の水の精霊の持つ「アンドバリの指輪」と言う秘宝を奪ってたのです。」

クロムウエルは。

その指輪の魔力を使って死人を蘇らせ、他人の意識を奪い誘導してたのです。

指輪はオレとブリミル様で彼奴から取り戻しましたのでご安心を。」

「おお、そうだったのですか……。オッ、それでラグドリアン湖は増水してたのですね。」

水の精霊の怒りで……。」

「増水してたのですか？」

「ハイ。それも凄い勢いで、周囲の村もかなり水没してしまいました。」

恐らくゲルマニア、ガリアも被害が出てるでしょう。」

「うーむ、では早急に指輪を精霊に返納した方がいいですね。」

でも、この国の水の精霊との交渉はこの貴族が担当されてたのですか？」

その方と一緒に返納すると、トリステインの利益にも適うと思いますが。」

「水の精霊との交渉はド・モンモランシ家はトリステイン王家と水の精霊との盟約の交渉役を何代も務めて来ましたが、水の精霊を怒らせてしまい、領地の経営も逼迫してるとの事です。」

「ド・モンモランシ家ですか……。そう言えば魔法学園の女子生徒にもモンモランシと言う子が居ましたが。」

「彼女はモンモランシ家の娘です。」

「水の精霊を怒らせたのは？」

「ド・モンモランシ伯爵です。何でも水の精霊様が出現した時に「歩くな、水で濡れる。」と暴言を吐いたとか……。」

「そ、それはまた……。それでは伯爵では水の精霊の怒りは消えないでしょうね。」

それにこのままではモンモランシ家は……。」

「没落するのは確実でしょう。噂ではモンモランシ嬢は生活費を稼ぐために、香水などを調査し、生徒に販売。それで何とか繋いでいるとか。」

「涙ぐましいですね。では、そのモンモランシ嬢を交渉約に据えたらいかがでしょう?」

「そうお願い出来れば。さすがに古い家が没落してしまうのは、我が国としても損ですし。」

「了承しました。では後ほど学園に赴き、モンモランシ嬢に説明。ラグドリアン湖に行つて参ります。」

「お願い出来ますか。」

「もちろんです。特にアンドバリの指輪は他人には任せられない危険な秘宝です。」

こればかりは自分で精霊にお返しします。」

「宜しくお願いします。それと姫がお願いしてた件ですが……。」

「それについてですが、枢機卿。この街を区画整理し直す気はありませんか?」

「区画整理ですか?」

「ハイ。トリスティンの街は狭く、汚いと言う評判です。首都ですが、これでは・・・」

で、オレに任せて頂ければ、この街を再整理出来ます。

街の住人には、一時退去して貰って、再整理できてから、人居る形です。

特に道幅は狭い、糞尿はそこらに落ちてては・・・」

「見苦しいですよ。注意はしてたのですが。」

「ま、いずれ何とかします。その際に、お約束の事を適えましょうと姫にお伝えしてください。」

さすがに今の状態では・・・」

「分かりました。では、いずれ。」

「了承しました。オレは学園に赴き、モンモランシ嬢に面会し、ラグドリアン湖に出かけて参ります。」

「宜しく願います。それと、コレはニッポン領地の割譲書類、並びに周囲の山麓、原野の譲渡書類です。」

コレで彼の地はニッポン領地と完全になりました。税金の方も志程度頂ければ、我が国としては文句ありません。」

「ありがたく頂戴します。お互いの利益に適えば国も発展するでしょう。」

それと平民の子息に字とか教えてください。彼等が字とか数字を覚えれば、庶民の暮らしも確実に豊かになります。」

「努力します。学問の方は、平民や引退した騎士などに教師を頼んで見ます。当初は寺子屋みたいなモノとなりますが。」

「それで結構です。何事も地道な努力の積み重ねですよ。」

「ごもつともです。では、そろそろ。」

「ハイ。失礼します。」

サイトはマザリーニと歓談を終えると、魔法学園へと転移した。

「さすがに疲れたな……。もう一息だ。 オツ、ギーシュだ。お
ーい、ギーシュ。」

「おお、これは師匠。お久しぶりです。お元気でしたか？」

「ウム、今日は学園に所用が出来て来たのだ。隣のお嬢さんは彼女
か？」

「は、ハイ。僕のモンモランシです。」

「マツ？ギーシュったら。始めまして。サイト ヒラガ様ですね。」

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシと申します。」

「貴女がモンモランシ嬢でしたか。いや実は貴女に逢いに来たのです。」

「私にですか？」

「ハイ。確か貴女の実家は水の精霊との盟約の交渉役でしたよね。」

「は、ハイ。ですが・・・。」

「マザリーニ枢機卿から詳しく聞いておりますので、話さなくても結構です。」

今日はその精霊との盟約の交渉役を貴女にお願いするために来たのです。」

「と、言いますと？」

「少し内密な話をしますので、ココでは言えません。ギーシュ、彼女をお借りしても良いか？」

「当然です。師匠。何か大切な話があるのでしょうか。モンモランシ、僕はひとまず退散するよ。また会おう。」

「ギーシュ、またね♪ サイト様、では、学園の会議室でも・・・。」

「ウム。案内をお願いします。」

サイトとモンモランシは会議室に移動。そこで詳しくを説明。
彼女も再び水の精霊との盟約の交渉役が我が家に出来る様になれる
のならば、是非とお願いして来た。
さすがに男女二人だけの移動はアレなので、ギーシュ、監視とし
てコルベールが同行する事となった。

s t g 2 9 ガンダールヴと水の精霊 前編（後書き）

今回は序章です。

次回は水の精霊との交渉。

自分はアノ精霊の口調、大好きなんです。
やはり欠かせませんよね。

s t g 3 0 ガンダールヴと水の精霊 後編（前書き）

水の精霊後編です。

stg30 ガンダールヴと水の精霊 後編

stg30 ガンダールヴと水の精霊 後編

サイトはモンモランシー、ギーシュ、

そして教師のコルベールを連れてラグドリアン湖に向かった。

当初、馬車で向かうと言ってたので、サイトは自分の領から四輪駆動のパ。エロを転移。

馬の居ない馬車が現れた事で、ギーシュ、モンモランシー、コルベールはパニック。

特にコルベールはサイトにこの馬車はどうやって動くのか？どうして走るのか？と質問攻め。

ボンネットを開けてエンジン見せたり、計器の説明したりして、フンフンと鼻息も荒く興奮。

ようやく落ち着いてから、サイトが運転して、ラグドリアン湖に到着したのは夕方遅くなった頃。

「もう暗いですね。」

「そうですね。我々は外にキャンプを張ります。

食事が終わったら、モンモランシー嬢はこの車のシートを倒し、ロックスを架けて寝てください。

車内に入るのは不可能ですので、安心して眠ってくださいね。」

「あ、ありがとうございます。サイト様。」

こっそりとギーシュに耳打ち。

「ギーシュ、絶対に覗くなよ。覗いたら湖に放り込むからな。」

「ボ、ボクがそんなレディに失礼な事を考える訳が無いだろう?。」

目が空を泳いでる。覗く気マンマンだな。

寝る時はコイツは縛って寝かそう。

サイトが車に積んでた缶詰を開けて皆にご馳走すると、全員大喜び。さすがに地球の料理は缶詰でも味が良く好評だった。

そうしてもう寝ようか?としてたら、湖の湖岸に人影が現れた。人数は二人、男か女かは分からない。

しかしその二人組みは水辺に立つと杖を掲げ、呪文を唱えだした。何をしているかと思つてたら、水面から何かが立ち上がって来て、その二人は何かに攻撃呪文を始めた。

「サ、サイト様、あの水面の何かは水の精霊様です。」

「間違い無いだろう。さすがにヤラれる訳には行かない。オレが行って攻撃を止めさせて来る。」

ギーシュ、お前は訓練の一環だ。オレを援護しろ。

コルベール先生はモンモランシーを守っててください。」

「分かりました。サイト殿。モンモランシー嬢は命に賭けても守ります。」

ギーシュ君、サイト殿の援護を頼みますぞ。」

「お任せください。師匠の援護、このギーシュ、必ず達成致します。」

期待はしていないけど、少しは経験積ませないとね……。とサイトは考えてた。

「ヨシ、行くぞ。　その二人、何をしてる？」

すると二人の内、一人はコチラに炎の攻撃をして来た。

ギーシュが「危ない！！」と声を出したが。サイトの前で霧散。

サイトは二人にある呪文を唱え、攻撃すると、二人は気絶し、岸辺に落ちていた。

「ふーっ、何とか殺さずに済んだな。

ギーシュ、ヤツラを捕縛しに行くぞ。着いて来い。
仲間が居るかも知れないから、警戒は解くな。」

「ハイ。師匠。」

倒れてる二人に近づき、被ってたフードを取ると……。

「オイオイ、これって……。」「

「タバサとキュルケですね？師匠。」

「この二人なら起こせば大丈夫だろう。ギーシュ、スマンが警戒を
続けてくれ。」

オレは魔法を解除して、二人を起こすから。」

「お任せください。」

ギーシュは少し離れて周囲を威嚇警戒を始め、
オレはタバサ、キュルケに架けた魔法を解除。

二人を起こした。

「う、うーん。私達は倒されたのね・・・」

「残念・・・」

「タバサ、キュルケ、何で水の精霊を攻撃してたのか？」

「アラン、ダーリン、貴方が私達を倒したのね、反撃の余地も無かったわ」

「・・・完敗・・・」

「ウム。殺すつもりは無かったから手加減が難しかった。

お前等は強いな。

まさか水の精霊を攻撃してるのが、お前等とは思わなかったぞ。」

「そ、その、タバサのご実家に頼まれたのよ。

ほら、水の精霊のせいで水かさが上がってるじゃ無い？

おかげでタバサのご実家の領地が被害に逢ってるらしいの。

それであたし達が退治を頼まれた訳。」

なる程、そうなるとキュルケ達も手ぶらで帰る訳には行かないだろう。

「タバサ、キュルケ。恐らく俺たちと目的は一緒だ。

ただ、俺たちは水の精霊を倒す予定は無い。

水の精霊と交渉しに来たのだ。恐らく大丈夫だろうから、

俺たちの交渉がダメな場合以外は攻撃するのを控えて貰えないか？」

「もう、そう言われたら攻撃出来ないわよ、
どうせダーリンには適わないんだから。」

「分かった・・・。」

「おう、アリガト。そう言えばお前等、
お腹は減っていないか？今、俺達も食事してた所だが。」

「あらん、ご馳走してくれるの？ありがたく頂くわ。」

「・・・楽しみ。」

タバサ、キュルケも交えて食事を再開。水の精霊との交渉は明日の朝にする事にした。

タバサ、キュルケはモンモランシーと一緒に車の中。

二人とも寝心地がいいソファーと大喜び。

ギーシュはモチロン、縛ってテントに放り込んでおいた。

夜半、何か見た事のあるお爺さんの亡霊が恨めしそうに俺達を睨んでたが、

ブリミルがいずこかへと連れて行ってしまった。

オレ以外は誰も気づかなかったので騒ぎにはならなかった。

そして翌朝……。

モンモランシが、自分の使い魔のカエル、
ロビンに自分の血を一滴垂らし、使い魔に命令した。

「いいこと、ロビン。貴方達の古いお友達と連絡が取りたいの。
これで相手はわたしの事が分かるわ。

覚えていれば……だけど。じゃあロビン、お願いね。
旧き水の精霊を見つけて、盟約の持ち主の一人が話をしたいと告げ
てちょうだい。

分かったわね。」

カエルはびよこんと頷いた。

それからぴよんと跳ねて、水の中に消えて行く。

「今、ロビンが水の精霊を呼びに行ったわ。
見つかったら連れて来てくれるでしょう。」

サイトはタバサ、キュルケに命じた。

「タバサ、キュルケは悪いけどしばらく隠れててくれ。
お前等は水の精霊を攻撃してたからな。
話は纏めるから、しばらく離れて様子を見ててくれ。」

二人は納得してくれて、少し離れた森に隠れてしまった。

そして待つ事、しばし・・・。

水の精霊が姿を現したのであった。

湖からモンモランシーの使い魔のカエルが上がって来て
ぴよんぴよん跳ねながら主人の元に帰って来た。

モンモランシーはしゃがんで手をかざし、カエルを迎えた。
指でカエルの頭を撫でる。

「ありがとう、キチンと連れて来てくれたのね。」

モンモランシーは立ち上がると、水の精霊に向けて両手を広げ、口を開いた。

「わたしはモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシー。」

水の使い手で旧き盟約の一員の家系よ。

カエルに付けた血に覚えはありますか？

覚えていたら、わたし達に分かるやり方と言葉で返事してちょうだい。」

水の精霊らしき水の盛り上がりは・・・

ぐねぐねと粘土がこね上がる様にして形を取り始めた。

水の塊はやがてモンモランシーそっくりの形になってにつきりと微笑んだ。

それから再び無表情になって、水の精霊はモンモランシーの問いに答えた。

「覚えてる、単なる者よ。貴様の身体に流れる液体を、我は覚えて

いる。

貴様に最後に会ってから、月が五十二回交差した。」

「良かった、水の精霊様。今日は貴女にお願いがあつて来たの。」

「だが断る！！単なる者よ！！」

「何故？まだ何もお願いしていないのに。」

「数える程もおろかしい程、月が交差する時の間、
我が守りし秘宝をお前達の同胞が盗んだからだ。」

「秘宝？」

「そうだ、我が暮らすもつとも濃き水の底から、
その秘宝が盗まれたのは、月が三十回程交差する前の晩の事。」

「じゃあ貴女は人間に復讐するために、水かさを増やして村々を飲み込んでしまったの？」

「復讐？我はその様な目的は持たない。ただ、秘宝を取り返したいと願うだけ。」

ゆつくりと水が浸食すれば、いずれは秘宝に届くだろう。

水がすべてを覆い尽くすその晩には、我が身体が秘宝の在り処を知るだろう。」

「気が長いわね。」

「我とお前達では時に対する概念が違う。我にとっては全は個。個は全。時もまた然り。」

今も未来も過去も、我に違いはない。いずれも我が存在する時間ゆえ。」

「失礼、始めまして。水の精霊様。私はニッポン領に住む、サイトヒラガと申します。

水の精霊様の秘宝を盗んだ人間の名前は覚えていらっしゃいますか？」

「確か個体の一人が、こう呼ばれていた。「クロムウエル」と。」

「そのモノはアルビオンにてアルビオン王家の手により滅ぼされました。

そしてその秘宝の名前は？」

「我の秘宝は「アンドバリの指輪」と言う。」

「それは「コレ」でしょうか？」

「おおおお。まさしくそれこそが、我が秘宝。アンドバリの指輪。何故単なる者・・・。

いや、お前は単なる者とは違うな。何故か我が知り合いの血に近い水の流れを感じる・・・。」

（（久しいの。水の精霊よ。））

「おおおお、まさしくお父様。もう遙か過去の時代、我をこの地に下ろしてくれた父よ。

お懐かしいです・・・。」

（（水の精霊よ。ワシの弟子。つまりサイトはオヌシの弟となるの

じゃ。）」

「この違う者が我の弟とは……。嬉しいぞ。我は。違う者よ、名前を我に教えてくれ。」

我はお前の名が知りたい。」

「サイト ヒラガです。お姉様。」

「う、嬉しいぞ。我が弟、サイトよ。今後は何時でもこの湖に訪れよ。何時でも歓迎しようぞ。」

「ありがとうございます。お姉様。そろそろ師匠が話を進めたいみたいですので、後ほど。」

「ウム。お父様、続きをお願いします。」

（（水の精霊よ、ワシとサイトはこの地に起きる反乱を収めて来た。その際にオヌシが盗まれた、アンドバリの指輪を回収出来たのだ。オヌシは昔から、そっかしい所がある子だったゆえ、今後は二度と秘宝を盗まれない様にせよ。

指輪はサイトが持つてる。

そして周囲の住民に迷惑かける水の増水はただちに止める。）

「は、ハイ。お父様。指輪さえ帰れば、

我は単なる者との関わりは持ちたくありません。

水かさはただちに普通に戻します。」

（（ウム。ではサイトよ。指輪を精霊に戻してくれ。精霊よ、

ワシはまた来る。また会おうぞ。）」

「お元気で、お父様。」

精霊に指輪を返し、水かさは昔の様になり、また水の精霊との盟約の交渉者にはモンモランシーが就く事が出来た。

サイトは水の精霊の弟と言う事になり、モンモランシー一家にサイトが水の精霊の弟様と敬われてしまうのは後の話。

タバサとキュルケは隠れて見てて、口がアングリとなっていた。

s t g 3 0 ガンダールヴと水の精霊 後編（後書き）

難しかったです。

かなりムリ設定でしたが何とか形に出来ました。

stg31 ガンダールヴとヴァリエール一家（前書き）

カトレアを治します。

stg31 ガンダールヴとヴァリエール一家

stg31 ガンダールヴとヴァリエール一家

サイト達一行はラグドリアン湖から帰ると、校長室に出頭した。
報告のためである。

「ラ・ヴァリエール校長代理、サイト ヒラガ以下一行、
ラグドリアン湖での使命を終え、帰還しました。
ギーシュ、モンモランシー嬢、コルベール教諭。全員ケガ等ナシで
す。」

「ウム。ご苦勞様だった。サイト殿。アルビオンでも大活躍だった
らしいな。」

「まあ何とかアルビオン王家も立ち直りつつあります。」

「ウム。貴殿の活躍はまさに我が国始まって以来の大活躍だろう。
献上出来る勲章が存在しない程のな。
そして欲もない。」

「オレは他国の人間ですからね。領地は貰いましたが。」

「ウム。そして我が娘、ルイズが迷惑をかけたにも関わらず、
我が娘に魔法への道標も見つけてくれた。
これは本当にいくら感謝しても足りぬ。」

「もう終わった事です。よ。ヴァリエール校長。」

昔を振り返っても過去は戻れません。

我々人間は常に未来に向けて歩いているのです。」

「そうじゃな。ワシ等貴族は過去を大切にするあまり、未来を見ていなかった。」

妻も今は娘に当たり過ぎたと反省しておる。」

「サイト ヒラガ様。始めまして。」

カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォン
テューヌ

と申します。ルイズの姉、ヴァリエール家の次女です。

この度は我が妹。ルイズのために本当に……。」

「カトレアさんで宜しいでしょうか？ サイト ヒラガです。」

公爵にも言いましたが、過ぎた事です。……。」

カトレアさん、もしかしてかなりお体の具合が悪くないですか？」

「ウム、サイト殿。カトレアは昔から身体の調子が悪く、多くの水
メイジ、

そして高価な水の精霊の涙も数多く用いたが、未だに完治できない
のだ。」

「そうですね。青白い顔をされてしまったので。」

もし宜しければ師匠に見て貰いましょうか？」

「師匠とは……？」

「まさかブリミル様ですか？」

「そうです。ブリミル様も万能ではありませんが、大概の事なら何

とか。

今日は水の精霊様から水の精霊の涙も貰って参りました。
これなら何とか出来ると思います。」

サイトの手元には水の精霊の涙が大量にあった。

もちろん精霊が弟よ。必要になるだろう！と大量に押し付けたのだ。
モンモランシーが羨ましそうに見てたので、少し別けてあげたが・
。

（（サイトよ。オヌシも人が良いの・・・。

まあ良い、カトレアとやら。ワシがお前を治してやろう。

具合が悪くては子も生めまい。子は世界の宝じゃ。

健康になって、この国のために子を増やせ。）

「ブ、ブリミル様・・・。（涙）」

「ブリミル様、そしてサイト殿。

本当に我が娘、カトレアの治癒をお願い出来るのですか？

いえ、疑う訳では無く、まるで夢を見てみたいで。

カトレアが元気になるのが、私達ヴァリエール一家の夢でした。

まさかその夢が適う日が来るとは・・・。」

（（ウム、気持ちは分かる。ワシとて万能では無い。神とも違う。

じゃが目に見える範囲の人間には癒しも与えられる。

お主等も、目に付いた人の不幸には癒しを与える。

それがワシに対する報酬じゃ。出来るな？

ラ・ヴァリエールよ。カトレアよ。）

「モチロンでございます。ブリミル様。私達ヴァリエール一族。

未来永劫。一族が続く限り、他人の不幸に目を瞑る事は致しません。

この場でブリミル様に誓います。」

（「良い良い。分かった。では、サイト。カトレア、そしてヴァリエールよ。」

カトレアを治癒するために横になれる部屋に移動しようか。善は急げじゃ。」）

「ハッ、ただちに。」

カトレアを治癒する事になり、ヴァリエール一家が住んでる学校外の自宅に移動。

カリーヌ、ルイズ、エレオノールも帰宅。

そして・・・。

（「それでは始める。サイトよ、周囲に結界を張れ。この治癒には悪霊や雑菌が入ってはならぬからの。」）

「お任せを。」

サイトは部屋に膨大な魔力を込めた結界を作り、ブリミルの補助を開始。

やがて・・・。

（「ウム、完治じゃ。カトレアや。深く深呼吸して見よ。恐らく咳き込む事は無かるう。」

ヴァリエールよ。」

念のために水メイジにカトレアを一度見て貰え。完治してるとは思うがの??」）

「すーはーっ……。お、お父様、お母様。まったく咳き込みません。」

今までは深く息を吸い込むと多量に咳き込んでいました。それが全然。身体も異常に軽く感じます。」

（カトレアよ。それが普通の身体なんじゃ。

今までお前は病魔と闘って暮らしていたのじゃ。

だから普通の身体にビックリしてるのじゃろう。）

「そうでしたか……。ブリミル様、サイト様。

本当にありがとうございます。」

「『ブリミル様。あ、ありがとうございます。』」

（さて、ワシはそろそろ消えるぞ。

色々頑張ったから少し疲れたわい。サイトよ。オヌシも帰れ。）

「そうですね。お師匠様。失礼でしょうか。」

「御待ちください。ブリミル様、サイト殿。

何かこの場で出来るお礼を受け取って頂けませんか？」

「お礼と言いましても、その様なつもりはまったく……。」

「では何時でも結構です。私達で出来る事がありましたら要請してください。」

「は、ハイ。ではもしそう言う事がありましたら……。

それとド・オルニエール。現ニッポン領地は正式に私の領地となりました。」

地代はもう支払わなくて結構ですよ。」

「おお、もしかしてアルビオン戦の功績で正式に譲り受けられたのですか？」

「ま、まあその通りです。ちなみにレコンキスタは完全に壊滅させました。ご安心を。」

「おお、アレが壊滅されたとは。

信じられませぬ。まさにサイト殿はイーヴァルディの勇者様です。我が国、そしてハルケギニアを救って頂き感謝します。」

「お師匠様、ではそろそろ・・・。」

（ウム、ヴァリエールよ。家族で今宵は祝え。

カトレアの新しい人生にの。では、さらばじゃ！）

ヴァリエール家から退散すると、

サイトは一路皆の待つニッポン領に向かってパジェ。を走らせた。

その頃、カトレアは・・・。

「素敵な方・・・。私よりも年下なのに、凛々しく強く謙虚。そして私の身体を治してくれた。

あの方こそ私の・・・。」

第一次サイト争奪戦が始まるのは、もう少し後の事・・・。

stg31 ガンダールヴとヴァリエール一家（後書き）

カトレア治癒編でした。

stage2 ようやく領地に……。 (前書き)

領地のチート経営です。

少し残酷な行為が出ますがご容赦を。

stg32 ようやく領地に・・・。

stg32 ようやく領地に・・・。

つ、疲れた・・・。

ようやく自分の領地に帰れた。

思えば、テファを連れに行き、次がアルビオン戦、水の精霊との交渉に、カトレアの治癒。

頑張ったよな？オレ・・・。

と、独り言を言っていたら、屋敷の玄関にテファ、マチルダ、シエスタが。

「「お帰りなさい。サイト様。」「」」

嬉しいよ。帰って誰かが「お帰り」って言うてくれるのは。

「ただいま。」

そう告げて、皆で屋敷に入った。

テファと子供達はすっかり領内に慣れてて、走り回ってた。

テファは耳が短くなった事で、自信を持って歩ける様になり、

その双丘を見せびらかす様に、

バイーンバイーンと揺すって歩いてる。

さすがのシエスタも恨みがましく見てるとか。

アレに合う武等は市販では売っていないから、
今度地球で特注しないとね。

さて、そろそろ領地の整地も終わった頃だし、
色々と魔改造を始めますか。

まずは、住宅です。アパート形式は独身男性のみにし、
寮監のオバチャンにご飯の支度を頼みます。

結構好評なんです。独り者には。

妻帯者は、二階建ての住宅を提供。

どちらも家賃は税として徴収するのみ。

勝手に道路に建物や看板を出さない様に法律を制定。
破った者は国外追放。

泥棒、痴漢、などの犯罪者は初犯は背中に
焼きゴテで私はナニナニの犯罪を犯しました・・・と焼きゴテを入れ
て釈放。

二度目は処刑ですよ。無駄飯食わせる義理はありません。

犯罪者の更正なんて甘い事は中世の今は言っておれません。
殺人は一発で死刑です。ハイ。

道路は大型車両でも通り抜けられる舗装道路。

郊外には、この時代には合わない大型空軍基地・・・そう。
終戦直後の時代から移転した厚木基地。
反対方向の郊外には横須賀航空隊。

どちらも元よりは広大に敷地を広げたのは当たり前。
シエスタのお爺さんの同僚と一緒にタルプに行ったら、何と・・・。
零戦では無く、烈風が鎮座してたのですよ。
何でもテスト飛行してて行方不明になってたとか。

佐々木武雄海軍大尉が。

佐々木はこんな所に居たのか！！と上官が男泣きしてた。
横須賀航空隊の墓碑に彼の骨を分骨して葬ってあげた。
シエスタは御爺様、良かったですね・・・喜んでいた。
彼もきつと大喜びだろう。

補充のための工場はB29の空襲に遭う寸前に移転してしまった中
島航空機。

そして地震前に移転した三菱航空機。
川崎も移転したかったけど、あそこはエンジンがね・・・。

切り開いた山麓、僻地はすべて平地にして、
海に港を開港。

横須賀、呉、佐世保の工匠はすべて設置。

終戦末期に野晒しになってた艦隊を完全復活。

特に長門は現役でも通用するもんで重宝してます。

周辺の海域を威嚇行動し、常に沿海を航海してもらってます。

軍隊の要は、戦う事では無く、

威嚇と恫喝、そして災害時の緊急救難にあると思うんです。

現代地球の技術は食料関係、レーダーやロケット。

そして銃器関係を移転。

これ等は以前から準備してたから大丈夫。

問題だった風石は、地下鉄掘削関係の技術者や機械を導入して大量に掘削。

おかげで新燃料として風石を発電、燃料に回せる様になった。

アルビオンの戦艦にも風石燃料方式としてはたのは当然。

自分の屋敷は、治外法権地帯として街とは別個の完全な国家として登録。

万一、泥棒や他国の貴族が押し入ったら、問答無用で射殺OKです。

そんなある日。

ワシはジュール・ド・モットじゃ。

誇り高きトリステインの貴族。

今日は新しく開けたと言うニッポン領と言う田舎に来たのだ。

そこには、馬の居ない馬車。轟音を立てて飛び去る竜。そして巨大な建物と何か違う世界みたいなのだが？

そう思っただけ歩いていたら、中々美しい娘が居た。

フム、ワシの妾に丁度良い。

娘がどこぞの屋敷に入ったので、その娘の手を掴み・・・。

「美しい娘よ、我の妾となれ。ワシはジュール・ド・モットじゃ！」

「止めてください。領主様を呼びますよ。」

そう抵抗しおったので、一発、顔を平手で殴った。

次の瞬間、横合いから強烈な衝撃を受け、

ワシは数メートルも吹っ飛ばされた。

「エア・ハンマー」を喰らったのだと解ったのは、

地面に叩き付けられ、無様に泥まみれになってからのことだった...

...

「何をする！」

痛みに耐えつつ叫ぶモット伯を、若い男が見下ろしていた。

「何をすると言いたいのはこちらの方だ。」

女性を無理矢理連れ去ろうとするとは、いったいどういうことだ。」

「ワシはジュール・ド・モット伯爵じゃ！」

ワシはこの娘を、ワシの妾にしてやろうと言っのじゃ！
一介の平民の娘が、伯爵家当主の妾になれるのじゃぞ！
光栄に思って当然のはずじゃ！」

「あなたがモット伯爵ですか……。

俺はこの領主、サイト・ヒラガです。

……まさか伯爵家当主が、こんな常識の無い人だとはね。」

「何じゃと！」

「そうでしょう。ご自分のやったことを、よく考えていただきたい。
あなたはこの地の領民を、無理矢理勝手に連れ去って、
自分の妾にしようとしたのです。

それも領主である俺に、まったく何のことわりも無しに。」

「うっ……！」

「ここはあなたの領地じゃなく、俺の領地なのですよ？

伯爵家当主といえども、そんな好き勝手な真似をしていいわけが無い。

あなたはその程度のことも解らないのですか？」

「……ワシを侮辱するのか……！」

「『侮辱するのか』と言いたいののは、むしろこっちの方ですよ。

もう一度言いますが、あなたは俺の領地の領民を、勝手に連れ去ろうとしたのです。

俺の承諾を得るところか、ことわりすら無く……。

俺に侮辱と受け取られても、文句は言えないと思えますか？」

「う……。」

「あなたが俺の立場ならどうです？」

自分の領地で、そんな好き勝手な真似をされて、屈辱を感じずにいられますか？」

「くっ……！」

「解つたら、さつとこのニッポン領から出て行っていただきたい。そして二度と、ここには来ないでいただきたい。」

「何じゃと……！」

「聞こえなかったのですか？」

俺はあなたに、このニッポン領からの、即時退去を求めているのです。

そして二度と、この地への立ち入りは認めないと言っているのです。もし退去しないと云うなら、力ずくでも出て行ってもらいますよ。」

「く……。」

齒噛みするモット伯だが、やはり彼に、この屈辱に耐えるだけの自制心は無かつたらしい。

いきなり顔を上げると、懷から杖を取り出した。

「追い出せるものなら追い出してみろ！」

そう叫ぶモット伯。

自分がサイトの挑発にひっかかったことに、まるで気づいていない。

「ほう、そう来ますか……」

他人の領地で、好き勝手な真似をしておいて？

まさに絵に描いたような逆恨みですな。」

「う、うるさい！ うるさい！」

地下と空中から湧きだした水の塊が、サイトに襲いかかる。

だが一瞬早く、最大級の「ライトニング・クラウド」が、モット伯に向け牙を？いた。

「グギヤアッ！！」

断末魔の叫びと共に、モット伯ジュールは、一瞬で消し炭と化する。侮蔑と憐れみの入り混じった表情で、サイトがそれを見下ろしていた。

「……危なかったね。テファ。」

この屋敷はトリステインでは無いと知らなかったのだろうか？」

「いいえ。主。この屋敷については例え国王や枢機卿でも入るには、主の許可が要ると通達してあります。」

「ウム。ではトリステイン王国に告げよ。」

我がニッポン領大使館にて狼藉を働いた罪人、ジュール・ド・モットを処刑したと。裁いたのは、領主、サイト・

ヒラガであると言え。」

その後トリステイン王国に、
ニッポン領にジュール・ド・モットが押し入った経緯を通報。

今後の事を考えよう。

この領地は完全に自分の思う通りになりつつある。
だがたまに狂った貴族が押しかけるのは困ったモンだ。
自分が居ない時にでも押し入られると厄介な事になる。
もう少し警察権限を上げておくか・・・。

他人の領地で、好き勝手な真似をして咎め立てされ、
退去を求められたのを逆恨みして領主に攻撃魔法を放とうとし、
返り討ちに合った」という、貴族としてはこれ以上考えにくいほど、
不名誉かつ無様な死に方をした、モット伯ジュール。

そのあまりの醜態に、あまりの無様な死に様に、
トリステインのみならずハルケギニアの人間は皆呆れ果て
——モット伯爵家は取り潰しとなり、領地はすべて没収となった。

次いで、モット領に閉じ込められてた多くの子女を解放。
奴隷となつて、親も居ない女性や子供は孤児院に。
親の居る子でも、帰りたく無いと言つ子も孤児院に引き取った。

警察権力と対外国の恫喝のため、常時低空を航空機で威嚇。
不振な馬車は威嚇射撃。

反撃して来た場合は・・・殲滅ですよ。

その後ニッポン領に押し入る山賊や強盗、バカな貴族は激滅。
たまに居ても、殲滅してしまいます。

そして郊外に晒し者です。

s t g g 2 ようやく領地に・・。(後書き)

モットが逝きました。

モットの最後をになさとする様に提案して頂きました。 6 / 2 2

s t g 333 (閑話)亡国のエース達(前書き)

閑話です。

サイトにスカウトされたエース達のお話。

少しマニアが入っております。

stg33 (閑話) 亡国のエース達

stg33 (閑話) 亡国のエース達

俺は栄えある横須賀海軍航空隊のパイロットだ。
名前？坂井三郎と言う。

ただの生き残りだよ。

仲間の死と引き換えの・・・。

しかしそれも今日で終わりだ。

天皇陛下の玉音放送によって、俺達の戦いは終わった。

もう愛機に乗る事も無くなるらしい。

無条件降伏と言う事だから、我々海軍航空隊も解体されると言う。
国に帰って百姓も悪くは無いが、どうしたモンかな？

そこへ平賀才人と言う少年・・・にしては気迫が只者では無い。

彼はかなりの死線を潜ってる猛者だ。

俺も敵弾の嵐の中を潜った男。死ぬ寸前も数回経験がある。

特にガダルの戦いは良く生きてた。

アレが笹井中尉との最後の戦いだったな・・・。

彼の話では、この世界とは違う世界に横須賀を転移させ、
我々に異界でパイロットを続けなにかと言う事らしい。

この日本では、十年は空を飛べなくなるとか・・・。

十年も飛べなかったら、我々は引退だ。

それなら、飛べる限り飛んで、後輩を異界で育てるのもいいと思う。
補給についても問題ないと断言してるから、信じていいだろう。

何よりも彼の目が信じられる。

そうして、異界来ると信じられない連中が俺を待ってた。

笹井中尉、武藤のキンちゃん。まさか・・・。

彼等は戦死してたでは無いか？

だが、手を握っても温かい。

そして足もある。

「坂井、会えてオレは嬉しいぞ。」

「サブちゃん。俺は確か豊後水道で、。野機の盾になって墜落したハズだが・・・」

どうでもいい。彼等とまた飛べるなら・・・。

赤松さんも岩本徹つあんも、杉田も太田も、そして西澤も居た。

飛べる限り俺たちは異界のハルケギニアの空を飛ばう。

やはり空を飛べないパイロットはただの役立たずだ。

今日も新米を率いて、ニッポン領上空を哨戒飛行だ。

俺は空を飛べて楽しい。

stgg33 (閑話) 亡国のエース達 (後書き)

閑話です。

有名な坂井さんもハルケギニアに来て貰いました。

そして戦死した連中も多数呼んであります。

ちなみに横須賀航空隊司令は柴田武雄。

厚木は小園司令です。

源田は無視ですよ。

ヤツはパイロットを駒にしか見ていませんでした。

stg34 雪風の願い（前書き）

タバサ救済編です。

stg34 雪風の願い

stg34 雪風の願い

領地経営が軌道に乗り、バカな貴族も来なくなったある日。

魔法学園の生徒、タバサがオレに面会を求めて来た。

キュルケもセツトだったけど。。

「・・・今日はサイト ヒラガ様にお願いがあつて来た・・・」

「どう言つた願いかな？ 場合によっては断りますが。 自分も領地を経営する身です。」

「この前ルイズの姉を治癒したと聞いた。 もしお願い出来るなら、何でも言う事を聞く。」

自分の母の治癒を頼みたい・・・」

「タバサの母さんと言うのが、ある秘薬みたいなので、精神を狂わされてしまつてゐるの。」

サイト様。 お願い。 タバサの母さんを救つてあげて。」

「その前に聞きたい。 タバサさん。 貴女の名前つて、本当の名前では無いでしょう？」

「すいませんが、偽名の方に一命を賭ける事は出来ません。 お帰ってください。」

「偽名を使つてたのは事実。 もし本当の事を言えば、話を聞いて貰える？」

「何とか出来ると判断出来たらです。さすがに無謀は出来ません。」

「・・・分かった。私の本名は、シャルロット・エレーヌ・オルレアン。」

かつてはガリアの王室の娘だった。」

「ガリアのオルレアン公爵の娘だったのですか・・・。
確かにジョセフ王に・・・。」

「・・・お父様がジョセフに暗殺されて、
その後、お母様がエルフの毒を飲まされて気が狂ってしまった。
お母様は人形を私と思い込み、私を人形と思ってる。
お母様が元に帰れるなら、私はすべてを捨ててもいい。
何とかお願いしたい。出来る事なら何でもする。お願い。」

「うーん・・・。簡単ではありませんね。少し考えますので、時間を
ください。」

（（師匠、聞きましたか？））

（（ウム。サイトよ。これはかなり危険じゃ。
ワシも即答は出来ぬ。治癒自体は可能じゃが。））

（（そうですね。特にガリアの姫と言うのも不味いです。
それではこうしません？・・・。））

サイトはブリミルと話し合い、タバサに話を切り出した。

「タバサさん、いやシャルロットさん。」

貴女は復讐を捨てられますか？出来ないと言うなら今回は話をお断

ります。」

「お母様が元に帰るなら、復讐も人生も捨てられる。お願い出来ないか？」

「そうですが。では、タバサさん、貴女は一回、公式に死んで貰います。」

「公式に死ぬとは？」

「そのままの意味です。
タバサ事、シャルロットと言う人物はこの世に存在しないと言う事になるのです。」

「どう言う粗筋になるのか分からないが、それでお母様が助かるなら、何でもする・・・。」

「では、タバサさんにスキルニルをお渡しします。
このスキルニルと自分の作った竜と戦って貰い、
そしてスキルニルのタバサさんは・・・。」

「死んでしまう・・・。」

「そうです。そして魔法学園からは消え、私の領で暮らして戴きます。」

その際は母上も屋敷の執事もです。
一人も故郷には残しません。屋敷は火災ですべて消えて貰います。」

「構わない。このままでは、お母様は狂ったまま人生を終えてしまう。」

執事も長年勤めてくれてるのが一人だけ。」

「了承して頂けましたね。では、数日後、学園の外に巨大な竜が来ます。」

貴女はその竜と戦い、消し炭になって貰います。

そうして公式には貴女は居なくなり、タバサと言う人物はこの世から消えます。」

「分かった。指示通りにする。」

「その後、貴女の実家は火事で全焼。家族のスキルニルに死体の役目をして貰います。」

私の魔法で、この領地に転移。貴女は髪の色と顔を変えて生きてもらいます。」

「それでいい。実家にも自分の口で連絡しておく。」

「分かりました。では、準備が出来たら、キュルケ。悪いけど、オレに教えてくれ。」

それまではタバサさんと会々と色々和不味いから。」

「ダーリン、ムリなお願い聞いて貰ったのはコッチだからね。大丈夫。」

準備出来たら、私から連絡するわ。」

「・・・本当にありがとう。感謝する・・・。」

「お礼はいいです。絶対に失敗出来ない一発勝負ですから。それと竜は、タバサさんを殺害した後自爆します。」

「分かった。お願いします。」

こうしてタバサの母の救出作戦は始まった。

キュルケから連絡があり、

巨大な竜を出現させタバサ（仮）は竜と戦い、火達磨となって戦死。竜は自爆して相打ちとなった・・。

タバサの戦死後、即座にタバサの実家に転移。タバサの母、

執事、そしてタバサをオレの領の屋敷に転移。

ブリミルとオレの二人で、タバサの母の治癒を開始。

苦勞の末、正気に戻り今はタバサと母親は仲良くオレの屋敷でメイドとして暮らしている。

キュルケは良くオレの屋敷に遊びに来て、タバサと遊んで帰っている。

一人の女の子の人生は救えた。

stg34 雪風の願い（後書き）

タバサ救済編でした。

s t g 3 5 新首都タイタニック（前書き）

アホ姫のオモチャ設置編です。

stgg35 新首都タイタニック

stgg35 新首都タイタニック

オレはタバサの一件が片付くとマザリーニ枢機卿との会談のため、トリステインを訪れた。

我が領地に対するパスポート問題の事、そして、首都トリステインの整地問題の提案である。

基本的に以前の街と同じにするが、道幅は大幅に広げ、馬車が数台は交互に走れる広さとする。

道は石畳形式。>アスファルトでは、オレが居ないと作るのもムリ。石畳なら何とか出来ると思う。

住民は一時退去。新しい街の住宅と店舗は国（俺たちが作る）に敷金と家賃負担で再入居。

そして……。姫の願いも適える。

ただし、戦艦では無い。知りたい??

そしたら題名見てね♪

次がパスポート問題。

モットの一件もあり、早急に設定するべきと思った。

無法を働く輩ばかりでは無いから……。

パスポート発行は、渡航理由、滞在期間を確認して、

マザリーニの許可印をもらうことでニッポン領に入れる。

ニッポン領では、パスポート、許可印、

武器などの危険物や違法な物品の有無を確認して、滞在出来る。

どれか一つでも、欠けていた場合、射殺されても文句が言えない。

パスポートはトリステインに在住している証明が有ればタダで発行可能。

なを領主サイト ヒラガからの直接発行もあるが、それはプレミア

ムパスポートとして、
優先許可証扱いとなる。

会談を終え、オレは自領から工作機械を多量に呼び、トリステインの整地にかかる。

住民は一時文句も言ってたが、汚い街を綺麗にすると言われては文句も言えず。

そうして作業する事、一週間。

アバラ家や糞尿の溜まり場だった路地は綺麗な道となり、市内には綺麗なトイレも多く設置。

そしてトリステイン城の前には・・・。

何と言う事でしょう。

あの大西洋の藻屑と消えてた・・・「タイタ。ック」が鎮座していたのです。

サイトはアホ姫が戦艦欲しいの〜〜と騒ぐのを聞き、ヤツには危険。

それなら・・・。と思い、大西洋の海底からタイタニッ。を引き上げた。

モチロン動かせる訳は無いが、風石発電形式で電力を街にも供給可能。

さらに豪華客船だっただけに内部の設備は下手なホテル顔負け。

アホ姫には丁度いいだろう。

「サイト様。これが私達の新しい町、タイタニックなんですね？」

「そうです。姫。今までの城とは違い、電力も供給可能。フロは二十四時間OK！

コンサートもダンスパーティーも思うがままです。一度、ウエルズ皇太子も招待しましょう。」

「まっ♪素敵ですね♪では早速ウエルズ様にお手紙書いて来ます」

「サイト殿、本当にありがとうございました。おかげで首都も新しく綺麗な街となりました。感謝してもしきれません。」

「自分の住む国の首都がスラムでは、国としての面目が立たないから加勢しただけですよ。」

「これあの姫も少しは大人しくなる・・といいですね。」

「何とも言えませんが、大人しくなって欲しいです・・。」

「「はあああ・・・。」」

それからしばらくすると、アルビオン王国からウエルズが渡来。国を上げての歓迎式典が始まった。

新城、タイタニックは万艦装飾して夜は綺麗に船の形をした電飾。城から供給される電力で、街は夜でも明るくなり犯罪も激減。

「ウエルズ様、このお城はいかがかしら？」

「アン、素敵だね。コレもサイト殿からの贈り物か？」

「ええ、とてもいい方ですね。」

「そうだね。彼は自分達の国の窮地を本当に地獄一歩手前で救ってくれた。」

「彼が居なかったら、僕は今頃・・・。」

「そんな怖い事を言わないで。ウエルズ様。そう言えばウエルズ様の国も。」

「ウン、城の名前もプリンス・オブ・ウエルズだ。サイト君のおかげだよ。」

「君の城も凄いじゃ無いか。前の城のホールよりも豪華だね。」

「ええ、でもね。ウエルズ様、一番のお気に入り場所があるの。ちよつとコチラへ来てくだらない？」

「ン??いいよ。」

ウエルズとアンリエッタは船の船首へと歩き、そして最先端で・・・

。

「ウエルズ様、わたくしの身体を支えててくださいね。」

「こづかい？」

そう、アノ、ポーズをアンリエッタはしてたのです。

例のデカプリオとケイト・ウインスレットが取って有名なあのポーズを。

「ココに立った時、何故かウエルズ様とこのポーズが取りたくなつたのです。」

「嬉しいよ、アン。」

影から見てたサイトは気づきおつたか？とアンリエッタの電波の受信率の高さには呆れてた。

こつしてトリステインの首都、タイタニックの物語は始まった。

その後お城を訪れるカップルは何故か
アンリエッタ&ウエルズの真似をするのが流行ったとか。

s t g 3 5 新首都タイタニック（後書き）

パスポート問題はF O O L様の発案を採用させて頂きました。
アホ姫とウエールズであのポーズをさせたかったので、
タイタニックを持ち込みました。

stage 6 ロマリアの憂鬱（前書き）

ロマリアが発狂しました。

stgg36 ロマリアの憂鬱

stgg36 ロマリアの憂鬱

トリステインにブリミル様が降臨したという話がハルケギニア全土に伝わり、

ロマリアのブリミル教はすっかり衰退してしまった。

何よりもブリミル様が

「ロマリアの糞坊主には呆れた。今後ワシは知らン！」

と公言されたと言うからさあ、大変。

ハルケギニア全土にあるブリミル教の教会はすっかり零落れ、ガタガタとなってしまうた。

教皇聖エイジス三十二世、ヴィットーリオ・セレヴァレもその一人。

使い魔にも逃げられ、ワールド・ドアも見れなくなった事で、完全に落ち目となつてた。

聖地に行く所か、明日のご飯にも事欠く僧侶が続出する有様。このままでは、ロマリアが滅びる。

藁をも掴む思いで、ヴィットーリオはハルケギニアのニッポン領を尋ねる事にした。

だが……。

「ここはハルケギニアの常識は通用しない土地だ。
例え国賓だろうと、国王だろうとパスポート無き人物は通せぬ。帰れ、帰れ。」

何と私がロマリアの教皇だと告げてるのに、衛兵に追い返されてしまった。

仕方ないので、トリステイン王女をたずねる事にしたが・・・。

「サイト ヒラガ様、並びにブリミル様の命令で、
ロマリア関係の方にパスポートは発行出来ません。
申し訳ありませんが、お帰りください。」

何と、マザリーニに袖払いされてしまった。
どうしてなんだ？

数ヶ月前は、教皇と言えば一国の王よりも権威があったハズだ。
それがたかが枢機卿如きに追いつ返されてしまうとは・・・。

このままでは済まさない。

絶対にブリミルの神教は私達ロマリアが勝ち取るのだ。

もうなりふり構ってはいられない。

明日の神教を勝ち取るために、トリステインを滅ぼすのだ。
ゴハン

ヴィットーリオはトリステインに対し、宣戦布告をしてしまった。

「枢機卿殿、いよいよロマリアがキレイでしたね？」

「サイト殿、アレではキレますよ。もう少し加減は出来なかったのですか？」

（「温いぞ。マザリーニよ。あの連中のアホ宗教が、この世界を停滞させてたのだ。」

「ヤツラこそが、この世界のガンだ。殲滅させ、新しい世界にするのだ。」

「そ、そうですね。ブリミル様。新しい世界にし、発展させなければなりません。」

（「そうじゃぞ。見る。サイトが設置してくれたタイタニックのおかげで、この街は発展してるだろ？それに、犯罪も減り環境も良くなった。」

「ごもつともです。コレが正常な進化なのでしょう。」

（「分かれば良い。所でサイト。作戦はどうするのじゃ？」

「国境には各地の貴族軍を待機。しかし航空機攻撃で大半は壊滅出来ると思います。」

（「ウム。手加減はせぬ様にな。禍根は残すな。」

徹底的に叩き潰せ。それこそがヤツラに対する供養となる。」

「サイト殿、後方に学生軍を展開して宜しいのですか？」

「ハイ。彼等も何時かは戦場に立つ身。実戦の怖さを実感して貰ういい機会です。」

我々ニッポン空軍もこの世界では初陣ですが、彼等は猛者です。恐らくロマリア軍は・・・」

「塵も残ればいい方ですね・・・」

こうしてロマリア対ハルケギニア戦争が始まった。

ガリアは加勢せず、ゲルマニアは通過するのを無視するだけ。

ロマリア軍の兵士は士気も低く、食料も少なく、行軍だけで疲れた。

「もう少しで敵地だ。ガンバレ。勝てば褒美は取り放題だぞ！」

「『『『ウォーーーーーッ！！』』』」

無い元気を振り絞りようやくラグドリアン湖の国境に到着。

湖を迂回して、トリスティンに達しようとした時。

空から鉄の竜の軍団が我々に襲い掛かって来たのだ。

（ザーツ、コチラ坂井一番。間もなく敵軍上空。竜が襲う可能性がある。）

太田、西澤分隊は上空で援護待機。その他の分隊は一斉に！かかれ！！」

「了解っ！突っ込めっ！！」

編隊を崩した戦闘機部隊は一斉にロマリア軍部隊に襲い掛かった。

空から振る爆弾、そして機銃弾の雨に、ロマリア軍団は完全に戦線崩壊。

ヴィットーリオは「向かえ！打て。」と騒ぐが、速度が違う。そして腕も違う戦闘機軍団には成す術も無い。

やがて大半の戦闘機が消えた頃。

トリステイン軍がボロボロのロマリア軍に襲い掛かる。

「いやだー、もう死にたく無い・・・」

「母さん、助けて・・・」

死人の山に僅かばかりの息の残る兵士の呻き声。

それでも、彼等には非情の銃弾の嵐が襲い掛かる。

手が足が、そして腸が宙に舞う。

轟音が轟いた後には死の静寂が・・・。

もう降参するしか無いのだが、

教皇は認めぬ。

「又又又。まだまだだ。絶対に諦めぬぞ。」

兵士は悟った。

このままでは、生きて国には帰れない。

この発狂した教皇を生かしてたら、我々は死ぬばかりだ。
もう適わぬなら降伏するだけだが、この連中では・・・。

「やるか？」

「オウよ。」

兵士はヴィットーリオ他ロマリア教皇関係者の背後に近づくと、
斉に魔法を叩き付け、
教皇関係者を殲滅した。

「ヨッシ、やったぞ。降伏だ。」

残兵は白旗を掲げ、教皇関係者の首を持ち、降伏した。

ここに長くハルケギニアを狂わせたロマリアのブリミル教は滅び
た。

戦後、旧ロマリアはサイト ヒラガ領となる。

さすがに疲弊したロマリアにはゲルマニアも旨みが無く、
サイトの転移魔法にて、旧ニッポン領から転移し、
元ロマリアはニッポン帝國となる。

トリステインとゲルマニア、ニッポン帝國は友好国となった。

stg36 ロマリアの憂鬱（後書き）

ロマリアの最後です。

ロマリアは疲弊してるので、ゲルマニアには旨みがありません。
ニッポン帝國となり、サイトが再開発します。
設定コロコロ変えてすいません。

stg37 (閑話) 戦場の恐怖 (前書き)

ギーシュの独り言です。

stg37 (閑話) 戦場の恐怖

stg37 (閑話) 戦場の恐怖

ボクはギーシュ・ド・グラモン。グラモン家の四男だ。
今回は急遽編成された学生軍団、水精靈騎士隊隊長として、
ボクは戦場に立つ事になった。副官はレイナル。
その他マルコリヌ、ギムリと学生ばかりの部隊だ。

我が師匠、サイト ヒラガ殿は今は空の上らしい。
多くの鉄の竜がラグドリアン湖上空を轟々と飛んでる。
多分、あの中の誰かが師匠だろう。

我々の任務は後方支援。
退屈だ〜とか騒ぐアホが居るが、我々が手抜きをしたら、
街の住民に敵の鉄槌が下るのだ。
決して疎かには出来ない。

そうこうする内に鉄竜軍団の攻撃が始まった。

良かった。自分達がアノ中に居なくて。
凄まじい破壊力は離れてても分かる。
鉄の玉を落すと、木が千切れ、その中には人間らしき悲鳴も聞こえる。

そして連発する銃の嵐。

タタタタ、タタタタと・・・。

アレでは当たった人間は一溜まりもあるまい。
十分も続いただろうか？

突然静かになり、我々の前衛に居た、
トリステイン王国軍隊が予定通り、残兵に襲い掛かった。
我々も後衛として進軍。

そこには・・・。

手足の無い遺体。

腸が飛び出た身体で、腸を押し込もうとして、まだ生きてる兵士。
目玉が飛び出して、それでも狂った様に走り回っている兵士。
そしてピクリとも動けない・・・

だけど目だけはギョロギョロと動いて生きた死体。

誰かが言った。

「もう楽にしてやれよ。アレでは哀れだ。」

助かる術も無く、

惨い最期を痛みと絶叫で終わらせるのは人間としても哀れだ。

そこへ父上が。

「ギーシュ、彼等を楽にしてやれ。後衛部隊に対する命令じゃ。」

上官としての命令では逆らえぬ。

ボクは吐き気を抑えながら、

彼等に慈悲の鉄槌を下す命令を水精靈騎士隊隊員に下した。
オンテイナーヌ

「彼等に栄光の最後を。打て〜〜〜!!」

魔法と銃の嵐の鉄槌を彼等を天国への招待状として我等は下したのだ。

喚いてた兵士、母らしき人の名前を呼んでいた兵士。

もがいてた兵士。

すべて静寂の中に静かな最後を遂げてた。

自分は彼等の最後を永劫に忘れまい。

s t g 3 7 **(閑話) 戦場の恐怖 (後書き)**

実際の戦場はこんなモノでは無いと思います。

stg38 ロマリア開拓団（前書き）

ロマリアを開拓します。

stg38 ロマリア開拓団

stg38 ロマリア開拓団

戦いが終わり、ロマリアに残ったのは孤児と乞食の平民、そして農民と乞食に身を落としてた過去の僧侶のみ。

兵士はすべて投降。

貴族も大半は戦死し、ロマリアは荒れ果てた街となつてた。

「さすがに荒れてしまつてるね・・・」

「そうですね。師匠・・・」

オレは何故かギーシュ、

そして水精靈騎士隊の連中を率いて、ロマリアに立つてた。

トリステインの軍隊が少しは使い物になるだろうと押し付けられたのだ。

しかし人が足りない。どうしたらいいのだろう・・・。
そこでオレはある事件を思い出した。

「ギーシュ、とりあえず手持ちの食料を転移しておいたから、
これで貧民に食料を与えてくれ。

まだ残兵が居るかも知れないから、
警戒は解くな。少しオレは準備してくる。」

「師匠、分かりました。貧民達を救済しておきます。」

「ウム、頼むぞ。では・・・。」

ブシユンと言う音と共に師匠はいずこかへと消えてしまった。
相変わらず人間離れしてる・・・。

オレは終戦直後の北方領土に来てた。

この時代の戦闘機部隊を転移させたため、
この時代の歴史はかなり変っているだろう。
だが、やはり・・・。

赤軍の連中が終戦にも関わらず、北方領土を攻めて来てるのだ。
このままでは、歴史は変らない。

既に違う歴史だが、変えられる歴史なら変えよう。

オレは初めて爆発 エクスプロージョン の魔法を発動した。

ヤツラなら、殺しても苦しむ気持ちは無いな。
我が祖国の同胞を虐殺しようとしてた連中だ。

ついでに後続の輸送艦隊も殲滅しておいた。

その後は、満州の満蒙開拓団だ。
彼等には帰る故郷もない。

このままでは、歴史の渦に巻き込まれ消え行く人々。
なら、ロマリアの開拓を頼んでもいいかも知れぬ。

開拓団長に談判した。

「このまま貴方達はソ連の軍団に殺されるのを受け入れますか？
もし私の提案を受け入れて頂ければ安全な開拓地を提供します。
そこはこの世界とは違う異世界です。

ですが、このままココに居たら、貴方達はソ連の赤軍に戮られるだけです。

どうか受け入れて貰えませんか。」

かなりムチャな提案だったのは仕方ない。
だが時間が無いのだ。

このまま放置してたら、彼等は殺されてしまうのだ。

「受け入れましょう。どんなムチャな事でも命の危険が無いなら。」

「絶対に命の安全は保障します。

その前に少しヤツラに鉄槌を下して行きましょう。

全てを倒すのは不可能ですが、少しでも他の同胞が逃げられる様に
見ててください。エキスプロージョン爆発！！！！」

図怒怒怒・・・。

轟音と共に、数キロ手前まで迫ってたソ連軍が消えてた。

「これで少しは時間が稼げるでしょう。荷物は纏める必要はありません。」

この土地ごと飛ばします。少しビックリすると思いますが、ご容赦を。

転移――！」

プシュンと言う音と共に、その地域に居た開拓団は全員この世界から消えた。

プシュン♪

ロマリアに着いた開拓団の面々は異界と言う事を抜きにしても、荒野が続く台地には狂気してた。

この土地を好きに開拓出来るのだ。

税は一割のみ納めれば良いと言う。

そして我等を守るのが、懐かしき日の丸戦闘機部隊だ。
俺達は異界で頑張るぞ〜！！

師匠は相変わらずハデだ。

どうやってあれだけの人員を確保できるのだ？
謎だが、それがサイト ヒラガ師匠なんだろう。

stg38 ロマリア開拓団（後書き）

北方領土は我が国固有の領土です。

満蒙開拓団の移転の発案はがろうでん様です。ありがとうございます。

stage 9

(閑話) その頃の妻? 達。

(前書き)

色々とリクエストが多かった妻達の話です。

stg39 (閑話) その頃の妻? 達。

stg39 (閑話) その頃の妻? 達。

サイトが西に東に過去にと飛びまくり、すっかりご無沙汰している女達の話である。

彼女達は、突然、所領がトリステインからロマリアに移動する事になり驚いてた。

何でもロマリアが完全降伏したが、とてもでは無いがサイト以外復興がムリ。

なので、所領をすべてロマリアに移してしまったのだ。もちろん工廠、航空基地、建物すべてである。

サイト達が去った土地は元のド・オルニエールへと返ってしまった。反対にロマリア改めの大ニッポン帝國は異常な発展を遂げてた。元ロマリア僧侶の連中は再び権威に返り咲く事は不可能となり、反対に平民でも有能な人間は取り立てる。

そして満州から移民した開拓団は、荒れた土地にも関わらず、数年で満州以上の土地にしてしまうだろう。

サイトは思う。やはり人間最大の武器は平民だと。

そうして毎日を過ごしてたある日。

女達に問い詰められたのである。

「サイト様、お忙しい所、少しお願いがあり我々女性達は参りました。」

「な・何でしょうか? 皆様、お揃いで……。」

「シエスタ、テファ、そして私、マチルダを何時まで放置して置くつもりですか？」

もう私達は貴方以外の妻になるつもりはありません。
どうか、私達を貰ってください！！」

「ゲツ。三人共ですか？」

「……出来れば私も……」

「相変わらず怖い出現だね？タバサ。」

> ロマリアが滅びたので、もういいだろうと偽名を止めたタバサです。

「うーん。それは皆の総意かい？」

「……ハイ。私達、妻候補全員の願いです。」

「では、オレから言わせて貰うよ。悪いけど順番に一人ずつね。まずはシエスタ。」

「ハ、ハイ。サイト様！！」

「君には前世を含め、本当に世話になった。

そして前世同様に君を愛してる。オレと連れ添ってくれるか？

苦勞はかけると思うけど。」

「モチロンです。サイト様。

例えばどこに落ち延びようが私はアナタの妻でありたいと思います。」

「ありがとう。次はマチルダ。」

「ハイ。サイト様。」

「何時も苦勞かけてばかりだね。

本当に君と一緒に成って良かった。

安心して家を任せられる君が居たからオレは戦って来れた。

これからオレに付いて来て欲しい。オレの妻になつてくれ。マチルダ。」

「モチロンです。私の御主人様。」

「ティファニア。」

見知らぬ土地ばかりに連れて来てしまつてすまなかつた。

でも君の明るさにオレは本当に救われてる。

これからもオレと一緒に歩いて来て貰いたい。

いいか？ティファニア。」

「ありがとうございます。サイト様。

もちろんテファは貴方のモノです。

辛い時は何時でも頼つてください。」

「ありがとう。テファ。最後にタバサ。」

「・・・私のイーデルヴァイ、サイト様。

タバサ、いやシャルロットは貴方に救われた。

貴方が居なかつたら、私はもう生きていない。

どうか私をこのまま連れて行つて欲しい。」

「そうか・・・シャルロット。

ならオレに着いて来い。最後までだ。」

「ありがとう。私のサイト様。

シャルロットは永劫に貴方のモノです。」

「ありがとう。シャルロット・・・。」

「皆、オレはお前達を一人も不幸にしない。皆も仲良く暮らしてくれ。」

「・・・ありがとう。サイト様。」「・・・」

こうしてオレは四人もの妻を持つ身になった。

皆いい子ばかりだし、美しい子ばかりだ。

不満はあるハズは無い。

身体も鍛えてある。多分・・・持つだろう。

その後、ロマリア改めの大ニッポン帝國に大家族が誕生したとか・・・。

s t g 3 9 (閑話)その頃の妻?達。(後書き)

タバサは貰う予定では無かったのですが。
同居してて情が移りました。ハーレムです。

最終章（前書き）

最終章です。

最終章

ロマリアに移住し、落ち着いた生活をオレはしていた。
しかし変だ。

何故オレはココに居るのだ？

力があるうが、何だろうがオレは地球の人間だ。
帰るべき地があるのに・・・。

モウイヤダ、オレハチキュウニカエルベキダ・・・・・・・・・・。

（（サイトよ。お前は帰る気か？））

「ブリミル。オレは地球の人間だ。ハルケギニアに骨を埋めたく無い。
い。

悪いが、そろそろ帰らして貰うぜ。」

（（フッフ。ようやくワシのギアスが解除されたか。
お前が何時、気づくか楽しみにしてたのだ。））

「どう言う事だ？」

「お前をハルケギニアに召喚させる事はワシが決めたのだ。
お前を犠牲にハルケギニアの発展に力を出させたのだ。）（

「そうか。ならもう十分だろう。ガリアの王は殆ど腑抜け。
王女が善政をしてる。ロマリアも何とかした。

トリステインもアルビオンも落ち着いた。そろそろオレを解放してくれ。」

（フッフフ。そうは行かぬのだ。

お前は輪廻転生してでも、再度召喚される運命にある。）

「どう言う事だ？」

（サイト、お前の魂はワシが縛っているのだ。未来永劫。

ハルケギニアが危機に訪れる度に現れるイーデルヴァイの役目としてな。）

「な・何故だ？オレは地球で生まれ育った人間だ。
ハルケギニアには関係無かっただろう。」

（ココの地に生まれた人間ではイーヴァルデイには、なれぬのだ。
幾多の世界に生まれた英雄はすべて異界の育ち。

お前もその運命に囚われている一人だ。）

「い、イヤだ。オレは地球に、
チキュウノニホンニカエルンダ、トモダチトアソブ、アキバニイク、
ガッコウニイク。」

（ふつ、壊れたか。さすがに使いすぎたみたいだな。
サイトよ。そろそろ眠れ。）

サイトの目は空ろとなり、口からは涎が垂れ、
ブツブツと独り言を呟く人形となっていた。

ブリミルはサイトの頭上に手を差し伸べ、

（（また使っ日まで眠れ。イーヴァルデイよ。）

そう告げてサイトは消えた。

今度はどの時代に呼ぶか？とブリミルは一人呟いてた。

イーヴァルデイは竜に向けて剣をふるいましたが、硬い鱗に阻まれ弾かれました。

イーヴァルデイは何度も倒れましたが、そのたびに立ち上がりました。

そして竜を倒した勇者イーデルヴァイは・・・。

イーヴァルデイは平和を取り戻した後、いずこかへと消えていました。

でも何時かまたイーヴァルデイはハルケギニアの危機になると現れるのです。

サイトが消えた後、一時は騒然となったが、平和な世界となったため、

ハルケギニアは数千年に渡り平和な世界を味わった。

サイトは何時か、イーヴァルデイの勇者として語り継がれていた。

また何時か現れるだろう。

世界の危機が始まった時。

眠れ、イーヴァルデイ。

F
i
n
e

最終章（後書き）

もう少し綺麗に終えたかったのですが。

一度リセットしたいので、本作は終了させて戴きます。

サイトがイーヴァルディとして眠る。

虚無も同時に消えてしまいますので、かなりの時代、虚無は出なくなると思います。

次回作では、もう少し頑張ります。

構成未熟、誤字連発の本当に稚拙なSSにお付き合い頂き、ありがとうございました。

では、また。

アホリエッタ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1155u/>

ガンダールヴの復讐

2011年7月23日02時17分発行